



Sun Java™ System

Sun Java Enterprise System 2005Q1 アップグレードと移行

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-2235

Copyright © 2005 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に含まれるテクノロジーに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は <http://www.sun.com/patents> に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

このソフトウェアは SUN MICROSYSTEMS, INC. の機密情報と企業秘密を含んでいます。SUN MICROSYSTEMS, INC. の書面による許諾を受けることなく、このソフトウェアを使用、開示、複製することは禁じられています。

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

この配布には、第三者が開発したソフトウェアが含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、Solaris、JDK、Java Naming and Directory Interface、JavaMail、JavaHelp、J2SE、iPlanet、Duke のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴ、Solaris のロゴ、SunTone 認定ロゴマークおよび Sun ONE ロゴマークは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

Legato および Legato のロゴマークは Legato Systems, Inc. の商標であり、Legato NetWorker は同社の商標または登録商標です。

Netscape Communications Corp のロゴマークは Netscape Communications Corporation の商標または登録商標です。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

目次

表目次	11
はじめに	13
対象読者	13
本書で使用する表記規則	14
表記上の規則	14
記号	14
シェルプロンプト	15
関連マニュアル	16
このドキュメントセット内のマニュアル	16
オンライン上の Sun リソースへのアクセス	18
Sun 技術サポートへの問い合わせ	18
関連するサードパーティの Web サイト	18
ご意見、ご要望の送付先	19
第 1 章 アップグレードの計画	21
アップグレードの必要性の決定	21
アップグレード方法の選択	21
コンポーネント製品の依存性の理解	22
共有製品の依存性の理解	24
既存のソフトウェアの確認	25
アップグレードの準備	25
アップグレードの依存性	26
次の手順	27
第 2 章 共有コンポーネントのアップグレード	29
Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの適用	29

Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの適用	30
Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの削除	31
パッチクラスタの内容	31
Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 8 SPARC	31
Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 9 SPARC	32
Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 9 x86	33
Linux 共有コンポーネント RPM の適用	34
Linux 共有コンポーネント RPM の適用	34
J2SE パッケージのアップグレード	37
Solaris でのアップグレード	37
J2SE 5 JDK の取得	37
J2SE 5 パッケージのインストール	38
J2SE シンボリックリンクの設定	39
デフォルトの Java プラットフォームの設定 (オプション)	40
Linux でのアップグレード	41
自己解凍バイナリのインストール	42
RPM ファイルのインストール	42
J2SE シンボリックリンクの設定	43
追加ファイルのアップグレード	44
Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード	45
第 3 章 旧 Java Enterprise System バージョンからのアップグレード	49
Access Manager のアップグレード	50
Access Manager アップグレードロードマップ	50
Access Manager のアップグレードを始める前に	51
Java Enterprise System 2005Q1 インストールソフトウェアの入手	51
すべての必須パッチの入手	51
必要な情報とパスワードの入手	52
Directory Server データのバックアップ	52
Web コンテナのすべてのカスタマイズファイルのバックアップ	52
共有コンポーネントのアップグレード	52
Web コンテナソフトウェアのアップグレード	53
Directory Server の非 SSL ポートの使用	53
Directory Server の LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード	53
Directory Server のアップグレード (省略可能)	54
Identity Server 2004Q2 (6.2) のアップグレード	54
Identity Server 2004Q2 を Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードする	54
Identity Server 6.1 のアップグレード	59
Identity Server 6.1 を Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードする	59
Access Manager SDK インストールのアップグレード	63
Identity Server 2003Q4 (6.1) SDK 単体インストールをアップグレードする	63
Identity Server 2004Q2 (6.2) SDK 単体インストールをアップグレードする	63
複数インスタンスのアップグレード	65

インスタンスをアップグレードする	65
アップグレードの確認	66
Access Manager の共存	67
Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード	68
Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード 計画	68
Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server の アップグレード	69
Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server を アップグレードする	70
Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server を バックアウトする	73
Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップ グレード	75
Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server を アップグレードする	76
クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server のアップグレード	79
クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server をアップグレードする	79
クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server をバックアウトする	80
Application Server のアップグレード	81
Solaris にバンドルされていたバージョンからのアップグレード	81
その他のすべてのバージョンからのアップグレード	81
クラスタのアップグレード: アップグレードの方法	82
PE および EE のアップグレード時に発生する可能性のある問題の修正	84
ソースサーバー上で定義された追加 HTTP リスナーのターゲット PE サーバーへの移行	84
ソースサーバー上で定義された追加 HTTP リスナーと IIOP リスナーのターゲット EE サーバーへの移行	85
ポートの競合問題の解消	86
単一ドメイン内に複数の証明書データベースパスワードが存在する場合に発生する問題の 解消	86
Calendar Server のアップグレード	87
非クラスタ配備のアップグレード	87
旧 Calendar Server パージョンからのアップグレード	87
クラスタ配備をアップグレードする	89
Delegated Administrator をアップグレードする	89
Calendar Server パッチを削除する	89
Communications Express のアップグレード	90
Communications Express 6 2004Q2 からのアップグレード	90
Communications Express の設定	92
Communications Express 6 2005Q1 設定のバックアウト	94
S/MIME のサポートに必要な共有コンポーネントのインストール	95
Directory Server のアップグレード	96
Directory Proxy Server のアップグレード	96

Instant Messaging のアップグレード	96
旧リリースの Instant Messaging をアップグレードする	97
Message Queue のアップグレード	99
アップグレードと移行の概要	100
アップグレードパスの選択	101
Solaris での Message Queue のアップグレード	104
バージョン情報の確認	104
システム上にインストールされた Message Queue の製品エディションを確認する	105
システム上にインストールされた Message Queue の製品バージョンを確認する	105
Message Queue のアップグレード	105
Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードする	105
Message Queue のアンインストール	107
Solaris 上の Message Queue をアンインストールする	107
Linux でのアップグレードおよび移行	108
Message Queue の RPM インストールバージョンの確認	108
システム上にインストールされた Message Queue のバージョンとエディションを 確認する	108
tar ベースの Message Queue インストールの検索と削除	110
tar ベースの旧 Message Queue インストールを検索して削除する	110
Message Queue データの移行	110
デフォルトの場所にインストールされた Message Queue のブローカインスタンスデータを 新しいディレクトリ var と opt に移行する	112
デフォルト以外の場所 /my_mq にインストールされた Message Queue 3.0.1 のブローカ インスタンスデータを新しいディレクトリ var と opt に移行する	112
Message Queue のアップグレード	113
Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードする	113
sun-mq-compat パッケージのインストール	114
sun-mq-compat パッケージをインストールする	114
Message Queue のアンインストール	114
Linux 上の Message Queue をアンインストールする	114
Messaging Server のアップグレード	115
非クラスタ配備のアップグレード	115
Messaging Server 6 2003Q4 からのアップグレード	115
Messaging Server 6 2004Q2 からのアップグレード	117
Messaging Server 6 2005Q1 の設定	120
クラスタ配備のアップグレード	120
Messaging Server パッチの削除	121
Delegated Administrator へのアップグレード	122
Delegated Administrator のインストール	122
Mobile Access のアップグレード	124
2003Q4 から 2005Q1 へのアップグレード	124
2004Q2 から 2005Q1 へのアップグレード	124
Portal Server のアップグレード	126

パッチおよび RPM へのアクセス	126
Web コンテナのカスタマイズファイルのバックアップ	127
Sun Web コンテナソフトウェアのアップグレード	128
Access Manager のアップグレード	128
Web Server 6 2004Q2 を Web コンテナとして使用する場合	129
管理コンソールのヘルプファイルのバックアップ	129
クライアントディテクションの有効化	129
アップグレードの確認	130
Portal Server のアップグレード	131
Delegated Administrator のアップグレード	134
Sun Cluster のアップグレード	134
アップグレードの要件と制限	135
共有コンポーネントのアップグレード	136
Apache Tomcat 用の共有コンポーネントをアップグレードする	136
Explorer 用の共有コンポーネントをアップグレードする	136
JDMK 用の共有コンポーネントをアップグレードする	137
Sun Java Web Console 用の共有コンポーネントをアップグレードする	137
共通エージェントコンテナ用の共有コンポーネントをアップグレードする	137
Sun Cluster のアップグレード方法の選択	139
非ローリングアップグレード	139
ローリングアップグレード	139
Web Server のアップグレード	140
Web Server をアップグレードする	140
Web Server のパッチを削除する	142
第 4 章 Java Enterprise System より前のバージョンからのコンポーネントのアップグレード	143
Access Manager の移行に関する情報	144
Administration Server の移行に関する情報	144
Application Server の移行に関する情報	145
Calendar Server の移行に関する情報	145
Calendar Server の移行ユーティリティの概要	146
Calendar Server Version 5.1.1 より前のバージョンの場合	146
Calendar Server Version 5.1.1 の場合	146
移行ユーティリティの概要	147
移行に関する Web サイト	148
ics2migrate	149
移行の要件	149
移行されるデータ	149
移行手順	150
db_upgrade ユーティリティを実行する	151
ics2migrate を実行する	152
移行例	154
次に進む節	156

Directory Server の移行に関する情報	156
Directory Proxy Server の移行に関する情報	157
Directory Access Router 5.0 または 5.0 SP1 からのアップグレード	157
移行の準備	157
移行の実行	157
失敗した移行からの回復	158
Instant Messaging の移行に関する情報	159
Message Queue の移行に関する情報	159
Message Queue 3.0.1 から Message Queue 3 2005Q1 (3.6) へのアップグレード	159
Messaging Server の移行に関する情報	160
Portal Server および Portal Server, Secure Remote Access の移行に関する情報	160
Sun Cluster の移行に関する情報	160
Sun Remote Services Net Connect の移行に関する情報	161
Web Server の移行に関する情報	161
Web Server 6.0 からのアップグレード	161
Web Server 4.1 からのアップグレード	161
共有コンポーネントのアップグレード情報	162
J2SE プラットフォームのアップグレード情報	162
第 5 章 Java Enterprise System 2005Q1 互換性情報	165
Access Manager	166
Application Server	167
Instant Messaging	168
Message Queue	170
プラットフォームの問題	170
Solaris	170
Linux	170
互換性の問題	171
プロトコルの互換性	171
ブローカの互換性	171
管理されたオブジェクトの互換性	173
管理ツールの互換性	174
クライアントの互換性	174
Messaging Server	176
Communications Express	176
Web Server	177
付録 A 以前の Java Enterprise System リリース	179
Java ES 2003Q4	179
コンポーネント製品	179
共有コンポーネント	180
Java ES 2004Q2	181

コンポーネント製品	181
共有コンポーネント	182
Java ES 2005Q1	184
選択可能なコンポーネント	184
共有コンポーネント	186
用語集	189
索引	191

表目次

表 1	表記上の規則	14
表 2	記号の表記規則	14
表 3	シェルプロンプト	15
表 4	Java Enterprise System ドキュメント	16
表 1-1	コンポーネント製品間の依存性	22
表 1-2	共有コンポーネント製品の依存性	24
表 2-1	必須共有コンポーネントパッチ Solaris 8 SPARC	31
表 2-2	必須共有コンポーネントパッチ Solaris 9 SPARC	32
表 2-3	必須共有コンポーネントパッチ Solaris 9 x86	33
表 2-4	共有コンポーネント RPM	34
表 2-5	Directory Server Setup Perl スクリプトのパッチ	45
表 3-1	Access Manager 6 2005Q1 アップグレードロードマップ	50
表 3-2	Access Manager アップグレードパッチ	55
表 3-3	Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードするためのパッチ	70
表 3-4	Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードするためのパッチ	76
表 3-5	Calendar Server の共有コンポーネントのアップグレードパッチ	87
表 3-6	Calendar Server の依存パッチ	88
表 3-7	Calendar Server のアップグレードパッチ	88
表 3-8	Communications Express のアップグレードパッチ	91
表 3-9	Java Enterprise System アップグレードシナリオ	96
表 3-10	アップグレードと移行をサポートする Message Queue のバージョン	100
表 3-11	Message Queue 3 2005Q1 (3.6) のアップグレードおよび移行のパス	101
表 3-12	Message Queue に対して返される SUNW_PRODVERS の値	105
表 3-13	Message Queue RPM バージョン名	109
表 3-14	Message Queue のデフォルトのデータの場所	111

表 3-15	mqmigrate スクリプトの basedir オプション	112
表 3-16	Messaging Server の共有コンポーネントのアップグレードパッチ	117
表 3-17	Messaging Server のアップグレードパッチ	118
表 3-18	Delegated Administrator のパッチ	123
表 3-19	Mobile Access の Solaris パッチ	124
表 3-20	Mobile Access Linux RPM	125
表 3-21	Sun Java System Portal Server 2005Q1 の Solaris パッチ	126
表 3-22	Sun Java System Portal Server 2005Q1 の Linux 用のパッチと RPM	127
表 3-23	Web Server の必須共有コンポーネント	141
表 3-24	Web Server のパッチ	141
表 4-1	Calendar Server の移行ユーティリティの実行	147
表 4-2	Calendar Server 2.x データの移行	149
表 4-3	LDAP 属性の移行	150
表 4-4	ics2migrate オプション	153
表 5-1	Access Manager の互換性	166
表 5-2	Application Server 8.1 の互換性の問題	167
表 5-3	Instant Messaging 7 2005Q1 の互換性の問題	168
表 5-4	Message Queue 3 2005Q1 と Message Queue 3.0.x データの互換性	173
表 5-5	Messaging Server 6 の互換性	176
表 5-6	Unified Web Client の互換性	176
表 5-7	Web Server 6 の互換性	177

はじめに

『Java Enterprise System アップグレードと移行』には、Sun Solaris™ オペレーティングシステム (Solaris OS) または Linux オペレーティング環境における Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアのアップグレードに必要な情報が含まれています。

この章で説明する項目は次のとおりです。

- 13 ページの「対象読者」
- 14 ページの「本書で使用する表記規則」
- 16 ページの「関連マニュアル」
- 18 ページの「オンライン上の Sun リソースへのアクセス」
- 18 ページの「Sun 技術サポートへの問い合わせ」
- 18 ページの「関連するサードパーティの Web サイト」
- 19 ページの「ご意見、ご要望の送付先」

このマニュアルで解説しているタスクを実行する前に、『Java Enterprise System 2005Q1 リリースノート』(<http://docs.sun.com/doc/819-0815?l=ja>)をお読みください。

対象読者

本書は、システム管理者、および Java ES ソフトウェアのアップグレードが必要なソフトウェア技術者を対象としています。

本書は、次の事項に習熟している方を対象に記述されています。

- エンタープライズレベルのソフトウェア製品のインストール
- サポートする Java ES プラットフォーム上のシステム管理およびネットワーク
- クラスタリングモデル (クラスタリングソフトウェアをインストールする場合)

- インターネットと World Wide Web

本書で使用する表記規則

次の表は、本書で使用する表記規則について説明します。

表記上の規則

次の表は、本書で使用する表記上の規則について説明したものです。

表 1 表記上の規則

表記	意味	例
AaBbCc123 (モノスペース)	API および言語の要素、HTML タグ、Web サイトの URL、コマンド名、ファイル名、ディレクトリパス名、画面出力の表示、サンプルコード。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail.
AaBbCc123 (太字のモノスペース)	ユーザーが入力するテキストを強調し、コンピュータからの画面出力と区別します。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i> (イタリック)	マニュアルのタイトル、新規用語、強調表示する語句。 実際の名前または値によって置き換えられるコマンドまたはパス名の可変部分。	これらを <i>class</i> オプションと呼びます。 ファイルは <i>install-dir/bin</i> ディレクトリにあります。

記号

次の表は、このマニュアルで使用される記号の表記規則を示しています。

表 2 記号の表記規則

記号	説明	例	意味
[]	省略できるコマンドオプションを含みます。	ls [-l]	-l オプションは省略可能です。

表 2 記号の表記規則 (続き)

記号	説明	例	意味
{ }	必須コマンドオプションの選択肢を含みます。	-d {y n}	-d オプションは、引数 y または n のいずれかを使用する必要があります。
-	同時に押すキーを連結します。	Control-A	Ctrl キーと A キーを同時に押します。
+	連続して押すキーを連結します。	Ctrl+A+N	Ctrl キーを押し、放してから、以後のキーを続けて押します。
>	グラフィカルユーザーインタフェースで選択するメニュー項目を示します。	「ファイル」>「新規」>「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから、「テンプレート」を選択します。

シェルプロンプト

次の表は、このマニュアルで使用されるシェルプロンプトを示しています。

表 3 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
UNIX または Linux の C シェル	<i>machine-name%</i>
UNIX または Linux の C シェルのスーパーユーザー	<i>machine-name#</i>
UNIX または Linux の Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
UNIX または Linux の Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	#
Windows のコマンド行	C:\\$

関連マニュアル

<http://docs.sun.com>SM Web サイトでは、Sun テクニカルマニュアルにオンラインでアクセスできます。特定のマニュアルのタイトルまたは件名のアーカイブを参照し、検索できます。

このドキュメントセット内のマニュアル

Java ES マニュアルは、PDF (Portable Document Format) 形式および HTML (Hypertext Markup Language) 形式のオンラインファイルとして用意されています。どちらの形式のファイルも、障害を持つユーザーにも参照可能です。Sun™ のマニュアルには、次の Web サイトからアクセスできます。

<http://docs.sun.com/app/docs?l=ja>

Java ES マニュアルには、システム全体に関する情報とそのコンポーネントに関する情報が含まれます。このマニュアルには次の場所からアクセスできます。

<http://docs.sun.com/prod/entsys.05q1>

次の表は、Java ES ドキュメントセットに含まれる、システムレベルのマニュアルを示しています。左の列は各ドキュメントの名称とアクセスできる URL、右の列はドキュメントの簡単な説明を示しています。

表 4 Java Enterprise System ドキュメント

マニュアル名	内容
『Sun Java Enterprise System リリースノート』 http://docs.sun.com/doc/819-0815?l=ja	既知の問題など、Java Enterprise System に関する最新の情報が記載されています。これ以外に、コンポーネントごとにリリースノートがあります。
『Sun Java Enterprise System ドキュメントロードマップ』 http://docs.sun.com/doc/819-1912?l=ja	Java Enterprise System に関するマニュアルについて説明しています。ここからコンポーネントに関連するマニュアルにリンクすることができます。
『Sun Java Enterprise System 技術の概要』 http://docs.sun.com/doc/819-1926?l=ja	Java Enterprise System の技術的および概念的な基礎について説明します。コンポーネント、アーキテクチャ、プロセス、および機能について説明しています。

表 4 Java Enterprise System ドキュメント (続き)

マニュアル名	内容
『Sun Java Enterprise System 配備計画ガイド』 http://docs.sun.com/doc/819-1919?l=ja	Java Enterprise System に基づく企業配備ソリューションの計画および設計に関する情報を提供します。配備の計画および設計に関する基本的概念と原則を示し、ソリューションのライフサイクルについて説明し、Java Enterprise System に基づくソリューションを計画する際に使用する高度な例と戦略を提供します。
『Sun Java Enterprise System ユーザーの管理』 http://docs.sun.com/source/819-2228?l=ja	Java Enterprise System ソリューションのユーザーに関する情報を計画、配備、および管理する上で役立ちます。『Sun Java Enterprise System 配備計画ガイド』を補完し、ソリューションのライフサイクルの各段階におけるユーザー管理の課題について説明します。
『Sun Java Enterprise System Deployment Example Series: Evaluation Scenario』 http://docs.sun.com/doc/819-0059	任意のシステムに Java Enterprise System をインストールし、共有され、ネットワーク化されたコアとなるサービスを確立し、確立したサービスにアクセス可能なユーザーアカウントを設定する方法について説明します。
『Sun Java Enterprise System インストールガイド』 http://docs.sun.com/doc/819-0808?l=ja	Solaris™ オペレーティングシステムまたは Linux オペレーティングシステムに対する Java Enterprise System のインストール手順について説明します。インストールするコンポーネントを選択する方法、インストールしたコンポーネントを設定する方法、および設定したコンポーネントが正常に機能するかどうかを確認する方法について説明します。
『Sun Java Enterprise System アップグレードと移行』 http://docs.sun.com/doc/819-2235?l=ja	Solaris™ オペレーティングシステムまたは Linux オペレーティング環境における Java Enterprise System のアップグレードに必要な情報および手順について説明します。
『Sun Java Enterprise System 用語集』 http://docs.sun.com/doc/819-1933?l=ja	Java Enterprise System のドキュメントで使用される用語について説明します。

オンライン上の Sun リソースへのアクセス

製品のダウンロード、プロフェショナルサービス、パッチとサポート、および開発者向け追加情報については、次の Web サイトにアクセスしてください。

- ダウンロードセンター
<http://www.sun.com/software/download/>
- プロフェショナルサービス
<http://www.sun.com/service/sunjavasystem/sjssservicesuite.html>
- Sun Enterprise サービス、Solaris パッチ、およびサポート
<http://sunsolve.sun.com/>
- 開発者向け情報
<http://jp.sun.com/developers/>

次の場所には、Java ES およびそのコンポーネントに関する情報が用意されています。

<http://www.sun.com/software/javaenterprisesystem/index.html>

Sun 技術サポートへの問い合わせ

製品のドキュメントで解決できない、本製品に関する技術的な質問の問い合わせ先については、<http://jp.sun.com/service/support/> を参照してください。

関連するサードパーティの Web サイト

Sun は、このマニュアルに記載されているサードパーティ Web サイトの利用について責任を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆる内容、広告、製品、およびその他の資料を保証するものではなく、責任または義務を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆるコンテンツ、製品、またはサービスによって生じる、または生じたと主張される、または使用に関連して生じる、または信頼することによって生じる、いかなる損害または損失についても責任または義務を負いません。

ご意見、ご要望の送付先

Sun ではマニュアルの品質向上のため、お客様のご意見、ご要望をお受けしております。

コメントをお送りになる場合は、<http://docs.sun.com/app/docs?l=ja> にアクセスして「コメントの送信」をクリックしてください。オンラインフォームで、ドキュメントのタイトルと部品番号を入力します。部品番号は、マニュアルのタイトルページまたは最上部に記載されている 7 桁または 9 桁の番号です。

ご意見、ご要望の送付先

アップグレードの計画

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアのアップグレードに必要なタスクと意思決定について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [21 ページの「アップグレードの必要性の決定」](#)
- [25 ページの「アップグレードの準備」](#)
- [27 ページの「次の手順」](#)

アップグレードの必要性の決定

次に、コンポーネント製品をどのように組み合わせてアップグレードするかを決定する上で役立つ情報について説明します。

- [「アップグレード方法の選択」](#)
- [22 ページの「コンポーネント製品の依存性の理解」](#)
- [24 ページの「共有製品の依存性の理解」](#)
- [25 ページの「既存のソフトウェアの確認」](#)

アップグレード方法の選択

特定のコンポーネント製品を Java Enterprise System 2005Q1 レベルにアップグレードする方法は、現在使用しているシステムのバージョンによって異なります。

以前の Java Enterprise System バージョン - 以前の Java Enterprise System バージョンから製品をアップグレードする方法については、[49 ページの「旧 Java Enterprise System バージョンからのアップグレード」](#)の該当する手順を参照してください。

Java Enterprise System 以前のバージョン - Java Enterprise System 以前のバージョンから製品をアップグレードする方法については、[143 ページの「Java Enterprise System より前のバージョンからのコンポーネントのアップグレード」](#)の該当する手順を参照してください。

コンポーネント製品の依存性の理解

Java Enterprise System をアップグレードするための最良の手順を決定するには、コンポーネント製品がどのように相互に依存しているかを理解することが重要です。表 1-1 は Java Enterprise System コンポーネント製品の依存関係を示します (J2SE などの共有コンポーネントの依存関係は含まれていない)。この表を利用して、アップグレードセットの依存連鎖のリストやダイアグラムを作成できます。左の列はコンポーネント製品を示し、中央の列は各コンポーネントに必要なコンポーネント製品を示し、右の列は必要なコンポーネントをローカルマシンにインストールする必要があるかどうかを示します。

表 1-1 コンポーネント製品間の依存性

コンポーネント製品	必要なコンポーネント製品	ローカルへのインストールの必要性の有無
Access Manager	Directory Server	なし
	J2EE Web コンテナ、次のいずれか <ul style="list-style-type: none"> • Application Server • Web Server • BEA WebLogic Server • IBM WebSphere Application Server 	あり
Administration Server	Directory Server	なし
Application Server	Message Queue	あり
	Web Server (ロードバランサ用に必要)	あり
Calendar Server	Directory Server	なし

表 1-1 コンポーネント製品間の依存性 (続き)

コンポーネント製品	必要なコンポーネント製品	ローカルへのインストールの必要性の有無
Communications Express	Access Manager または Access Manager SDK	あり
	Messaging Server	なし
	J2EE Web コンテナ、次のいずれか <ul style="list-style-type: none"> • Application Server • Web Server 	あり
Directory Proxy Server	Administration Server	あり
Directory Server	Administration Server は最新のリリースのパッチが必要です。	適用外
Instant Messaging	Access Manager または Access Manager SDK	あり
Message Queue	なし	適用外
Messaging Server	Directory Server	なし
	Administration Server	あり
Portal Server	Access Manager または Access Manager SDK	あり
	J2EE Web コンテナ、次のいずれか <ul style="list-style-type: none"> • Application Server • Web Server • BEA WebLogic Server • IBM WebSphere Application Server 	あり
Portal Server Secure Remote Access	Portal Server	あり
	Access Manager または Access Manager SDK	あり
Sun Cluster	なし	適用外
Sun Remote Services Net Connect	なし	適用外
Web Server	なし	適用外

Access Manager、すべての Communications Express および Portal Server には Web コンテナが必要です。すべての場合に、Application Server または Web Server を Web コンテナとして使用することができます。Access Manager および Portal Server は、BEA WebLogic Server または IBM WebSphere Application Server を使用することもできます。

共有製品の依存性の理解

表 1-2 は、Java Enterprise System コンポーネント製品と J2SE などの共有コンポーネントの依存関係を示します。この表を利用して、アップグレードセットの依存連鎖のリストやダイアグラムを作成できます。左の列はコンポーネント製品を示し、中央の列は各コンポーネント製品に必要な共有コンポーネントを示します。

表 1-2 共有コンポーネント製品の依存性

コンポーネント製品	必要な共有コンポーネント
Access Manager	JSS NSPR NSS JATO JAXP JAF JAVAMAIL WSCL SAAJ JAXB JAXR JAXRPC LJDK
Administration Server	ICU NSPR NSS JSS SASL LDAP-C-SDK LDAP-JDK
Application Server	SUNWant SUNWicu JDK 1.5.01 SUNWjaf SUNWjato SUNWjdmk-runtime SUNWjhrt SUNWjmail SUNWmcon SUNWmctag HA データ ベース管理エージェント
Calendar Server	ICU NSPR NSS JSS
Communications Express	JATO JATODMO JATODOC JAXP JCAPI SUNWljdk
Directory Proxy Server	ICU NSPR NSS JSS SASL LDAP-C-SDK LDAP-JDK
Directory Server	JSS NSPR NSS
Message Queue	NSS NSPR SAAJ
Messaging Server	ICU NSPR NSS JSS LDAP-C-SDK
Portal Server	JSS NSPR NSS
Portal Server Secure Remote Access	JSS NSPR NSS
Sun Cluster	JDMK、共通エージェントコンテナ、Sun Web コ ンソール、Sun Explorer
Web Server	JSS NSPR NSS SunOS ICU KT Search Engine

共有コンポーネントの完全なリストおよび説明については、29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照してください。

既存のソフトウェアの確認

アップグレードを行う前に、インストールされているソフトウェアのバージョンを確認することをお勧めします。

prodreg や pkginfo などのコマンドを使用して、インストールされているソフトウェアを調べることができます。

注 この情報を得るために、インストーラだけを頼りにすることは避けてください。インストール済みのソフトウェアについて、システムを独自に調査して確認することも必要です。

アップグレードの準備

サーバーをアップグレードする上で、注意すべき事項は次のとおりです。

- 製品をアップグレードする前に、『Java Enterprise System 2005Q1 リリースノート』(<http://docs.sun.com/doc/819-0815?l=ja>)、およびアップグレードする製品のリリースノートを参照します。
- 次の SunSolve Web サイトから必要なパッチを取得します。
<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/patch-access>
- アップグレード前に、すべてのデータのバックアップを行なってください。
- Java Enterprise System 2005Q1 と Java Enterprise System 2005Q1 以前のコンポーネント製品を同じシステムで実行しないでください。
- 同一システムにインストールするすべてのコンポーネントは、同一の Java Enterprise System 2005Q1 レベルにアップグレードする必要があります。
- 他の Java Enterprise System コンポーネント製品の前に、共有コンポーネントをアップグレードします (29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照)。
- 以前の Java Enterprise System のコンポーネント製品とそれぞれの改訂については、179 ページの「以前の Java Enterprise System リリース」を参照してください。
- システムに適した最新の Solaris パッチクラスタを適用します (50 ページの「Access Manager のアップグレード」を参照)。

- Sun Cluster がインストールされている環境では、Solaris 8 ユーザー向けの Sun Cluster 3.1 パッチ情報ドキュメント、または Solaris 9 ユーザー向けの Sun Cluster 3.1 パッチ情報ドキュメントが必要な場合があります。Sun Cluster ソフトウェアの PatchPro ツールにアクセスするには、<http://www.sun.com/PatchPro/> に移動し、「Sun Cluster」をクリックして、Interactive Mode または Expert Mode のいずれかを選択します。PatchPro ツールの手順に従って、クラスタの設定の説明を参照し、パッチをダウンロードします。

アップグレードの依存性

多くのコンポーネント製品は、その製品をアップグレードする上で別の製品のアップグレードが必要となります。アップグレードプロセスを決定する依存性連鎖のリスト化またはチャート化に必要な情報は、21 ページの「アップグレードの必要性の決定」に記載されています。

次に、アップグレードが必要な順序で製品のリストを示します。状況に応じて適切な製品を特定し、この順序でアップグレードしてください。

1. 共有コンポーネント (29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照)
2. Sun Cluster (134 ページの「Sun Cluster のアップグレード」を参照)
3. Administration Server (68 ページの「Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード」を参照)
4. Directory Server (96 ページの「Directory Server のアップグレード」を参照)
5. Directory Proxy Server (96 ページの「Directory Proxy Server のアップグレード」を参照)
6. Web Server (140 ページの「Web Server のアップグレード」を参照)
7. Message Queue (99 ページの「Message Queue のアップグレード」を参照)
8. Application Server (81 ページの「Application Server のアップグレード」を参照)
9. Access Manager (以前の Identity Server) (50 ページの「Access Manager のアップグレード」を参照)
10. Messaging Server (115 ページの「Messaging Server のアップグレード」を参照)
11. Calendar Server (87 ページの「Calendar Server のアップグレード」を参照)
12. Communications Express (90 ページの「Communications Express のアップグレード」を参照)
13. Portal Server (126 ページの「Portal Server のアップグレード」を参照)
14. Instant Messaging (96 ページの「Instant Messaging のアップグレード」を参照)

15. Mobile Access (124 ページの「[Mobile Access のアップグレード](#)」を参照)
16. Sun Cluster エージェント (134 ページの「[Sun Cluster のアップグレード](#)」を参照)

次の手順

該当するアップグレードの章に進みます。

- 29 ページの「[共有コンポーネントのアップグレード](#)」
- 49 ページの「[旧 Java Enterprise System バージョンからのアップグレード](#)」
- 143 ページの「[Java Enterprise System より前のバージョンからのコンポーネントのアップグレード](#)」

次の手順

共有コンポーネントのアップグレード

この章では、以前の Java Enterprise System のバージョンから Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェア 2005Q1 リリースに、共有コンポーネントをアップグレードする手順について説明します。この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 29 ページの「Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの適用」
- 34 ページの「Linux 共有コンポーネント RPM の適用」
- 37 ページの「J2SE パッケージのアップグレード」
- 44 ページの「追加ファイルのアップグレード」
- 45 ページの「Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード」

注 Sun Cluster の 2005Q1 リリースには独自の共有コンポーネントがあります。Sun Cluster のアップグレード手順については、136 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照してください。

Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの適用

このリリースには 3 つの共有コンポーネントクラスタがあります。実行する Solaris のバージョンに応じて、これらの 1 つまたは場合によっては複数のクラスタを適用する必要があります。次のパッチを適用します。

- Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 8 SPARC
- Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 9 SPARC
- Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 9 x86

各パッチクラスタの内容については、31 ページの「パッチクラスタの内容」を参照してください。

注 共有コンポーネントをアップグレードする前に、最新の推奨セキュリティパッチクラスタなどの OS パッチを適用する必要がある場合があります。

► **Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの適用**

1. 次の SunSolve の Web サイトから共有コンポーネントを取得できます。

<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/patch-access>

注 共有コンポーネントパッチクラスタを適用するには、まずクラスタをダウンロードし、解凍する必要があります。ユーザー環境としてのスーパーユーザー環境に入らないように、`su` ではなく「`su -`」を使用してスーパーユーザーになります。

2. `su -` を実行し、スーパーユーザーのパスワードを入力して `root` になります。
3. 重要な指示とパッチに関する最新の情報が記載された `README` を参照します。

注 共有コンポーネントパッチクラスタをインストールする前に、次のパッケージを削除する必要があります。SUNWjato、SUNWjaxp、SUNWjaf、SUNWjmail、SUNWxrgt、SUNxrpct、および SUNWxsrt。SUNWxrgt は IS 6.2 がインストールされた Solaris 8 には存在しません。

これらのパッケージを削除するには、次のコマンドを実行します。

```
pkgrm SUNWjato SUNWjaxp SUNWjaf SUNWjmail SUNWxrgt SUNxrpct SUNWxsrt
```

これらのパッケージのインストール後、共有コンポーネントパッチクラスタのインストールを進めることができます。

4. `install_cluster` スクリプトを実行し、適切なすべてのパッチをインストールします。

`README` には、パッチのインストールに関する具体的な指示が記載されています。

注 オペレーティングシステム固有の Java Enterprise System 2005Q1 必須共有コンポーネントパッチクラスタをインストールします。

必要に応じてパッチを個別に入手し、インストールすることができます (31 ページの「[パッチクラスタの内容](#)」を参照)。この場合は、SunSolve から各パッチを個別にダウンロードし、そのパッチのインストール指示に従います。

▶ Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの削除

1. `patchrm(1m)` コマンドを使用して、該当するパッチをバックアウトします。

注 パッケージが含まれたパッチ(「[パッチクラスタの内容](#)」を参照)には、使用するシステムのインストールパッケージが含まれています。`pkgrm(1m)` コマンドを使用して、パッケージを削除します。

パッチクラスタの内容

[表 2-1](#) から [表 2-3](#) は、共有コンポーネントクラスタの内容と説明を示しています。

注 ここで紹介するすべてのパッチは、アップグレードに必要な最小バージョン番号で示されています。このマニュアルの発行後により新しいバージョンのパッチが公開されている可能性もあります。新しいバージョンは、パッチのバージョン番号の最後が異なります。例: 123456-04 は 123456-02 より新しいバージョンですが、パッチ ID は同じです。注意事項については、各パッチの README ファイルを参照してください。

Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 8 SPARC

この必須コンポーネントパッチクラスタには、次のファイルが含まれています。

`java_es_required_comp_patches_solaris8-sparc.zip`

`java_es_required_comp_patches_solaris8-sparc.README`

[表 2-1](#) は、このクラスタに含まれるパッチとその説明を示しています。

表 2-1 必須共有コンポーネントパッチ Solaris 8 SPARC

パッチ ID	説明
114045-12	Security 3.3.4.x
115328-01	Simple Authentication and Security Layer
117722-10	Security 3.9.x
116103-06	SunOS: International Components for Unicode Patch
117024-03	KT Search Engine
116837-02	LDAP C SDK 5.11
117722-09	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0

表 2-1 必須共有コンポーネントパッチ Solaris 8 SPARC (続き)

パッチ ID	説明
118605-01	パッケージを含む JAXP パッチ
118607-01	パッケージを含む JavaMail パッチ
118609-01	パッケージを含む Java Activation Framework パッチ
118611-01	パッケージを含む JATO パッチ
118613-01	パッケージを含む JCAPI パッチ
118615-01	パッケージを含む LDAP JDK パッチ
118618-01	パッケージを含む JSS パッチ
118661-01	パッケージを含む JAXR パッチ
118662-01	パッケージを含む JAX-RPC パッチ
118663-01	パッケージを含む JAXB パッチ
118664-01	パッケージを含む Java パッチ用の Attachments API を使用する SOAP
118665-01	パッケージを含む Web Services Components パッチ用の Common Libraries

Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 9 SPARC

この必須コンポーネントパッチクラスタには、次のファイルが含まれています。

`java_es_required_comp_patches_solaris9-sparc.zip`

`java_es_required_comp_patches_solaris9-sparc.README`

表 2-2 は、このクラスタに含まれるパッチとその説明を示しています。

表 2-2 必須共有コンポーネントパッチ Solaris 9 SPARC

パッチ ID	説明
114049-12	Security 3.3.4.x
114677-08	SunOS 5.9: International Components for Unicode Patch
115342-01	Simple Authentication and Security Layer (2.01)
117724-10	Security 3.9.x
117024-03	KT Search Engine
116837-02	LDAP C SDK 5.11
117724-09	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0

表 2-2 必須共有コンポーネントパッチ Solaris 9 SPARC (続き)

パッチ ID	説明
118605-01	パッケージを含む JAXP パッチ
118607-01	パッケージを含む JavaMail パッチ
118609-01	パッケージを含む Java Activation Framework パッチ
118611-01	パッケージを含む JATO パッチ
118613-01	パッケージを含む JCAPI パッチ
118615-01	パッケージを含む LDAP JDK パッチ
118618-01	パッケージを含む JSS パッチ
118661-01	パッケージを含む JAXR パッチ
118662-01	パッケージを含む JAX-RPC パッチ
118663-01	パッケージを含む JAXB パッチ
118664-01	パッケージを含む Java パッチ用の Attachments API を使用する SOAP
118665-01	パッケージを含む Web Services Components パッチ用の Common Libraries

Java Enterprise System 必須コンポーネントパッチ Solaris 9 x86

この必須コンポーネントパッチクラスタには、次のファイルが含まれています。

`java_es_required_comp_patches_solaris9-x86.zip`

`java_es_required_comp_patches_solaris9-x86.README`

表 2-3 は、このクラスタに含まれるパッチとその説明を示しています。

表 2-3 必須共有コンポーネントパッチ Solaris 9 x86

パッチ ID	説明
114050-12	Security 3.3.4.x
114678-08	SunOS 5.9_x86: International Components for Unicode Patch
117725-10	Security 3.9.x
117024-03	KT Search Engine
116838-02	LDAP C SDK 5.11
117725-09	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0
118605-01	パッケージを含む JAXP パッチ

表 2-3 必須共有コンポーネントパッチ Solaris 9 x86 (続き)

パッチ ID	説明
118607-01	パッケージを含む JavaMail パッチ
118609-01	パッケージを含む Java Activation Framework パッチ
118611-01	パッケージを含む JATO パッチ
118613-01	パッケージを含む JCAPI パッチ
118615-01	パッケージを含む LDAP JDK パッチ
118619-01	パッケージを含む JSS パッチ
118661-01	パッケージを含む JAXR パッチ
118662-01	パッケージを含む JAX-RPC パッチ
118663-01	パッケージを含む JAXB パッチ
118664-01	パッケージを含む Java パッチ用の Attachments API を使用する SOAP
118665-01	パッケージを含む Web Services Components パッチ用の Common Libraries

Linux 共有コンポーネント RPM の適用

Linux システムでは、多くのコンポーネント製品が Java Enterprise System 2004Q2 共有コンポーネントの更新を必要とします。適切な RPM をダウンロードして、システムにロードする必要があります。次の項で、これらの手順の詳細を説明します。

▶ Linux 共有コンポーネント RPM の適用

1. Java Enterprise System 2005Q1 配布から必要な RPM を取得します。通常は次のディレクトリに格納されています。

```
Linux_x86/Product/shared_components/Packages/
```

2. すべての必須共有コンポーネント RPM を取得します。表 2-4 は、利用可能な共有コンポーネント RPM を示しています。

表 2-4 共有コンポーネント RPM

コンポーネント	RPM 名とバージョン
ICU	sun-icu-2.1-9.i386.rpm
NSPR	sun-nspr-4.5.1-2.i386.rpm
NSPR-DEVEL	sun-nspr-devel-4.5.1-2.i386.rpm

表 2-4 共有コンポーネント RPM (続き)

コンポーネント	RPM 名とバージョン
NSS	sun-nss-3.9.5-1.i386.rpm
NSS-DEVEL	sun-nss-devel-3.9.5-1.i386.rpm
JSS	sun-jss-4.0-5.i386.rpm
SASL	sun-sasl-2.02-2.i386.rpm
LDAP-C-SDK	sun-ldapcsdk-5.12-3.i386.rpm
LDAP-JDK	sun-ljdk-4.17-3.i386.rpm
JAXB	sun-jaxb-1.0.4-6.i386.rpm
JAXP	sun-jaxp-1.2.6-4.i386.rpm
JAXR	sun-jaxr-1.0.7-5.i386.rpm
JAXRPC	sun-jaxrpc-1.1.2-41.i386.rpm
SAAJ	sun-saaj-1.2.1-6.i386.rpm
WSCL	sun-wscl-1.0-4.i386.rpm
ktsearch	sun-ktsearch-1.3-3.noarch.rpm
JATO	SUNWjato-2.1.4.i386.rpm
SUNWmcon	SUNWmcon-2.2-1.i386.rpm
JDK 5.0	jdk-1_5_0_01-linux-i586.rpm
ANT	sun-ant-1.5.4-25.i386.rpm
JAF	sun-jaf-1.0.3-5.i386.rpm
Javahelp	sun-javahelp-2.0-fcs.i586.rpm
Javamail	sun-javamail-1.3.2-34.i386.rpm
JDMK	sun-jdmk-runtime-5.1-34.i386.rpm
HADB:	sun-hadb-a-4.4.1-7.rpm sun-hadb-c-4.4.1-7.rpm sun-hadb-e-4.4.1-7.rpm sun-hadb-i-4.4.1-7.rpm sun-hadb-j-4.4.1-7.rpm sun-hadb-m-4.4.1-7.rpm sun-hadb-o-4.4.1-7.rpm sun-hadb-s-4.4.1-7.rpm sun-hadb-v-4.4.1-7.rpm sun-hadb-x-4.4.1-7.rpm

3. rpm -Uvh コマンドを使用して、状況に対応するすべての RPM (LDAP JDK を除く) をインストールします (既存の rpm を更新する場合、-U オプション、冗長モードの場合、-vh オプション)。製品別のリストについては、[24 ページの「共有製品の依存性の理解」](#)を参照してください。次に例を示します。

```
# cd <rpm location>
# rpm -Uvh sun-icu-2.1-9.i386.rpm
# rpm -Uvh sun-nspr-4.5.1-2.i386.rpm
# rpm -Uvh sun-nss-3.9.4-1.i386.rpm
# rpm -Uvh sun-jss-4.0-5.i386.rpm
# rpm -Uvh sun-sasl-2.02-2.i386.rpm
# rpm -Uvh sun-ldapcsdk-5.12-3.i386.rpm
```

LDAP-JDK は新品の rpm であるため、rpm -ivh コマンドを使用してインストールします (インストールする場合、-i オプション、冗長モードの場合、-vh オプション)。

```
# rpm -ivh sun-ljdk-4.17-3.i386.rpm
```

注 rpm -Fvh コマンドを 1 度使用して、次の 4 つの RPM をこの順序でインストールします。

```
sun-nspr
sun-nspr-devel
sun-nss
sun-nss-devel
```

次に例を示します。

```
# rpm -Fvh sun-nspr-4.5.1-2.i386.rpm
sun-nspr-devel-4.5.1-2.i386.rpm
sun-nss-devel-3.9.5-1.i386.rpm
sun-nss-3.9.5-1.i386.rpm
```

注 アップグレードした共有コンポーネント RPM の削除はサポートされていません。

J2SE パッケージのアップグレード

この項では、Solaris および Linux 環境で、J2SE™ platform 5.0 (Java 2 Platform, Standard Edition) にアップグレードする手順について説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [37 ページの「Solaris でのアップグレード」](#)
- [41 ページの「Linux でのアップグレード」](#)

Solaris でのアップグレード

Solaris プラットフォームで、J2SE™ platform 5.0 (Java 2 Platform, Standard Edition) にアップグレードするには、次の手順に従います。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [37 ページの「J2SE 5 JDK の取得」](#)
- [38 ページの「J2SE 5 パッケージのインストール」](#)
- [39 ページの「J2SE シンボリックリンクの設定」](#)
- [40 ページの「デフォルトの Java プラットフォームの設定 \(オプション\)」](#)

➤ J2SE 5 JDK の取得

1. 次のいずれかのソースから J2SE 5 を取得します。
 - a. Java Enterprise System 2005Q1 コンポーネントとの動作が検証された J2SE の新しいバージョンは、Java Enterprise System 2005Q1 配布の次のディレクトリに格納されています。

```
Solaris_<arch>/Product/shared_components/Packages where <arch> =  
sparc|x86
```

J2SE を構成するのは、SUNwj5* という名前が付けられた一連のパッケージです。

- b. 次の Sun java.sun.com の Web サイトから、J2SE 5 JDK をダウンロードします。

<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/ja/download.html>

インストールの手順とリリースノートを参照してください。「JDK のダウンロード」をクリックし、手順に従って適切なソフトウェアのバージョンを取得します。

次のコマンドを実行して、圧縮された tar ファイルを解凍します。

SPARC プロセッサの場合：

```
zcat jdk-1_5_0-solaris-sparc.tar.Z | tar xf -
```

x86 プロセッサの場合：

```
zcat jdk-1_5_0-solaris-i586.tar.Z | tar xf -
```

この結果、いくつかのディレクトリ (SUNWj5rt、SUNWj5dev、SUNWj5cfg、SUNWj5man、SUNWj5dmo、および SUNWj5jmp) と現在のディレクトリにいくつかのファイルが作成されます。

► J2SE 5 パッケージのインストール

1. su を実行し、スーパーユーザーのパスワードを入力して、スーパーユーザーになります。
2. J2SE に依存する Java Enterprise System サービスを停止します。
3. 必要に応じて、JDK の従来の 5.0 パッケージインストールをアンインストールします。

注 マシンのデフォルトの場所 (/usr/jdk/jdk1.5.0) に 5.0 の従来のバージョンがインストールされている場合は、その場所に 5.0 の最新のバージョンをインストールする前に削除する必要があります。

J2SE 5 インストールの注意事項については、次のサイトでも参照できます。

<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/install-solaris.html#notes>

デフォルト以外の場所に JDK 5.0 をインストールする場合はこの手順を省略できます。詳細については、次のサイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/install-solaris.html#notes>

JDK 5.0 用 Solaris パッケージをアンインストールするには、次のコマンドを実行して削除します。

```
pkgrm SUNWj5rt SUNWj5dev SUNWj5cfg SUNWj5man SUNWj5dmo SUNWj5rtx
SUNWj5dvx
```

4. pkgadd コマンドを実行して、パッケージをインストールします。

x86 プロセッサの場合、次のとおり実行します。

```
pkgadd -d . SUNWj5rt SUNWj5dev SUNWj5cfg SUNWj5man SUNWj5dmo
```

SPARC プロセッサの場合、次のとおり実行します。

```
pkgadd -d . SUNWj5rt SUNWj5dev SUNWj5cfg SUNWj5man SUNWj5dmo
SUNWj5rtx SUNWj5dvx
```

JDK 5.0 は /usr/jdk/jdk1.5.0_01 にインストールされます。バージョン 5.0 は、自動的に Solaris 9 またはそれ以前のデフォルトの Java プラットフォームにはなりません (デフォルトが存在しなかった場合)、Solaris 10 のデフォルトになります。5.0 を Solaris 8 または 9 のデフォルトにする場合は、[40 ページの「デフォルトの Java プラットフォームの設定 \(オプション\)」](#) で説明する手順に従ってください。

デフォルト以外の場所に JDK をインストールする場合の詳細については、マニュアルページ [pkgadd\(1\)](#) および [admin\(4\)](#) を参照してください。

5. 日本語ユーザーがマニュアルページをインストールするには、次の手順に従います。

マシンの /usr/jdk/jdk1.5.0 に 5.0 の従来のバージョンの日本語マニュアルページがインストールされている場合は、その場所に 5.0 の最新のバージョンの日本語マニュアルページをインストールする前に、そのパッケージを削除する必要があります。このパッケージを削除するには、次のとおり実行します。

```
pkgrm SUNWj5jmp
```

その後、pkgadd コマンドを実行して、最新の日本語マニュアルページのパッケージをインストールします。

```
pkgadd -d . SUNWj5jmp
```

6. root シェルを終了します。再起動の必要はありません。

▶ J2SE シンボリックリンクの設定

注 J2SE の以前のバージョンで、一部の Java Enterprise System サービスの実行を継続するように選択できます。このためには、適切なコンポーネント製品の管理ガイドを参照する必要があります。たとえば、Application Server インスタンスが使用する J2SE ポインタを /usr/jdk/entsys-j2se (現在は 1.5 をポイントする) からシステムにインストール済みの以前のバージョンに変更できます。

1. J2SE に依存する Java Enterprise System サービスを停止します。

2. `/usr/jdk/entsys-j2se` シンボリックリンクをリセットし、新しい J2SE の場所をポイントします。

`/usr/j2se` の下にインストールされている J2SE のバージョンを更新する場合は、シンボリックリンクを次のようにリセットします。

```
# rm /usr/jdk/entsys-j2se
# ln -s /usr/j2se /usr/jdk/entsys-j2se
```

デフォルト以外の場所に J2SE の新規バージョンをインストールする場合は、シンボリックリンクを次のようにリセットします。

```
# rm /usr/jdk/entsys-j2se
# ln -s /usr/jdk/instances/jdk1.5.0 /usr/jdk/entsys-j2se
```

3. J2SE に依存する Java Enterprise System サービスを起動します。

▶ デフォルトの Java プラットフォームの設定 (オプション)

注 デフォルトの Java プラットフォームを設定する必要はありません。設定する場合は次の手順に従います。

1. J2SE に依存する Java Enterprise System サービスを停止します。
2. デフォルトの Java プラットフォームを特定します。

Solaris システム (デフォルトの Solaris パッケージインストールを使用した場合) には、同時に複数の Java プラットフォームが存在しますが、デフォルトの Java プラットフォームに指定できるのは 1 つだけです。デフォルトの Java プラットフォームを特定するには、次のとおり実行します。

```
/usr/java/bin/java -fullversion
```

3. JDK 5.0 を Solaris 8 および Solaris 9 のデフォルトに設定します。

たとえば、JDK 5.0 をデフォルトの Java プラットフォームに指定するには、`/usr/java` シンボリックリンクを `/usr/jdk/jdk1.5.0` をポイントするように変更します。

```
rm /usr/java
ln -s jdk1.5.0_01 /usr/java
```

4. コマンド行で `java -fullversion` を実行して、戻り値が次のとおりとなるかどうか確認します。 `java full version 1.5.0_01-b08`

さもなければ、JDK 5.0 を使用するには、`/usr/bin` の前に `/usr/jdk/jdk1.5.0_01/bin` を `PATH` に設定する必要があります。

5. J2SE に依存する Java Enterprise System サービスを起動します。

Linux でのアップグレード

ここでは、Linux プラットフォームで、J2SE™ platform 5.0 (Java 2 Platform, Standard Edition) にアップグレードする手順の概要について説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 42 ページの「自己解凍バイナリのインストール」
- 42 ページの「RPM ファイルのインストール」
- 43 ページの「J2SE シンボリックリンクの設定」

注 J2SE 5 Linux (32-bit) インストールの注意事項については、次のサイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/install-linux.html#install-pkg>

JDK 5.0 は 2 つのインストール形式を利用できます。

- 自己解凍バイナリファイル - このファイルはユーザーが選択した場所に JDK をインストールする場合に使用できます。すべてのユーザー (root ユーザーだけではなく) が任意の場所に簡単にインストールできます。root ユーザーではない場合、Linux が提供する Java プラットフォームのシステムバージョンを置き換えることはできません。このファイルを使用する場合は、後述の「自己解凍バイナリのインストール」を参照してください。
- RPM パッケージ - rpm.bin ファイルには rpm ユーティリティを使用してインストールされる RPM パッケージが含まれています。インストールには root のアクセス権が必要であり、デフォルトで Linux が提供する Java プラットフォームのシステムバージョンを置き換える場所にインストールされます。この配布内容を使用する場合は、後述の「RPM ファイルのインストール」を参照してください。

ニーズに最も適したインストール形式を選択します。

注 このページの次の表記を含むテキストについては、この表記を該当する JDK 更新バージョン番号に置き換える必要があります。

<version>

たとえば、更新バージョンの 1.5.0_01 をダウンロードする場合、次のコマンド

```
./jdk-1_5_0_<version>-linux-i586.bin
```

を次のように置き換えます。

```
./jdk-1_5_0_01-linux-i586.bin
```

▶ 自己解凍バイナリのインストール

1. ダウンロードするファイルのサイズをチェックして、破損していない完全なソフトウェアの配布内容をダウンロードできるかどうかを確認します。

ダウンロードするディレクトリを任意に選択できます。JDK をインストールするディレクトリを選択する必要はありません。

ファイルをダウンロードする前に、Web サイトのダウンロードページで提供されるバイトサイズに注意してください。ダウンロードが終了したら、確認したファイルサイズがダウンロードしたファイルのサイズと同じかどうかを比較します。

2. 自己解凍ファイルに実行権が設定されていることを確認します。次のコマンドを実行します。

```
chmod +x jdk-1_5_0_<version>-linux-i586.bin
```

3. ファイルをインストールする場所にディレクトリを移動します。

次に、現在のディレクトリに JDK をインストールします。

4. 自己解凍バイナリを実行します。

先頭にパスを付加して、ダウンロードしたファイルを実行します。たとえば、ファイルが現在のディレクトリにある場合、「./」を先頭に付加します (PATH 環境変数に「.」が存在しない場合に必要)。

```
./jdk-1_5_0_<version>-linux-i586.bin
```

バイナリコードの使用許諾が表示され、その条件への同意が求められます。

JDK ファイルが、現在のディレクトリの `jdk1.5.0_<version>` と呼ばれるディレクトリにインストールされます。このリンクに従って、ディレクトリ構造を確認します。JDK のマニュアルは別にダウンロードします。

▶ RPM ファイルのインストール

RPM パッケージの形式で JDK をインストールする場合は、次の手順を使用します。自己解凍バイナリファイルを使用する場合は、「自己解凍バイナリのインストール」を参照してください。

1. ファイルサイズを確認して、ダウンロードします。

ダウンロードするディレクトリを任意に選択できます。

ファイルをダウンロードする前に、Web サイトのダウンロードページで提供されるバイトサイズに注意してください。ダウンロードが終了したら、確認したファイルサイズがダウンロードしたファイルのサイズと同じかどうかを比較します。

2. 次のコマンドを実行して、ダウンロードしたファイルを解凍します。

ダウンロードしたファイルのあるディレクトリに移動し、次のコマンドを実行して、まず実行権を設定し、続いてバイナリを実行して RPM ファイルを解凍します。

```
chmod a+x jdk-1_5_0_<version>-linux-i586-rpm.bin
./jdk-1_5_0_<version>-linux-i586-rpm.bin
```

最初の「./」は、PATH 環境変数に「.」が存在しない場合に必要になります。

バイナリの使用許諾契約書が表示され、インストールを続行する前に同意が求められます。使用許諾に同意すると、現在のディレクトリに `jdk-1_5_0_<version>-linux-i586.rpm` ファイルが作成されます。

3. `su` コマンドを実行し、スーパーユーザーのパスワードを入力して `root` になります。
4. `rpm` コマンドを実行して、JDK を包含するパッケージをインストールします。

```
rpm -iv jdk-1_5_0_<version>-linux-i586.rpm
```
5. ディスク容量を節約する場合は、`bin` と `rpm` ファイルを削除します。
6. `root` シェルを終了します。

▶ J2SE シンボリックリンクの設定

注 J2SE の以前のバージョンで、一部の Java Enterprise System サービスの実行を継続するように選択できます。このためには、適切なコンポーネント製品の管理ガイドを参照する必要があります。たとえば、Application Server インスタンスが使用する J2SE ポインタを `/usr/jdk/entsys-j2se` (現在は 1.5 をポイントする) からシステムにインストール済みの以前のバージョンに変更できます。

1. J2SE に依存する Java Enterprise System サービスを停止します。
2. `/usr/jdk/entsys-j2se` シンボリックリンクをリセットし、新しい J2SE の場所をポイントします。

`/usr/j2se` の下にインストールされている J2SE のバージョンを更新する場合は、シンボリックリンクを次のようにリセットします。

```
# rm /usr/jdk/entsys-j2se
# ln -s /usr/j2se /usr/java/entsys-j2se
```

デフォルト以外の場所に J2SE の新規バージョンをインストールする場合は、シンボリックリンクを次のようにリセットします。

```
# rm /usr/jdk/entsys-j2se
# ln -s /usr/java/jdk1.5.0_01 /usr/jdk/entsys-j2se
```

3. J2SE に依存する Java Enterprise System サービスを起動します。

追加ファイルのアップグレード

Java Enterprise System 2003 Q4 からアップグレードする場合は、Apache Common Logging: SUNWaclg の共有コンポーネントパッケージに追加アップグレードを適用する必要があります。

1. Application Server と Message Queue 用の Sun Java Enterprise System を 2003Q4 から 2004Q2 にアップグレードするための追加ファイル入手します。このファイルのコピーは次の場所にあります。

<http://www.sun.com/software/javaenterprisesystem/get.html>

2. Application Server と Message Queue 用の Sun Java Enterprise System を 2003Q4 から 2004Q2 にアップグレードするための追加ファイルを選択します。
3. `java_es_04Q2_shared-component-upgrade.zip` ファイルをダウンロードします。ファイルを解凍します。

注 付属の README ファイルの手順に従わないでください。代わりに、次の手順に従ってください。

4. パッケージをインストールする前に、SUNWaclg パッケージの古いバージョンを削除します。次のコマンドを実行して、パッケージを削除します。

```
pkgrm SUNWaclg
```

5. 古いパッケージを削除したら、インストールする適切なアーキテクチャにディレクトリを変更します。

```
cd <Solaris_sparc or Solaris_x86>
```

6. SUNWaclg パッケージの新しいバージョンを追加します。

```
pkgadd -d SUNWaclg
```

Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード

ここでは、実際の Directory Server ソフトウェアのアップグレードは行いません。Java Enterprise Server 2005Q1 で出荷される Calendar Server 6、Messaging Server 6、Communication Express、および Delegated Administrator の準備として、LDAP スキーマ、インデックス、および設定データを更新します。

注 この項の手順は、Directory Server がインストールされたマシンで実行する必要があります。

1. Directory Server Setup Perl スクリプトにアクセスします。

Directory Server Setup Perl スクリプト (comm_dssetup.pl) は、表 2-5 に示すパッチで配布されます。

表 2-5 Directory Server Setup Perl スクリプトのパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
118242 リビジョン番号 -01 以上	Directory Server Setup Perl スクリプト (comm_dssetup.pl) パッチ	Solaris 8 および 9 SPARC
118245 リビジョン番号 -01 以上	Directory Server Setup Perl スクリプト (comm_dssetup.pl) 追加パッチ	Solaris 8 および 9 SPARC

注 Solaris では、comm_dssetup.pl のデフォルトの場所は /opt/SUNWcomds です。Linux では、デフォルトの場所は /opt/sun/comms/dssetup です。

2. comm_dssetup.pl の既存のバージョンがインストール済みかどうかを確認します。

a. 次のコマンドを実行します。

```
pkgparam -v SUNWcomds VERSION
```

- b. 次のバージョンが表示される場合

```
VERSION=6.3, REV=2004.08.05
```

次のコマンドを実行します。

```
pkgrm SUNWcomds
```

インストールしたバージョンが次の場合

```
VERSION='6.3,REV=2004.08.12'
```

この場合、インストールしたバージョンを使用できます。

表示されたバージョンが上記以外の場合、**手順 5** に示す Directory Server Setup Perl スクリプトのパッチをインストールする必要があります。

3. 作業ディレクトリに移動します。
4. パッチに関する指示と最新の情報が記載された README ファイルを参照します。
5. patchadd コマンドを使用して、Directory Server Setup Perl スクリプトのパッチ 118242 と 118245 をインストールします。両方のパッチをインストールする必要があります。
6. Directory Server Setup Perl スクリプトを実行します。

comm_dssetup.pl スクリプトは、LDAP Directory Server を Calendar Server、Messaging Server、Communications Express、Outlook Connector、および Delegated Administrator 設定で動作するように設定します。

Messaging Server 6 2005Q1 にアップグレードする際に comm_dssetup.pl スクリプトを実行した場合は、再度スクリプトを実行する必要はありません。

手順 5 で comm_dssetup.pl パッチをインストールした場合、スクリプトの現在のバージョンは次のディレクトリに配置されています。

Solaris: /opt/SUNWcomds/sbin/comm_dssetup.pl

Linux: /opt/sun/comms/dssetup

このバージョンのスクリプトを実行し、LDAP ディレクトリを更新して、Communications Services 6 2005Q1 コンポーネント (Messaging Server、Calendar Server、Communications Express、Outlook Connector、および Delegated Administrator) をサポートする必要があります。

comm_dssetup.pl スクリプトの実行方法の詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2004Q2 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/817-7086?l=ja>) の第 2 章「LDAP ディレクトリの設定」を参照してください。

S/MIME: User/Group Suffix の要件

Communications Express Mail の S/MIME を設定する場合は、user/group のサフィックス (dn) を必ず記録してください。comm_dssetup.pl スクリプトには、次の情報の入力が必要です。

Please enter the Users/Groups base suffix [o=usergroup]:

ユーザーおよびグループベースのサフィックスは、ユーザーおよびグループエントリの名前空間を保持する LDAP 組織ツリーの最上位エントリです。選択したユーザーおよびグループベースのサフィックスが **Directory Server** のインストールおよび **Messaging Server** のインストール時に指定したサフィックスと同じであることを確認します。

S/MIME の設定時に、このユーザー / グループサフィックスを再度入力する必要があります。

旧 Java Enterprise System バージョンからのアップグレード

この章では、Solaris オペレーティングシステム用の旧 Java Enterprise System バージョンのコンポーネント製品を、Solaris オペレーティングシステム用の Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェア 2005Q1 リリースにアップグレードする手順について説明します。Java Enterprise System 2003Q4 より前のリリースからのアップグレードについては、143 ページの「[Java Enterprise System より前のバージョンからのコンポーネントのアップグレード](#)」を参照してください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 50 ページの「[Access Manager のアップグレード](#)」
- 68 ページの「[Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード](#)」
- 81 ページの「[Application Server のアップグレード](#)」
- 87 ページの「[Calendar Server のアップグレード](#)」
- 90 ページの「[Communications Express のアップグレード](#)」
- 96 ページの「[Instant Messaging のアップグレード](#)」
- 99 ページの「[Message Queue のアップグレード](#)」
- 115 ページの「[Messaging Server のアップグレード](#)」
- 122 ページの「[Delegated Administrator へのアップグレード](#)」
- 124 ページの「[Mobile Access のアップグレード](#)」
- 126 ページの「[Portal Server のアップグレード](#)」
- 134 ページの「[Sun Cluster のアップグレード](#)」
- 140 ページの「[Web Server のアップグレード](#)」

Access Manager のアップグレード

ここでは、旧バージョンの Access Manager から Sun Java™ System Access Manager 6 2005Q1 へのアップグレードについて、次の情報を提供します。

- [Access Manager アップグレードロードマップ](#)
- [Access Manager のアップグレードを始める前に](#)
- [Identity Server 2004Q2 \(6.2\) のアップグレード](#)
- [Identity Server 6.1 のアップグレード](#)
- [複数インスタンスのアップグレード](#)
- [アップグレードの確認](#)
- [Access Manager SDK インストールのアップグレード](#)
- [Access Manager の共存](#)

Access Manager アップグレードロードマップ

表 3-1 に、旧バージョンの Access Manger のアップグレード方法を示します。

表 3-1 Access Manager 6 2005Q1 アップグレードロードマップ

旧バージョン	Access Manager 6 2005Q1 へのアップグレード方法
Sun Java System Identity Server 2004Q2 (6.2)	このマニュアルの「 Identity Server 2004Q2 (6.2) のアップグレード 」の手順に従います。
Sun Java System Identity Server 2004Q2 (6.2) SP1	SP1 をバックアウトしてから、このマニュアルの「 Identity Server 2004Q2 (6.2) のアップグレード 」の手順に従います。
Sun ONE Identity Server (6.1)	このマニュアルの「 Identity Server 6.1 のアップグレード 」の手順に従います。
Sun ONE Identity Server 6.0 または 6.0 SP 1 または	次の『Sun ONE Identity Server 6.1 Migration Guide』の手順に従って、Identity Server 2003Q4 (6.1) にアップグレードします。
iPlanet Directory Server Access Management Edition (DSAME) 5.1	http://docs.sun.com/doc/816-6771-10 Identity Server 2003Q4 (6.1) にアップグレードしたあと、このマニュアルの「 Identity Server 6.1 のアップグレード 」の手順に従います。

Access Manager のアップグレードを始める前に

Access Manager をアップグレードする前に、次の準備手順を実行します。

- [Java Enterprise System 2005Q1 インストールソフトウェアの入手](#)
- [すべての必須パッチの入手](#)
- [必要な情報とパスワードの入手](#)
- [Directory Server データのバックアップ](#)
- [Web コンテナのすべてのカスタマイズファイルのバックアップ](#)
- [Web コンテナソフトウェアのアップグレード](#)
- [Directory Server の非 SSL ポートの使用](#)
- [Directory Server のアップグレード \(省略可能\)](#)

Java Enterprise System 2005Q1 インストールソフトウェアの入手

Sun Java Enterprise System (Java ES) 2005Q1 インストールソフトウェアを入手します。このソフトウェアは、次の Sun Download Center からダウンロードできます。

<http://www.sun.com/software/download/>

または、このソフトウェアを CD または DVD に収めたメディアキットを、Sun の販売代理店から入手してください。

Java ES インストールソフトウェアの入手方法の詳細については、『Sun Java Enterprise System 2005Q1 インストールガイド』を参照してください。

すべての必須パッチの入手

Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードする場合、次のパッチが必要になります。

- Solaris™ OS、SPARC® プラットフォーム版 : 118217、118218、117585、117112、118151
- Solaris OS、x86 プラットフォーム版 : 118217、118218、117584、117585、118152

注	118217、118218、および 117585 は、SPARC プラットフォームと x86 プラットフォームの両方に適用される共通のパッチです。先にパッチ 118217 と 118218 を適用してから、117585 を適用してください。
----------	--

- Linux OS: 117588 (必須 Linux RPM パッケージを含むパッチ)
- 共有コンポーネント : [29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」](#) を参照してください。

- 必須パッチを入手するには、次の SunSolve サイトからダウンロードします。
<http://sunsolve.sun.com/>

必要な情報とパスワードの入手

Access Manager をアップグレードするには、管理者名やパスワードなど、特定の情報を入力する必要があります。たとえば、Access Manager の管理者名とパスワード、および Access Manager が使用している Directory Server の Directory Manager 名とパスワードを知る必要があります。

Directory Server データのバックアップ

アップグレード処理では、Directory Server のスキーマ (DIT) を変更するスクリプトが使用されます。このため、アップグレードを実行する前に、Directory Server コンソールまたは db2bak などのコマンド行ユーティリティを使って、Directory Server のデータをバックアップしておく必要があります。

Directory Server のバックアップの詳細については、『Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-2011?l=ja>) を参照してください。

Web コンテナのすべてのカスタマイズファイルのバックアップ

アップグレードを行う前に、旧バージョンの Access Manager に関連する Web コンテナのカスタマイズファイルをバックアップします。これには、次のファイルが含まれます。

- カスタマイズしたコンソール JSP ページ
- カスタマイズした認証 JSP ページ
- 認証モジュールとカスタマイズモジュール用の JAR ファイル
- カスタマイズした XML ファイル (Solaris システムの場合は /etc/opt/SUNWam/config/xml 内に、Linux システムの場合は /etc/opt/sun/identity/config/xml 内に格納されている)。

ヒント アップグレード後にカスタマイズを再実行し、それらが正しく動作するかどうかを確認できるように、カスタマイズ一覧を作成してください。

共有コンポーネントのアップグレード

共有コンポーネントをアップグレードするためのパッチは、Access Manager のアップグレード時には必要ありませんが、Access Manager の Web コンテナなど、その他の Java ES コンポーネントのアップグレード時に必要となります (29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照)。

注	JDK 1.5 にアップグレードする場合、SUNWtls、SUNWjss、SUNWpr など、NSS (Netscape Security Services)、NSPR、および JSS (Java Security Services) のパッケージをアップグレードする必要があります。それには、使用しているオペレーティングシステム用の共有コンポーネントクラスタを適用します。
---	---

Web コンテナソフトウェアのアップグレード

Web コンテナ (Web Server または Application Server) と Access Manager を両方ともアップグレードする場合、Web コンテナを先にアップグレードしてください。そうしないと、Access Manager の amconfig スクリプトによって、既存の (古い) Web コンテナ上で Access Manager の設定および再配備が実行されてしまいます。Access Manager 6 2005Q1 がサポートする Web コンテナは、次のとおりです。

Web コンテナのアップグレードについては、各 Web コンテナのドキュメントを参照してください。

- Sun Java System Web Server 6.1 2005Q1 SP4 ([140 ページの「Web Server のアップグレード」](#)を参照)
- Sun Java System Application Server 8.1 2005Q1: ([81 ページの「Application Server のアップグレード」](#)を参照)

また、[52 ページの「Web コンテナのすべてのカスタマイズファイルのバックアップ」](#)でカスタマイズファイルを保存した場合は、Web コンテナのアップグレード後にカスタマイズを再実行します。

Directory Server の非 SSL ポートの使用

Access Manager のアップグレード時に、スクリプト pre61to62upgrade、Upgrade61DitTo62、または amupgrade を実行する際に Directory Server の SSL ポート (デフォルト値の 636 など) を指定すると、アップグレード処理が正常に終了しません。

したがって、これらのスクリプトの実行時には、デフォルト値 389 などの非 SSL ポートを指定してください。

Directory Server の LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード

Directory Server が Java Enterprise System 2004Q2 の一部として、Messaging Server、Calendar Server、または commcli 用として comm_dssetup.pl によって設定されていた場合、[45 ページの「Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード」](#) 節の手順を実行したあとで、Access Manager のアップグレードを行なってください。

Sun Java System Directory Server の LDAP ディレクトリスキーマのアップグレードが、別の製品のアップグレードの一部としてすでに完了済みである場合、この手順を再び繰り返す必要はありません。

Directory Server のアップグレード (省略可能)

Directory Server のアップグレードは省略可能です。Identity Server 2004Q2 を Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードするには、次のいずれかのバージョンが稼働している必要があります。

- Directory Server 5.1 SP1 以上
- Directory Server 5.2

Directory Server のアップグレードの詳細については、[96 ページの「Directory Server のアップグレード」](#)を参照してください。

Identity Server 2004Q2 (6.2) のアップグレード

ここでは、Identity Server 2004Q2 (6.2) または Identity Server 2004Q2 (6.2) SP1 を Access Manager 6 2005Q1 (6.3) にアップグレードする必要があるものとします。

► Identity Server 2004Q2 を Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードする

1. スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになります。
2. [51 ページの「Access Manager のアップグレードを始める前に」](#)に示した手順の実行が完了していることを確認します。
3. Identity Server 2004Q2 SP1 をインストールしている場合、アップグレードパッチを適用する前に SP1 をバックアウトする必要があります。

Solaris または Linux システム上で実行中のリリースを確認するには、`amserver version` コマンドを使用します。Solaris システム上では、`-p` オプション付きの `showrev` コマンドを使ってパッチ情報を表示してもかまいません。次に例を示します。

```
# showrev -p | grep SUNWam
```

4. SPARC および x86 プラットフォームの Solaris 8 または 9 の場合、Solaris パッケージ `SUNWamjwsdp` を削除します。Linux システムの場合、RPM パッケージ `sun-identity-jwsdp` を削除します。Solaris システムの例を次に示します。

```
# pkgrm SUNWamjwsdp
```

これらのパッケージには、JAXP や JAXB といった、JWSDP (Java Web Services Developer Pack) 用の Access Manager 2004Q2 (6.2) コンポーネントが含まれています。Access Manager 2005Q1 (6.3) では、独自のコンポーネントはバンドルされず、JWSDP 製品用の Java ES 共有コンポーネントのパッケージと RPM が代わりに使用されます。

5. 使用しているプラットフォームに応じて、適切な Access Manager アップグレード用のパッチまたは RPM を適用します (表 3-2 を参照)。マルチサーバー構成を使用している場合、Access Manager のインスタンスを実行しているサーバーごとに、対応するパッチまたは RPM を適用します。
 - Solaris™ OS、SPARC® プラットフォーム版 : 118217、118218、117585、117112、118151
 - Solaris OS、x86 プラットフォーム版 : 118217、118218、117585、117584、118152

表 3-2 Access Manager アップグレードパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
118217-11	Mobile Access 共有コンポーネントパッチ	Solaris 8 および 9 SPARC および x86
118218-11	Access Manager Mobile Access パッチ	Solaris 8 および 9 SPARC および x86
117112-13	Access Manager コアパッチ	Solaris 8 および 9 SPARC
117584-13	Access Manager コアパッチ	Solaris 9 x86
117585-13	Access Manager コアパッチ	Solaris 8 および 9 SPARC および x86
117588-02	Access Manager コアパッチ	Linux
118151-09	Access Manager ロケールパッチ	Solaris 8 および 9 SPARC
118152-09	Access Manager ロケールパッチ	Solaris 8 および 9 x86

注 118217、118218、および 117585 は、SPARC プラットフォームと x86 プラットフォームの両方に適用される共通のパッチです。先にパッチ 118217 と 118218 を適用してから、117585 を適用してください。先にパッチ 117585 を適用してから、パッチ 117112 を適用してください。

- Linux OS: 117588 (必須 Linux RPM を含むパッチ)
アップグレードするには、次の手順に従います。
 - a. 117588 パッチファイルを解凍します。
 - b. README ファイルを読みます。
 - c. installpatch スクリプトを実行します。これで、RPM が追加されます。
- 6. 「[Web コンテナのすべてのカスタマイズファイルのバックアップ](#)」で保存しておいた Access Manager コンソールと認証ユーザーインターフェース (UI) 用のカスタマイズ JSP を、再度適用します。続いて、カスタマイズ JSP ファイルを適切なディレクトリにコピーします。Solaris システムの例を次に示します。
 - コンソール: `AccessManager-Base/SUNWam/web-src/applications/console`
 - 認証 UI: `AccessManager-Base/SUNWam/web-src/services/config/auth/default` または `AccessManager-Base/SUNWam/web-src/services/config/auth/default_1cl` (1cl は ja) などのロケールを示す)

詳細については、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 Developer's Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-7649>) を参照してください。
- 7. amconfig スクリプトを実行して Access Manager を特定の Web コンテナ用に設定します。

注 amconfig を実行する前に、53 ページの「[Web コンテナソフトウェアのアップグレード](#)」で説明したように、Access Manager 用の Web コンテナのアップグレードが完了していることを確認してください。

amconfig を実行するには、Directory Server および適切な Web コンテナが稼働している必要があります。

amconfig を実行する前に、amsamplesilent テンプレートファイルに基づく設定スクリプト入力ファイル内で、設定用の変数を次のように設定します。

- DEPLOY_LEVEL を 21 に、DIRECTORY_MODE を 4 に、それぞれ設定します。
- Sun Java Enterprise System 2005Q1 リリースのデフォルトの JDK バージョンは、1.5 です。設定スクリプト入力ファイル内の JAVA_HOME 変数が正しいディレクトリに設定されていることを確認してください。
- AM_ENC_PWD 変数は必ず、Java ES インストーラ実行時に指定したのと同じ値に設定してください (これは、AMConfig.properties ファイル内の am.encryption.pwd パラメータの値とも同じ)。
- 設定スクリプト入力ファイル内のその他の値は、アップグレード中の Identity Server 6.1 で設定していた値と同じ値にしてください (ただし、Web コンテナやパスワードなど、特定の項目を変更した場合はその限りではない)。

amconfig スクリプトと amsamplesilent ファイルがインストールされているディレクトリは、次のとおりです。

- Solaris システム : *AccessManager-base/SUNWam/bin*
- Linux システム : *AccessManager-base/identity/bin*

AccessManager-base インストールディレクトリのデフォルト値は、Solaris システムの場合は /opt、Linux システムの場合は /opt/sun です。

たとえば、Access Manager がこのベースインストールディレクトリにインストールされている Solaris システム上で、amconfig を実行するには、次のように入力します。

```
# cd /opt/SUNWam/bin
# ./amconfig -s config-file
```

ここで、config-file は設定スクリプト入力ファイルです。

amconfig スクリプトと amsamplesilent ファイルの詳細については、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1938?l=ja>) を参照してください。

注

https-<machine>.<domain> のスペルの大文字 / 小文字には、特に注意を払ってください。<domain> には大文字が含まれる可能性があります。amsamplesilent テンプレート内のエントリがこのエントリに一致することが重要です。

設定する必要があるのは、Access Manager に関する Web コンテナのセクションだけです。たとえば、Web コンテナとして Application Server 7.X を使用している場合、Application Server 7.x に関するセクションだけを設定します。

amsamplesilent 内の AM_ENC_PWD を必ず変更してください。この値は、/etc/opt/SUNWam/config/AMConfig-default.properties 内の am.encrypted.pwd から取得されます。

amsamplesilent 内の WS61_INSTANCE の値が、<install_dir>/SUNWwbsvr 内のインスタンス名と一致していることを確認してください。ここで、<install_dir> のデフォルト値は /opt です。たとえば、https-<machine-name>.domain などとなります。

8. amupgrade スクリプトを実行して Access Manager スキーマ (DIT) を Access Manager 6 2005Q1 用にアップグレードします。このスクリプトは、次のディレクトリにインストールされています。
 - Solaris システム : *AccessManager-base/SUNWam/upgrade/scripts*
 - Linux システム : *AccessManager-base/identity/upgrade/scripts*

AccessManager-base インストールディレクトリのデフォルト値は、Solaris システムの場合は /opt、Linux システムの場合は /opt/sun です。

amupgrade を実行する前に、次の情報を入手する必要があります。

- Access Manager が使用している Directory Server の完全修飾ホスト名と非 SSL ポート番号
- その Directory Server の Directory Manager 名 (デフォルト値: cn=Directory Manager) とパスワード
- Access Manager 管理者 (デフォルト値: amadmin) とパスワード

amupgrade スクリプトを実行します。Solaris システムの例を次に示します。

```
# cd opt/SUNWam/upgrade/scripts
# ./amupgrade
```

スクリプトによるアップグレードが成功すると、「Upgrade completed」というメッセージが表示されます。

9. amupgrade スクリプトによって、ステータス情報が次のログファイルに書き込まれます。

```
/var/sadm/install/logs/Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_dit_1
og.mmddhhmm
```

アップグレードに関する情報を入手するには、このログファイルをチェックします。

10. アップグレードの変更が有効になるように、Access Manager の Web コンテナを再起動します。
11. SAML (Security Assertion Markup Language) サービスを使用する場合、Access Manager コンソールを使って SAML 認証モジュールを追加および有効化する必要があります。関連する手順については、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1938?l=ja>) を参照してください。

注 Access Manager 6 2005Q1 リリースでは、コアサービスの「Default success login URL」属性のデフォルト値が、「%protocol://%host:%port/amconsole」から「/amconsole」へと変更されました。

その結果、%protocol、%host、%port の各変数がサポートされなくなりました。リモートコンソール上でログイン後にコンソールページが表示されるようにするには、「Default success login URL」の値を変更し、実際のリモートコンソールホスト上のコンソールページが参照されるようにする必要があります。

Identity Server 6.1 のアップグレード

ここでは、Identity Server 2003Q4 (6.1) を Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードする必要があるものとします。

► Identity Server 6.1 を Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードする

1. スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになります。
2. 51 ページの「Access Manager のアップグレードを始める前に」に示した手順のうち、必要なすべての手順の実行が完了していることを確認します。
3. 次の手順でアップグレード前スクリプトを実行するには、Directory Server が稼働している必要があります。Directory Server が稼働していることを確認するには、次のように入力します。

```
# ps -ef | grep slapd
```

Directory Server が稼働していない場合は起動します。次に例を示します。

```
# cd /var/opt/mps/serverroot/slapd-instance-name
# ./start-slapd
```

4. Identity Server 2004Q2 アップグレード前スクリプト (pre61to62upgrade) を実行します。これにより、次の機能が実行されます。

- am2bak スクリプトを実行して Identity Server 2003Q4 のバックアップをとる
- Identity Server 2003Q4 パッケージ (Directory Server または Web コンテナのパッケージは除く) を削除し、そのパッケージの削除を反映するために /var/sadm/install/productregistry ファイルを更新する
- Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_log.timestamp ログファイルを /var/sadm/install/logs ディレクトリに書き込む

pre61to62upgrade スクリプトは、Java ES インストールソフトウェアの一部であり、次のディレクトリ内に格納されています。

```
JavaES_base/Solaris_sparc/Product/identity_srv/Tools
```

この JavaES_base は、アーカイブを解凍したディレクトリです。次に例を示します。

```
# cd JavaES2005Q1/Solaris_sparc/Product/identity_srv/Tools
# ./pre61to62upgrade
```

5. スクリプトによるプロンプトが表示されたら、次の情報を入力します。
 - Directory Server の完全修飾ホスト名。例: ds.example.com
 - Directory Server の非 SSL ポート番号。デフォルトは 389。
 - 最上位 Identity Server 管理者の識別名 (DN) とパスワード。
例: uid=amAdmin,ou=People,dc=example,dc=com

- スクリプトによる Identity Server 6.1 ファイルのバックアップ先ディレクトリ。
例: /opt/is_backup
 - Web コンテナの証明書ディレクトリ。例: /opt/SUNWwbsvr/alias
6. Java ES 2005Q1 インストーラを実行して Access Manager 6 2005Q1 をインストールします。「設定タイプ」パネルで「あとで設定」オプションを選択します。
- すると、Java ES インストーラは、コンポーネントパッケージのインストールは行いますが、コンポーネントの設定は行いません。Java ES インストーラについては、『Sun Java Enterprise System 2005Q1 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-0808?l=ja>) を参照してください。
7. amconfig スクリプトを実行して Access Manager を特定の Web コンテナ用に設定します。

注 amconfig を実行する前に、53 ページの「Web コンテナソフトウェアのアップグレード」で説明したように、Access Manager 用の Web コンテナのアップグレードが完了していることを確認してください。

- DEPLOY_LEVEL を 21 に、DIRECTORY_MODE を 4 に、それぞれ設定します。
- Sun Java Enterprise System 2005Q1 リリースのデフォルトの JDK バージョンは、1.5 です。設定スクリプト入力ファイル内の JAVA_HOME 変数が正しいディレクトリに設定されていることを確認してください。
- AM_ENC_PWD 変数は必ず、Java ES インストーラ実行時に指定したのと同じ値に設定してください (これは、AMConfig.properties ファイル内の am.encryption.pwd パラメータの値とも同じ)。
- 設定スクリプト入力ファイル内のその他の値は、アップグレード中の Identity Server 6.1 で設定していた値と同じ値にしてください (ただし、Web コンテナやパスワードなど、特定の項目を変更した場合はその限りではない)。

amconfig スクリプトと amsamplesilent ファイルがインストールされているディレクトリは、次のとおりです。

- Solaris システム: *AccessManager-base/SUNWam/bin*
- Linux システム: *AccessManager-base/identity/bin*

AccessManager-base インストールディレクトリのデフォルト値は、Solaris システムの場合は /opt、Linux システムの場合は /opt/sun です。

amconfig スクリプトと amsamplesilent ファイルの詳細については、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1938?l=ja>) を参照してください。

8. 次の手順でアップグレード後スクリプトを実行するには、Directory Server が稼働している必要があります。Directory Server が稼働していることを確認するには、次のように入力します。

```
# ps -ef | grep slapd
```

Directory Server が稼働していない場合は起動します。次に例を示します。

```
# cd /var/opt/mps/serverroot/slapd-instance-name
# ./start-slapd
```

9. Identity Server 2004Q2 アップグレード後スクリプト (Upgrade61DitTo62) を実行し、Directory Server スキーマ (DIT) を Identity Server 2004Q2 用にアップグレードします。

このスクリプトは次のディレクトリに格納されています。

- o Solaris システム : *AccessManager-base/SUNWam/migration/61to62/scripts*
- o Linux システム : *AccessManager-base/identity/migration/61to62/scripts*

AccessManager-base インストールディレクトリのデフォルト値は、Solaris システムの場合は /opt、Linux システムの場合は /opt/sun です。

たとえば、Solaris システム上でスクリプトを実行するには、次のように入力します。

```
# cd opt/SUNWam/migration/61to62/scripts
# ./Upgrade61DitTo62
```

10. Upgrade61DitTo62 スクリプトによるプロンプトが表示されたら、次の情報を入力します。
- o Directory Server の完全修飾ホスト名。例 : ds.example.com
 - o Directory Server の非 SSL ポート番号。デフォルトは 389。
 - o Directory Manager の識別名 (DN) とパスワード
 - o 最上位 Identity Server 管理者の識別名 (DN) とパスワード。
例 : uid=amAdmin,ou=People,dc=example,dc=com
11. Upgrade61DitTo62 スクリプトによるプロンプトが表示されたら、Directory Server を再起動します。再起動が実行されるまで、スクリプトは処理を中断します。
12. Upgrade61DitTo62 スクリプトの処理が完了したら、スキーマの変更が有効になるように Directory Server と Web コンテナの両方を再起動します。
13. amupgrade スクリプトを実行して Access Manager スキーマ (DIT) を Access Manager 6 2005Q1 用にアップグレードします。このスクリプトは、次のディレクトリにインストールされています。
- o Solaris システム : *AccessManager-base/SUNWam/upgrade/scripts*
 - o Linux システム : *AccessManager-base/identity/upgrade/scripts*

AccessManager-base インストールディレクトリのデフォルト値は、Solaris システムの場合は /opt、Linux システムの場合は /opt/sun です。

amupgrade を実行する前に、次の情報を入手する必要があります。

- Access Manager が使用している Directory Server の完全修飾ホスト名と非 SSL ポート番号
- その Directory Server の Directory Manager 名 (デフォルト値: cn=Directory Manager) とパスワード
- Access Manager 管理者 (デフォルト値: amadmin) とパスワード

amupgrade スクリプトを実行します。Solaris システムの例を次に示します。

```
# cd /opt/SUNWam/upgrade/scripts  
# ./amupgrade
```

スクリプトによるアップグレードが成功すると、「Upgrade completed」というメッセージが表示されます。

14. amupgrade スクリプトによって、ステータス情報が次のログファイルに書き込まれます。

```
/var/sadm/install/logs/Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_dit_1  
og.mmddhhmm
```

アップグレードに関する情報を入手するには、このログファイルをチェックします。

15. SAML (Security Assertion Markup Language) サービスを使用する場合、Access Manager コンソールを使って SAML 認証モジュールを追加および有効化する必要があります。関連する手順については、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1938?l=ja>) を参照してください。

以上で Access Manager 6 2005Q1 へのアップグレードが完了しました。

Access Manager SDK インストールのアップグレード

ここでは、SDK 単体インストールを Access Manager 6 2005Q1 SDK にアップグレードする方法について、次の 2 つの場合に分けて説明します。

- [Identity Server 2003Q4 \(6.1\) SDK 単体インストールをアップグレードする](#)
- [Identity Server 2004Q2 \(6.2\) SDK 単体インストールをアップグレードする](#)

警告 SDK アップグレード処理はユーザーのデータに影響を与えませんが、アップグレード前に設定ファイル `AMConfig.properties` と `serverconfig.xml` のバックアップをとってください。

▶ Identity Server 2003Q4 (6.1) SDK 単体インストールをアップグレードする

1. スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになります。
2. Identity Server 6.1 の設定ファイル `AMConfig.properties` と `serverconfig.xml` の保存が完了していることを確認します。
3. 『Sun Java Enterprise System 2003Q4 インストールガイド』 (<http://docs.sun.com/doc/817-4242-10?l=ja>) の手順に従って、Identity Server 6.1 SDK をアンインストールします。
4. 『Sun Java Enterprise System 2005Q1 インストールガイド』 (<http://docs.sun.com/doc/819-0808?l=ja>) の手順に従って、Access Manager 6 2005Q1 SDK をインストールします。

また、Identity Server 2004Q2 SDK をインストールしたあと、「[Identity Server 2004Q2 \(6.2\) SDK 単体インストールをアップグレードする](#)」で説明するパッチを適用してもかまいません。

5. [手順 2](#) で保存した設定変更を、新しい Access Manager 6 2005Q1 の設定ファイルに取り込みます。

▶ Identity Server 2004Q2 (6.2) SDK 単体インストールをアップグレードする

1. Identity Server 2004Q2 の設定ファイル `AMConfig.properties` と `serverconfig.xml` の保存が完了していることを確認します。
2. SDK がインストールされているサーバー上で、使用しているプラットフォームに応じた Access Manager アップグレードパッチを適用します。
 - Solaris™ OS、SPARC® プラットフォーム版 : 118217、118218、117585、117112、118151
 - Solaris OS、x86 プラットフォーム版 : 118217、118218、117584、117585、118152

注	118217、118218、および 117585 は、SPARC プラットフォームと x86 プラットフォームの両方に適用される共通のパッチです。先にパッチ 118217 と 118218 を適用してから、117585 を適用してください。118217 と 118218 が必要になるのは、Access Manager が Portal Server 用として使用される場合だけです。
---	--

- Linux OS: 117588 (必須 Linux RPM を含むパッチ)
アップグレードするには、次の手順に従います。
 - a. 117588 パッチファイルを解凍します。
 - b. README ファイルを読みます。
 - c. installpatch スクリプトを実行します。これで、RPM が追加されます。
- 3. amconfig スクリプトを実行して Access Manager SDK を特定の配備用に設定します。amconfig を実行する前に、amsamplesilent テンプレートファイルに基づく設定スクリプト入力ファイル内で、設定用の変数を設定します。DEPLOY_LEVEL を次のように設定します。
 - SDK のアップグレードのみを行う場合は、DEPLOY_LEVEL を 3 に設定する
 - SDK のアップグレードと Web コンテナの設定を行う場合は、DEPLOY_LEVEL を 4 に設定する

設定スクリプト入力ファイル内のその他の値は、アップグレード中の Identity Server 6.1 SDK で設定していた値と同じ値にしてください (ただし、Web コンテナやパスワードなど、特定の項目を変更した場合はその限りではない)。

Sun Java Enterprise System 2005Q1 リリースのデフォルトの JDK バージョンは、1.5 です。設定スクリプト入力ファイル内の JAVA_HOME 変数が正しいディレクトリに設定されていることを確認してください。

amconfig スクリプトと amsamplesilent ファイルがインストールされているディレクトリは、次のとおりです。

- Solaris システム : *AccessManager-base/SUNWam/bin*
- Linux システム : *AccessManager-base/identity/bin*

AccessManager-base インストールディレクトリのデフォルト値は、Solaris システムの場合は /opt、Linux システムの場合は /opt/sun です。

amconfig スクリプトと amsamplesilent ファイルの詳細については、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 管理ガイド』 (<http://docs.sun.com/doc/819-1938?l=ja>) を参照してください。

- 4. 手順 1 で保存した設定変更を、新しい Access Manager 6 2005Q1 の設定ファイルに取り込みます。

5. SAML (Security Assertion Markup Language) サービスを使用する場合、Access Manager コンソールを使って SAML 認証モジュールを追加および有効化する必要があります。関連する手順については、『Sun Java System Access Manager 6 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1938?l=ja>) を参照してください。

注 Access Manager 6 2005Q1 リリースでは、コアサービスの「Default success login URL」属性のデフォルト値が、「%protocol://%host:%port/amconsole」から「/amconsole」へと変更されました。

その結果、%protocol、%host、%port の各変数がサポートされなくなりました。リモートコンソール上でログイン後にコンソールページが表示されるようにするには、「Default success login URL」の値を変更し、実際のリモートコンソールホスト上のコンソールページが参照されるようにする必要があります。

複数インスタンスのアップグレード

ここでは、同一 Directory Server を共有し、異なるホストシステム上で稼働する複数の Identity Server インスタンスをアップグレードする方法について説明します。

アップグレードプロセスは、異なるホストシステムにインストールされている Identity Server の複数のインスタンスをサポートしています。現在のリリースでは、同一ホストシステムにインストールされている Identity Server の複数インスタンスのアップグレードはサポートされていません。同一ホストに複数のインスタンスが存在する場合は、メインインスタンスをアップグレードしてから追加インスタンスを再作成する必要があります。

▶ インスタンスをアップグレードする

1. スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになります。
2. Directory Server にアクセスするすべての Identity Server インスタンスを停止します。たとえば、デフォルトのインストールディレクトリを使用している Solaris システム上では、次のように入力します。

```
# cd /opt/SUNWam/bin
# ./amserver stop
```

すべてのインスタンスを停止することで、アップグレードの実行中に Identity Server が Directory Server に変更を加えることを防止できます。

3. アップグレードする Identity Server インスタンスを起動します。
4. [手順 3](#) で起動した Identity Server インスタンスを、「[Access Manager アップグレードロードマップ](#)」の手順に従ってアップグレードします。

最初のインスタンスのアップグレード時には、アップグレード後スクリプトが、Directory Server をアップグレードして Access Manager 6 2005Q1 のスキーマ要素を追加します。これに対して、残りのインスタンスのアップグレード時には、スクリプトは、Directory Server がアップグレード済みであることを検出し、アップグレードを再実行しません。

5. アップグレードしたインスタンスを再起動します。
6. 異なるホスト上の、アップグレードする各 Identity Server インスタンスについて、手順 3 ～手順 5 を繰り返します。
7. アップグレードしなかった Identity Server 2004Q2 インスタンスがあれば、それらを再起動します。Identity Server 2004Q2 と Access Manager 6 2005Q1 の共存については、「[Access Manager の共存](#)」を参照してください。

アップグレードの確認

アップグレードの処理が完了したら、アップグレードが成功したかどうかを確認します。

1. 次の URL を使って Access Manager 6 2005Q1 コンソールに amadmin としてログインします。

```
http://host-name.domain-name:port/amconsole
```

この *host-name.domain-name:port* は、使用する Web コンテナの完全修飾ホスト名とポート番号です。

「サービス設定」タブの新しいサービスが利用可能であることを確認します。

2. /var/sadm/install/logs ディレクトリ内の次のログファイルを調べ、アップグレードの状態を確認します。

pre61to62upgrade スクリプト:

```
Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_log.timestamp
```

Sun Java Enterprise System インストーラ:

```
-Java_Shared_Component_Install.timestamp
```

```
-Java_Enterprise_System_install.Atimestamp
```

```
-Java_Enterprise_System_install.Btimestamp
```

```
-Java_Enterprise_System_Summary_Report_install.timestamp
```

Upgrade61DitTo62 スクリプト:

```
Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_dit_log.timestamp
```

amupgrade スクリプト:

Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_dit_log.timestamp

Access Manager の共存

Access Manager 6 2005Q1 と Identity Server 2004Q2 の共存は、Access Manager アップグレード期間中の過渡的な段階にすぎません。これら 2 つのバージョンは、次の条件の下では共存可能であり、同一の共有 Directory Server に対して同時に実行可能です。

- Access Manager 6 2005Q1 と Identity Server 2004Q2 が、異なるサーバー上にインストールされている必要があります。
- Java ES インストーラを使って Access Manager 6 2005Q1 をインストールする際に、「あとで設定」オプションを指定します。なぜなら、既存の Directory Server を使用するからです。インストールの終了後、amconfig スクリプトを実行して Access Manager の設定と Web アプリケーションの配備を行います。amconfig の設定スクリプト入力ファイル (amsamplesilent) 内で、DEPLOY_LEVEL を 1 に、DIRECTORY_MODE を 4 に、それぞれ設定します。
- Directory Server のアップグレード実行前、すなわち Access Manager 6 2005Q1 のスキーマ要素が追加されていないうちは、Access Manager 6 2005Q1 と Identity Server 2004Q2 のどちらを使っても、ディレクトリにアクセスできます。
- Directory Server をアップグレードして Access Manager 6 2005Q1 のスキーマ要素を追加したあと、新しいサービス、既存サービス内の属性、ポリシープラグインなどの Access Manager の新機能にアクセスするには、Access Manager 6 2005Q1 を使う必要があります。Identity Server 2004Q2 (コンソールを含む) は、Access Manager 6 2005Q1 スキーマでは正しく動作しません。

Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード

ここでは、Sun Java Enterprise System 2005Q1 の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードおよびバックアウトする方法について説明します。ここでは、次のバージョンの Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレードとバックアウトについて説明します。

- Sun Java Enterprise System 5.2 2003Q4 (Solaris のみ) および 5.2 2004Q2 から 5.2 2005Q1 へのアップグレード
- Sun Java Enterprise System 5.2 2005Q1 から 5.2 2003Q4 (Solaris のみ) および 5.2 2004Q2 へのバックアウト

これらのバージョンより前の Administration Server、Directory Server、Directory Proxy Server に対するアップグレードとバックアウトの方法については、それぞれ 144 ページの「Administration Server の移行に関する情報」、156 ページの「Directory Server の移行に関する情報」、157 ページの「Directory Proxy Server の移行に関する情報」を参照してください。

この節で説明する内容は、次のとおりです。

- 「Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード計画」
- 「Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード」
- 「Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード」
- 「クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server のアップグレード」

Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード計画

Administration Server、Directory Server、または Directory Proxy Server をアップグレードする前に、次の点に注意してください。

- Directory Server と Directory Proxy Server は、同一の Administration Server を共有する製品グループに属しています。これらの製品に対して、同時にパッチを適用する必要があります。

- Solaris 上で Directory Server をアップグレードする際には、`ServerRoot/slapd-serverID/` の下にあるインスタンス固有のスクリプトの一部 (すべてではない) が、`ServerRoot/slapd-serverID/upgrade/bak_patch2/` の下にバックアップされたあと、アップグレード中に加えられた変更を反映するように再度生成されます。Directory Server のバックアウト時には、これらのバックアップスクリプトが復元されます。
- Administration Server、Directory Server、または Directory Proxy Server をパッチの適用によってアップグレードできるのは、これらの製品が、Solaris システムの場合は SUNW* パッケージを使って、Linux システムの場合は RPM パッケージを使って、それぞれインストールされている場合に限りです。
- パッチを適用すると、SSL 証明書データベースがアップグレードされます。パッチの適用後に証明書データベースに変更を加え、その後にパッチをバックアウトする場合は、バックアウト後に証明書データベースを手動で再変更する必要があります。パッチのバックアウト前にバックアップをとることを検討してください。
SSL 証明書データベースの変更後にパッチをバックアウトすると、SSL モードで起動できなくなります。この問題を回避するには、SSL モードをオフにし、Administration Server、Directory Server、または Directory Proxy Server を再起動し、証明書を再インストールしたあとで、SSL モードを有効にします。
- Directory Server、Directory Proxy Server、Messaging Server、Calendar Server、およびそれらに関連付けられた Administration Server は、同一のユーザーおよびグループとして実行される必要があります。つまり、これらは同一の UID と GID を使って実行される必要があります。
- Sun Cluster データサービスとしての Administration Server と Directory Server をローリングアップグレードすることは、サポートされません。

Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード

ここでは、Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードおよびバックアウトする方法について説明します。

ここで説明する手順では、コマンド `directoryserver(1m)` と `mpsadmserver(1m)` を使用します。これらのコマンドの詳細については、『Directory Server Man Page Reference』および『Administration Server Man Page Reference』を参照してください。

表 3-3 に、アップグレードに必要なパッチの一覧を示します。これらのパッチは、<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/patch-access> からダウンロードできます。

表 3-3 Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードするためのパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
共有コンポーネントパッチ クラスタ	29 ページの「共有コンポーネントの アップグレード」 を参照してください	
115610-18 以上	Administration Server	Solaris SPARC
115611-18 以上	Administration Server	Solaris x86
117047-17 以上	Administration Server ロケール	Solaris SPARC および x86
115614-20 以上	Directory Server	Solaris SPARC
115615-20 以上	Directory Server	Solaris x86
117015-16 以上	Directory Server ロケール	Solaris SPARC および x86
116373-14 以上	Directory Proxy Server	Solaris SPARC
116374-14 以上	Directory Proxy Server	Solaris x86
117017-16 以上	Directory Proxy Server ロケール	Solaris SPARC および x86
115 ページの「Messaging Server のアップグレード」 を参照してください	Messaging Server	
87 ページの「Calendar Server のアップグレード」 を参照してください	Calendar Server	

► **Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードする**

次の手順には、Calendar Server と Messaging Server に関する手順も含まれています。使用しないコンポーネント製品があれば、それに関する手順は無視してください。

1. [表 3-3](#) で必要なパッチ番号を調べます。
2. コンソールが稼働している場合は停止します。
3. すべてのサーバーを次の順序で停止します。
 - a. Calendar Server
 - b. Messaging Server
 - c. Directory Proxy Server
 - d. Administration Server
 - e. Directory Server

各サーバーの停止方法については、それぞれの管理ガイドを参照してください。

4. 共有コンポーネントパッチクラスタを適用します。これについては、[29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」](#)を参照してください。
5. Administration Server コンポーネントのパッチを適用します。
 - a. `patchadd(1m)` コマンドを使ってパッチとロケールパッチを適用します。
 - b. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。
 - c. アップグレード後の設定を設定ディレクトリサーバーと同期させます。


```
# /usr/sbin/mpsadmserver sync-cds
```
 - d. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
6. Directory Server コンポーネントのパッチを適用します。
 - a. Directory Server を Administration Server なしのスタンドアロンとして実行している場合、次の手順に従います。
 - I. 最初の Directory Server インストール時にインストールされた部分的な Administration Server をアップグレードします。それには、前述の Administration Server コンポーネントのパッチ適用手順に従います。
 - II. サーバルートディレクトリに移動します。


```
# cd /var/opt/mps/serverroot
```
 - III. 設定ディレクトリを作成します。


```
# mkdir -p admin-serv/config
```
 - IV. `adm.config` ファイルを作成します。


```
# vi admin-serv/config/adm.conf
```
 - V. 次のテキストを追加します。

```
isie: cn=Administration Server, cn=Server Group, cn=hostname,  
ou=administration_domain, o=NetscapeRoot
```

すべてを 1 行で入力します。ここで、*hostname* は、Directory Server が稼働しているホストの FQDN です。*administration_domain* は通常、そのホストのドメイン名です。

- b. Directory Server が稼働している場合は、この時点で停止します。
 - c. `patchadd(1m)` コマンドを使ってパッチを適用します。
デフォルトの Directory Server をリセットします。

```
# /usr/sbin/directoryserver -d 5.2
```
 - d. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。
 - e. アップグレード後の設定を設定ディレクトリサーバーと同期させます。

```
# /usr/sbin/directoryserver -u 5.2 sync-cds
```
 - f. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
7. Directory Proxy Server コンポーネントのパッチを適用します。
- a. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。この手順は、設定ディレクトリサーバー内に格納されている設定との自動同期を行ううえで不可欠です。
 - b. `patchadd(1m)` コマンドを使ってパッチを適用します。
 - c. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
8. Messaging Server コンポーネントのパッチを適用します。これについては、[115 ページの「Messaging Server のアップグレード」](#)を参照してください。
9. Calendar Server コンポーネントのパッチを適用します。これについては、[87 ページの「Calendar Server のアップグレード」](#)を参照してください。
10. サーバーを次の順序で再起動します。
- a. Directory Server
 - b. Administration Server
 - c. Directory Proxy Server
 - d. Messaging Server
 - e. Calendar Server

► **Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をバックアウトする**

次の手順には、Calendar Server と Messaging Server に関する手順も含まれています。使用しないコンポーネント製品があれば、それに関する手順は無視してください。

1. コンソールが稼働している場合は停止します。
2. すべてのサーバーを次の順序で停止します。
 - a. Calendar Server
 - b. Messaging Server
 - c. Directory Proxy Server
 - d. Administration Server
 - e. Directory Server

各サーバーの停止方法については、それぞれの管理ガイドを参照してください。

3. **Calendar Server** コンポーネントのパッチをバックアウトします。これについては、[87 ページの「Calendar Server のアップグレード」](#)を参照してください。
4. **Messaging Server** コンポーネントのパッチをバックアウトします。これについては、[115 ページの「Messaging Server のアップグレード」](#)を参照してください。
5. **Directory Proxy Server** コンポーネントのパッチをバックアウトします。
 - a. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。この手順は、設定ディレクトリサーバー内に格納されている設定との自動同期を行ううえで不可欠です。
 - b. `patchrm(1m)` コマンドを使ってパッチをバックアウトします。
 - c. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
6. **Directory Server** コンポーネントのパッチをバックアウトします。
 - Directory Server 5.2 2003Q4 にバックアウトする
 - a. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。
 - b. バックアウト後の設定を設定ディレクトリサーバーと同期させます。


```
# /usr/sbin/directoryserver -u 5.2 sync-cds 5.2
```
 - c. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
 - d. `patchrm(1m)` コマンドを使ってパッチを削除します。

- e. Directory Server を Administration Server なしのスタンドアロンとして実行している場合、アップグレードされた部分的な Administration Server をバックアウトする必要があります。それには、後述の Administration Server のバックアウト手順に従います。

- Directory Server 5.2 2004Q2 にバックアウトする

- a. patchrm(1m) コマンドを使ってパッチを削除します。
- b. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。
- c. バックアウト後の設定を設定ディレクトリサーバーと同期させます。

```
# /usr/sbin/directoryserver -u 5.2 sync-cds
```
- d. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
- e. Directory Server を Administration Server なしのスタンドアロンとして実行している場合、アップグレードされた部分的な Administration Server をバックアウトする必要があります。それには、後述の Administration Server のバックアウト手順に従います。

7. Administration Server コンポーネントのパッチをバックアウトします。

- Administration Server 5.2 2003Q4 にバックアウトする

- a. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。
- b. 設定ディレクトリサーバー内に格納されているパッチ適用前の設定に戻します。

```
# /usr/sbin/mpsadmserver sync-cds 5.2
```
- c. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
- d. patchrm(1m) コマンドを使ってパッチを削除します。

- Administration Server 5.2 2004Q2 にバックアウトする

- a. patchrm(1m) コマンドを使ってパッチを削除します。
- b. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。
- c. バックアウト後の設定を設定ディレクトリサーバーと同期させます。

```
# /opt/sun/sbin/mpsadmserver sync-cds
```
- d. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。

8. 共有コンポーネントパッチクラスタをバックアウトします。これについては、[29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」](#)を参照してください。

9. サーバーを次の順序で再起動します。

- a. Directory Server
- b. Administration Server
- c. Directory Proxy Server
- d. Messaging Server
- e. Calendar Server

Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード

ここでは、Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードする方法について説明します。

ここで説明する手順では、コマンド `directoryserver(1m)` と `mpsadmserver(1m)` を使用します。これらのコマンドの詳細については、『Directory Server Man Page Reference』および『Administration Server Man Page Reference』を参照してください。

Linux RH AS 2.1 から Linux RH AS 3 へのアップグレードを予定している場合、Linux のアップグレードを行う前に、Sun Java Enterprise System のコンポーネント製品をアップグレードする必要があります。

警告	Linux 上での Sun Java Enterprise System 5.2 2004Q2 から Sun Java Enterprise System 5.2 2005Q1 へのアップグレードは、あとでバックアウトする必要がないことを確信できる場合にのみ、行なってください。Linux 上では、Sun Java Enterprise System 5.2 2005Q1 からのバックアウトはできません。
-----------	---

表 3-4 に、Linux 上での Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレードに必要なパッチと RPM パッケージの一覧を示します。パッチは次の URL からダウンロードできます。

<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/patch-access>

表 3-4 Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードするためのパッチ

パッチの説明	パッチ ID と RPM 名
共有コンポーネント	29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」 を参照してください
Administration Server	118079-05: <ul style="list-style-type: none"> • 製品 : sun-admin-server-5.2-13.i386.rpm • コンソール : sun-server-console-5.2-13.i386.rpm • マニュアルページ : sun-admin-server-man-5.2-3.i386.rpm
Directory Server	118080-05: <ul style="list-style-type: none"> • 製品 : sun-directory-server-5.2-19.i386.rpm • マニュアルページ : sun-directory-server-man-5.2-3.i386.rpm
Directory Proxy Server	118096-04: <ul style="list-style-type: none"> • 製品 : sun-directory-proxy-server-5.2-9.i386.rpm
Messaging Server	115 ページの「Messaging Server のアップグレード」 を参照してください
Calendar Server	87 ページの「Calendar Server のアップグレード」 を参照してください

▶ Linux 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードする

次の手順には、Directory Proxy Server、Calendar Server、および Messaging Server に関する手順も含まれています。使用しないコンポーネント製品があれば、それに関する手順は無視してください。

1. コンソールが稼働している場合は停止します。
2. すべてのサーバーを次の順序で停止します。
 - a. Calendar Server
 - b. Messaging Server
 - c. Directory Proxy Server
 - d. Administration Server
 - e. Directory Server

各サーバーの停止方法については、それぞれの管理ガイドを参照してください。

3. [表 3-4](#) のパッチ番号と RPM 名に基づいて、必要なパッチを入手します。この情報を参照して、RPM のバージョン番号を確認してください。この手順では、旧バージョン (5.2 2004Q2) の Directory Server、Directory Proxy Server、および Administration Server の RPM を、<oldversion> と表現しています。
4. Linux 用の共有コンポーネントパッチクラスタを適用します。これについては、[29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」](#)を参照してください。
5. Administration Server コンポーネントの各 RPM を適用します。
 - a. Administration Server の製品の RPM を適用します。

- I. RPM を次のように適用します。

```
# rpm -Fvh sun-admin-server-5.2-13.i386.rpm
```

Administration Server が以前に設定されていた場合、次のエラーが返されます。

```
error: execution of %preun scriptlet from
sun-admin-server-5.2-<oldversion> failed, exit status 1
```

この場合、旧バージョンの RPM を、次のように --noscripts オプションを使って削除します。

```
# rpm -e --noscripts sun-admin-server-5.2-<oldversion>
```

- II. Administration Server が以前に設定されていた場合、設定ディレクトリサーバーが稼働中であることを確認したあと、次のコマンドを使ってアップグレード後の設定を設定ディレクトリサーバーと同期させます。

```
# /opt/sun/sbin/mpsadmserver sync-cds
```

- III. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。
- IV. アップグレードが成功したことを確認します。

```
# rpm -q sun-admin-server
```

RPM の新しいバージョン番号が返されることを確認します。

- b. Administration Server のコンソールの RPM を適用します。

```
# rpm -Fvh sun-server-console-5.2-13.i386.rpm
```

- c. Administration Server のマニュアルページの RPM をインストールします。

```
# rpm -ivh sun-admin-server-man-5.2-3.i386.rpm
```

6. Directory Server コンポーネントの各 RPM を適用します。

- a. Directory Server を Administration Server なしのスタンドアロンとして実行している場合、最初の Directory Server インストール時にインストールされた部分的な Administration Server をアップグレードする必要があります。

それには、Administration Server の RPM を適用します。

```
# rpm -Fvh sun-admin-server-5.2-13.i386.rpm
```

- b. Directory Server の製品の RPM を適用します。

- I. RPM を次のように適用します。

```
# rpm -Fvh sun-directory-server-5.2-19.i386.rpm
```

Directory Server が以前に設定されていた場合、次のエラーが返されます。

```
error: execution of %preun scriptlet from  
sun-directory-server-5.2-<oldversion> failed, exit status 1
```

この場合、旧バージョンの RPM を、次のように --noscripts オプションを使って削除します。

```
# rpm -e --noscripts sun-directory-server-5.2-<oldversion>
```

- II. Directory Server が以前に設定されていた場合、設定ディレクトリサーバーが稼働中であることを確認したあと、次のコマンドを使ってアップグレード後の設定を設定ディレクトリサーバーと同期させます。

```
# /opt/sun/sbin/directoryserver sync-cds
```

- III. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。

- IV. アップグレードが成功したことを確認します。

```
# rpm -q sun-directory-server
```

RPM の新しいバージョン番号が返されることを確認します。

- c. Directory Server のマニュアルページの RPM をインストールします。

```
# rpm -ivh sun-directory-server-man-5.2-3.i386.rpm
```

7. Directory Proxy Server コンポーネントの RPM を適用します。

- a. 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。

- b. RPM を適用します。

```
# rpm -Fvh sun-directory-proxy-server-5.2-9.i386.rpm
```

アップグレード後の設定と設定ディレクトリサーバーとの同期が、自動的に実行されます。

- c. 設定ディレクトリサーバーがローカルの場合、その設定ディレクトリサーバーを停止します。

8. Messaging Server コンポーネントの RPM を適用します。これについては、115 ページの「Messaging Server のアップグレード」を参照してください。
9. Calendar Server コンポーネントの RPM を適用します。これについては、87 ページの「Calendar Server のアップグレード」を参照してください。
10. サーバーを次の順序で再起動します。
 - a. Directory Server
 - b. Administration Server
 - c. Directory Proxy Server
 - d. Messaging Server
 - e. Calendar Server
11. Linux RH AS 2.1 を Linux RH AS 3 にアップグレードする場合、この時点でそれを行います。これについては、Linux のドキュメントを参照してください。

クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server のアップグレード

ここでは、クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server をアップグレードおよびバックアウトする方法について説明します。Sun Cluster データサービスとしての Directory Server をアップグレードまたはバックアウトする前に、次の点を考慮してください。

- アップグレードまたはバックアウトの処理中は、Directory Server を停止します。旧バージョンの Directory Server 5.2 バイナリは、アップグレード後の Directory Server インスタンス上では実行できません。
- アップグレード処理またはバックアウト処理の実行前に、データをバックアップしておきます。
- クラスタのすべてのノードを、同一のバージョンおよびリリースの Directory Server および関連する Administration Server を使って実行します。
- クラスタのすべてのノードへのパッチ適用は、同時にではなく、1 つずつ順番に行います。
- クラスタをフェイルオーバーモードで実行している場合、HAStorage から HAStoragePlus へのアップグレードを検討してください。

▶ クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server をアップグレードする

1. 各 Directory Server インスタンスと関連する Administration Server を停止します。それには、次のコマンドを使用します。

```
# serverroot/stop-admin  
# serverroot/slaped-instancename/stop-slaped
```

2. 現在のクラスタノードをアクティブノードにします。

```
# scswitch -z -g ldap-group -h this-node-name
```
3. 70 ページの「Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をアップグレードする」で説明した手順に従って、現在のノードをアップグレードします。
4. 別のクラスタノードをアクティブノードにします。

```
# scswitch -z -g ldap-group -h another-node-name
```
5. クラスタに含まれるすべてのノードがアップグレードされるまで、手順 3 と手順 4 を繰り返します。

▶ クラスタ内のデータサービスとしての Directory Server をバックアウトする

1. 各 Directory Server インスタンスと関連する Administration Server を停止します。それには、次のコマンドを使用します。

```
# serverroot/stop-admin  
# serverroot/slaped-instancename/stop-slaped
```

2. 現在のクラスタノードをアクティブノードにします。

```
# scswitch -z -g ldap-group -h this-node-name
```
3. 73 ページの「Solaris 上の Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server をバックアウトする」で説明した手順に従って、現在のノードをバックアウトします。
4. 別のクラスタノードをアクティブノードにします。

```
# scswitch -z -g ldap-group -h another-node-name
```
5. クラスタに含まれるすべてのノードがバックアウトされるまで、手順 3 と手順 4 を繰り返します。

Application Server のアップグレード

ユーザーが使用しているバージョンの Application Server は、Java Enterprise System の一部としてインストールされたか、Solaris オペレーティングシステムにバンドルされていたかの、2つの可能性があります。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [81 ページの「Solaris にバンドルされていたバージョンからのアップグレード」](#)
- [81 ページの「その他のすべてのバージョンからのアップグレード」](#)
- [82 ページの「クラスタのアップグレード: アップグレードの方法」](#)
- [84 ページの「PE および EE のアップグレード時に発生する可能性のある問題の修正」](#)

Solaris にバンドルされていたバージョンからのアップグレード

Java Enterprise System インストーラは、Solaris にバンドルされていたバージョンの Application Server を自動的にアップグレードできます。

Java Enterprise System インストーラを使用し、『Sun Java Enterprise System 2005Q1 インストールガイド』の手順に従って Application Server 8.1 にアップグレードします。

その他のすべてのバージョンからのアップグレード

Application Server 7.0 UR を Application Server 8.1 EE にアップグレードするには、次の手順に従います。

1. スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになります。
2. すべての Application Server と関連プロセスを停止します。
3. 依存関係にある Sun Java Message Queue の旧バージョンを最新の Sun Java Message Queue 3 2005Q1 にアップグレードします。詳細については、[99 ページの「Message Queue のアップグレード」](#)を参照してください。

4. 必要に応じて、依存関係にある古い Java Enterprise System 2003Q4 バージョンの Web Server をアップグレードします。詳細については、140 ページの「[Web Server のアップグレード](#)」を参照してください。これは、負荷分散プラグインをインストールする場合にのみ必要な手順です。
5. Application Server 7.0 UR config ディレクトリの Admin サーバーインスタンスと Domain サーバーインスタンスの両方をバックアップします。
6. Java Enterprise Systems インストーラを使って、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q1 をインストールします。その際、「あとで設定」オプションを選択します。詳細については、『Sun Java Enterprise System 2005Q1 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-0808?l=ja>) を参照してください。
7. インストールのターゲットディレクトリとソースディレクトリの両方を識別します。次に例を示します。
 - デフォルトの Application Server 7.0 UR - /opt/SUNWappserver7
 - デフォルトの Application Server 8.1 EE - /opt/SUNWappserver/appserver
8. 管理ユーザー名、パスワード、およびマスターパスワードを確認します。
9. Application Server ディレクトリの下に格納されている asupgrade ツールを起動します。次に例を示します。


```
<appserver_install_dir>/asupgrade      -アップグレードウィザードモード
<appserver_install_dir>/asupgrade -c    -アップグレードコンソールモード
```
10. アップグレードウィザードまたはアップグレードコンソールによって、アップグレード手順が案内されます。

Application Server のアップグレードユーティリティの詳細については、『Application Server Enterprise Edition 8.1 Upgrade and Migration Guide 2005Q1』(<http://docs.sun.com/doc/819-0222>) の第 3 章を参照してください。

クラスタのアップグレード: アップグレードの方法

Application Server のアップグレードユーティリティは、クラスタの詳細情報をクラスタ設定ファイル `clinstance.conf` から取得します。Application Server 7.x に対して 2 つ以上のクラスタが定義されていた場合、アップグレード前に複数の `.conf` ファイルが存在している可能性があります。設定ファイルには任意の名前をつけることができますが、その拡張子は常に `.conf` になります。クラスタがアップグレードに含まれる場合、`clinstance.conf` ファイルの定義時に次の点を考慮してください。

clinstance.conf ファイル内のインスタンス名は、一意である必要があります。たとえば、Application Server 7.x において、マシン A 上に特定のクラスタに属する server1 と server2 が存在しているとします。また、マシン B 上にも、それと同じクラスタに属する server1 が存在しているとします。このとき、clinstance.conf ファイルには通常、マシン A の server1 と server2、およびマシン B の server1 が含まれることになります。Application Server 8.1 では、クラスタ内のインスタンス名が一意である必要があります。したがって、アップグレードを行う前に、clinstance.conf ファイル内で、マシン B の server1 の名前を、「server3」や「server1of machine B」などの一意名に変更する必要があります。ただし、マシン B 内の server1 インスタンス自体の名前を変更する必要はありません。変更する必要があるのは、clinstance.conf ファイル内のサーバー名だけです。なお、クラスタ内のインスタンスは「同種」であることが期待されますが、それは、同種のリソースを備え、同一のアプリケーションが配備されている、という意味においてです。

アップグレード処理を実行すると、マスターインスタンスとしてマークされたインスタンスが、設定転送用として選択されます。マスターインスタンスとしてマークされたインスタンスが存在しない場合は、インスタンスのうちの 1 つがランダムに選択され、それが設定転送用として使用されます。

クラスタは、clinstance.conf ファイル内に定義されているインスタンスとともに、DAS 内で作成されます。このクラスタに属するインスタンスはすべて、<cluster_name>-config という名前の同一の設定を共有します。ここで、cluster_name は、最初のクラスタでは cluster_0、次のクラスタでは cluster_1、といった具合になります。クラスタ内の各インスタンスのシステムプロパティ内には、HTTP ポートと IIOP ポートが設定されます。HTTP ポートは、clinstance.conf ファイル内でインスタンスポートとして定義されていたポートになります。IIOP ポートは、server.xml ファイル内の iiop-cluster 設定から選択されます。

このクラスタに属しているが、DAS マシンとは異なるマシン上で稼働しているサーバーインスタンスは、<host-name>-<domain-name> という名前のノードエージェントを使って作成されます。ここで、host-name は、clinstance.conf ファイル内でその特定のインスタンス用に設定された名前であり、domain-name は、このクラスタが属するドメインの名前です。

DAS 上でのアップグレード処理が完了したら、クラスタ化されたインスタンスを実行する必要があるその他のマシン上で、Application Server 8.1 をインストールします。

1. `install-dir/nodeagents/` の下にあるノードエージェントのディレクトリを、DAS マシンからクライアントマシンへコピーします。たとえば、DAS が HostA 上にインストールされており、クライアントマシンの名前が HostB である場合、アップグレード処理を実行すると、「HostB-<domain_name>」という名前のノードエージェントが、HostB のノードエージェントとして作成されます。したがって、

HostA の `<AS81_install_dir>/nodeagents/HostB-<domain_name>` ディレクトリから HostB の `<AS81_install_dir>/nodeagents` へ、`HostB-<domain_name>` をコピーします。コピーが終わったら、そのコピーしたノードエージェントのディレクトリを HostA から削除します。

2. クライアントマシン HostB 上の `agent/config` ディレクトリの下にある `nodeagent.properties` ファイルを編集します。`agent.client.host` をそのクライアントマシンの名前に設定します。この場合、HostB です。
3. クライアントマシン HostB 上の `agent/config` ディレクトリの下にある `das.properties` ファイルを編集します。`das.properties` ファイル内で `agent.das.isSecure=false` となっていることを確認してください。Application Server 7.x の Administration Server がデフォルトでセキュリティ保護されていないポート上で実行されていた場合、この値を `false` に設定すべきです。Application Server 7.x の Administration Server がセキュリティ保護されたポート上で実行されていた場合、この値を `true` に設定すべきです。
4. ドメインを起動し、DAS マシンとクライアントマシンの両方でノードエージェントを起動します。すると、クラスタ化されたインスタンスが実行されます。

PE および EE のアップグレード時に発生する可能性のある問題の修正

ここでは、Application Server 8.1 へのアップグレード時に発生する可能性のある次の各問題に対する解決方法を示します。

- ソースサーバー上で定義された追加 HTTP リスナーのターゲット PE サーバーへの移行
- ソースサーバー上で定義された追加 HTTP リスナーと IIOP リスナーのターゲット EE サーバーへの移行
- ポートの競合問題の解消
- 単一ドメイン内に複数の証明書データベースパスワードが存在する場合に発生する問題の解消

ソースサーバー上で定義された追加 HTTP リスナーのターゲット PE サーバーへの移行

PE ソースサーバーで追加の HTTP リスナーが定義されていた場合、アップグレード後にそれらのリスナーを PE ターゲットサーバーに追加する必要があります。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 「設定」を展開します。
3. 「HTTP サービス」を展開します。

4. 「仮想サーバー」を展開します。
5. <server> を選択します。
6. 右側の区画で、追加の HTTP リスナー名を「HTTP リスナー」フィールドに追加します。
7. 完了したら「保存」をクリックします。

ソースサーバー上で定義された追加 HTTP リスナーと IIOP リスナーのターゲット EE サーバーへの移行

ソースサーバーで追加の HTTP リスナーまたは IIOP リスナーが定義されていた場合、クラスタ化されたインスタンスを起動する前に、ターゲット EE サーバーの IIOP ポートを手動で更新しておく必要があります。たとえば、クラスタに属する `server1` で `MyHttpListener` が追加 HTTP リスナーとして定義されていた場合、クラスタ内のサーバーインスタンスは互いに対称的になっているため、クラスタ内のほかのインスタンスでも、その同じ HTTP リスナーが定義されています。ターゲットの構成

<cluster_name>-config 内で、このリスナーを追加し、そのポートを特定のシステムプロパティ (`myHttpListener_HTTP_LISTENER_PORT`) に設定する必要があります。ターゲットサーバーでは、この構成を使用するこのクラスタ内のサーバーインスタンスのそれぞれが、`myHttpListener_HTTP_LISTENER_PORT` という名前のシステムプロパティを持つことになります。このプロパティの値は、どのサーバーインスタンスの場合も、ソースサーバーである `server1` のポート値に設定されます。サーバーを起動する前に、これらのサーバーインスタンスのシステムプロパティの値を競合しないポート番号に手動で更新する必要があります。

ソースサーバーで追加の HTTP リスナーが定義されていた場合、アップグレード後にそれらのリスナーをターゲットサーバーに追加する必要があります。

1. 管理コンソールを起動します。
2. 「設定」を展開し、対象の <server>-config 設定を選択します。
3. 「HTTP サービス」を展開します。
4. 「仮想サーバー」を展開します。
5. <server> を選択します。
6. 右側の区画で、追加の HTTP リスナー名 (複数可) を「HTTP リスナー」フィールドに追加します。
7. 完了したら「保存」をクリックします。

ポートの競合問題の解消

ソースサーバーを AS 8.1 EE にアップグレードし終わったら、ドメインを起動します。ノードエージェントを起動します。すると、デフォルトでサーバーインスタンスが起動します。管理コンソールを起動し、これらのサーバーが起動されていることを確認します。実行されていないサーバーが見つかった場合、

`<install_dir>/nodeagents/<node-agent-name>/<server_name>/logs/server.log` ファイル内で、ポートの競合によるエラーが発生していないか確認します。ポートの競合によるエラーが発生していた場合、管理コンソールを使って競合が解消されるようにポート番号を変更したあと、ノードエージェントとサーバーをいったん停止し、再起動します。

クラスタを持たない AS 7.1 EE ソースサーバーを AS 8.1 EE にアップグレードする場合 (スタンドアロンのインスタンスのみをアップグレードする場合)、AS 7.1 ソースサーバーの `server1` で IOP ポート番号 3700 が定義されていると、AS 8.1 の `server-config` で定義された IOP ポートと競合します。このような場合は、アップグレード後に管理コンソールを起動し、`server-config` の IOP リスナーの IOP ポートを、競合しない任意のポート番号に変更します。AS 7.x SE ソースサーバーを AS 8.1 EE にアップグレードする場合は、アップグレード処理時に `<server-config>` の IOP ポートが自動更新されます。

単一ドメイン内に複数の証明書データベースパスワードが存在する場合に発生する問題の解消

アップグレードに証明書が含まれる場合、移行対象の証明書を格納するドメインごとに、ソース PKCS12 ファイルとターゲット JKS キーファイルに対するパスワードを入力します。Application Server 7 が使用する証明書ストア形式 (NSS) は Application Server 8 PE が使用する形式 (JSSE) とは異なるため、移行対象の鍵と証明書はその新しい形式に変換されます。1 つのドメインでサポートされる証明書データベースパスワードは、1 つだけです。単一ドメイン内で複数の証明書データベースパスワードが使用されている場合、アップグレードを開始する前に、それらのパスワードをすべて同一のものに変更します。そして、アップグレードの終了後にパスワードを再設定します。

Calendar Server のアップグレード

ここでは、Sun Java System Calendar Server を 2005Q1 リリースにアップグレードする方法について説明します。Calendar Server のアップグレードには、その他の Java Enterprise System コンポーネントのアップグレードや適切なパッチの適用が伴います。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 「非クラスタ配備のアップグレード」
- 89 ページの「クラスタ配備をアップグレードする」
- 89 ページの「Delegated Administrator をアップグレードする」
- 89 ページの「Calendar Server パッチを削除する」

非クラスタ配備のアップグレード

実際の状況に合ったアップグレード手順を実行してください。

- Java Enterprise System の旧バージョンからのアップグレード (87 ページの「旧 Calendar Server バージョンからのアップグレード」を参照)。
- Java Enterprise System Calendar Server より前のバージョンからのアップグレード (145 ページの「Calendar Server の移行に関する情報」を参照)。

旧 Calendar Server バージョンからのアップグレード

1. 共有コンポーネントをアップグレードします。

Calendar Server コアソフトウェアを 6 2005Q1 にアップグレードする前に、表 3-5 に示した共有コンポーネントに対するアップグレードパッチを入手する必要があります。

表 3-5 Calendar Server の共有コンポーネントのアップグレードパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
116103 リビジョン番号 -06 以上	ICU (International Components for Unicode)	Solaris 8 SPARC
114677 リビジョン番号 -08 以上	ICU (International Components for Unicode)	Solaris 9 SPARC
117722 リビジョン番号 -09 以上	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0	Solaris 8 SPARC
117724 リビジョン番号 -09 以上	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0	Solaris 9 SPARC

- a. `patchadd` コマンドを使って ICU (International Components for Unicode) パッチ (116103 または 114677) を適用します。
 - b. `patchadd` コマンドを使ってセキュリティパッチ (117722 または 117724) を適用します。
2. `patchadd` コマンドを使って依存パッチを適用します。

Calendar Server コアパッチを適用する前に、表 3-6 の対応する依存パッチをインストールする必要があります。

表 3-6 Calendar Server の依存パッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
118099 リビジョン番号 -01 以上	Calendar Server の依存パッチ	Solaris 8 または 9 SPARC
118100 リビジョン番号 -01 以上	Calendar Server の依存パッチ	Solaris 9 x86

3. Calendar Server 6 2005Q1 リリースにアップグレードするには、`patchadd` コマンドを使って表 3-7 の対応するコアソフトウェアパッチを適用します。

表 3-7 Calendar Server のアップグレードパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
116577 リビジョン番号 -18 以上	Calendar Server コアソフトウェア	Solaris 8 および 9 SPARC
116578 リビジョン番号 -14 以上	Calendar Server コアソフトウェア	Solaris 9 x86
117011 リビジョン番号 -14 以上	Calendar Server ロケール	Solaris 9 x86
117010 リビジョン番号 -16 以上	Calendar Server ロケール	Solaris 8 または 9 SPARC
117851 リビジョン番号 -14 以上	Calendar Server コアソフトウェア	Linux
117852 リビジョン番号 -14 以上	Calendar Server ロケール	Linux

4. Directory Server セットアップ用 Perl スクリプトをインストールおよび実行します。45 ページの「[Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード](#)」を参照してください。
5. Calendar Server 6 2005Q1 を設定します。

注 この手順が必要となるのは、Calendar Server が以前に設定されていない場合だけです。

Calendar Server の設定プログラム (csconfigurator.sh) を実行します。

手順については、『Sun Java System Calendar Server 6 2004Q2 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/817-7086?l=ja>) の第 3 章「Calendar Server の設定」を参照してください。

▶ クラスタ配備をアップグレードする

1. クラスタサービスを停止します。
`cal_svr_base/cal/sbin/stop-cal`
2. 次のように入力し、Calendar Server を含むクラスタノードを特定します。
`# pkginfo | grep -i sunwics5`
3. Calendar Server がインストールされている各ノードで、87 ページの「[非クラスタ配備のアップグレード](#)」の手順を実行します。

▶ Delegated Administrator をアップグレードする

Calendar Server では、Delegated Administrator を使ってユーザー、グループ、ドメイン、およびリソースのプロビジョニングを行う必要があります。122 ページの「[Delegated Administrator へのアップグレード](#)」を参照してください。

▶ Calendar Server パッチを削除する

Java Enterprise System 2005Q1 パッチを削除するときは、次の手順を実行します。

1. Calendar Server を停止します。
`cal_svr_base/cal/sbin/stop-cal`
2. カレンダーデータベースのバックアップを取ります。デフォルトのデータベースディレクトリは、次のとおりです。
`/var/opt/SUNWics5/csdb`
3. 88 ページの手順 3 で追加した該当する Calendar Server パッチを削除します。

Communications Express のアップグレード

ここでは、Sun Java System Communications Express 6 2004Q2 を 2005Q1 リリースにアップグレードする方法について説明します。Communications Express のアップグレードには、その他の Java Enterprise System コンポーネントのアップグレードや適切なパッチの適用が伴います。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 90 ページの「Communications Express 6 2004Q2 からのアップグレード」
- 92 ページの「Communications Express の設定」
- 94 ページの「Communications Express 6 2005Q1 設定のバックアウト」

注 Messaging Server 6 2003Q4 を最新リリースにアップグレードするには、まず Messaging Server 6 2004Q2 にアップグレードする必要があります。同一システム上に存在するすべてのコンポーネント製品を、2004Q2 レベルに同時にアップグレードする必要があります。

詳細については、『Sun Java Enterprise System 2004Q2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/doc/817-7054?l=ja>) の第 8 章を参照してください。

Communications Express 6 2004Q2 からのアップグレード

Communications Express のメールで S/MIME を使用するには、ここで説明する手順に従う必要があります。

S/MIME を設定するには、Communications Express 6 2005Q1 のインストールと設定の完了後に、次の節で説明している作業も行う必要があります。

- 95 ページの「S/MIME のサポートに必要な共有コンポーネントのインストール」

Communications Express を実行するには、Communications Express ソフトウェアと同一のマシン上に Messaging Server のインスタンスがインストールされている必要があります。

Communications Express をアップグレードする前に、次のものをアップグレードする必要があります。

- 共有コンポーネント
- JDK と Web コンテナ (Web Server または Application Server)
- Messaging Server
- Calendar Server

- Directory Server とスキーマ
1. Communications Express のアップグレードパッチを適用します。

Communications Express 6 2005Q1 リリースにアップグレードするには、表 3-8 に示したパッチを適用します。

表 3-8 Communications Express のアップグレードパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
118540 最新リリース	Communications Express ソフトウェア (S/MIME を含む)	Solaris 8 および 9 SPARC
118042 最新リリース	ローカライゼーション	Solaris 8 および 9 SPARC
118541 最新リリース	Communications Express ソフトウェア (S/MIME を含む)	Solaris 9 x86
118043 最新リリース	ローカライゼーション	Solaris 9 x86
118542 最新リリース	Communications Express ソフトウェア (S/MIME を含む)	Linux
118044 最新リリース	ローカライゼーション	Linux

2. 適切なパッチをインストールします。
 - Solaris の場合
 - 次の patchadd コマンドを実行します。


```
patchadd 118540-xx
```
 - 次のコマンドを実行してパッチのインストールが成功したかどうかを確認します。このパッチの ID がコマンド出力に含まれていることを確認してください。


```
$ showrev -p | grep uwc
```

警告 patchadd コマンドで -d オプションを使用すると、あとでパッチインストールをバックアウトできなくなります。

- Linux の場合：
 - 次のコマンドを実行してパッチをインストールします。

```
rpm -F <directory-under-which-patch-tarball-was-untarred>/ <uwc-patch.rpm>
```

- 次のコマンドを実行してパッチのインストールが成功したかどうかを確認します。この rpm の名前がコマンド出力に含まれていることを確認してください。

```
rpm -qa |grep uwc
```

rpm 名の例としては、sun-uwc-6.1.7.x などが挙げられます。

Communications Express の設定

パッチファイルとパッチ設定を Communications Express に適用するには、スクリプト patch-config と install-newconfig を実行する必要があります。

- patch-config スクリプトを実行すると、既存ファイルのバックアップが保存されるほか、既存配備に含まれている .properties ファイルとパッチにバンドルされている新しい .properties ファイルデータとがマージされます。

新しいパッチファイルとバックアップファイルは、
<uwc-basedir>/SUNWuwc/install/patch/<patchID>/save の下に作成されます。

ここで、<patchID> は、設定されるパッチの番号です。

save ディレクトリは、パッチ設定中に作成されます。save ディレクトリは <uwc-basedir> ディレクトリと同じディレクトリ構造をとり、バックアップファイルを格納します。

このスクリプトは、Communications Express パッチ内に含まれる各ファイルに対して 2 つのファイルを、<uwc-basedir>/SUNWuwc/install/patch/<patchID>/save の下に準備します。

たとえば、2 つのファイル <web.xml> と <web.xml>.new が、save/WEB-INF の下に作成されます。

ここで、各ファイルは次のとおりです。

<web.xml> は、旧 Communications Express 配備からバックアップされたファイルを表します。

<web.xml>.new は、Sun Java System Communications Express 6 2005Q1 からインストールされた新しいファイルを表します。このファイルは、install-newconfig プログラム実行時に配備場所へとコピーされます。

- install-newconfig スクリプトを実行すると、Sun Java System Communications Express 6 2005Q1 のファイルが配備場所にコピーされます。

install-newconfig スクリプトは、patch-config スクリプトによって準備されたすべての .new ファイルを Communications Express 配備内にコピーし、その既存の Communications Express 配備から特定の共有コンポーネントの JAR ファイルを削除します。

配備場所から削除される JAR ファイルは、次のとおりです。

```
am_logging.jar, am_sdk.jar, am_services.jar, jaxp-api.jar, jss3.jar, sax.jar,
xtype.jar, xmlutil.jar
```

1. patch-config スクリプトを実行します。

patch-config スクリプトは、インストールすべきパッチファイルを準備します。このスクリプトは、既存カスタマイズのバックアップをとり、新しい設定変更をマージします。この手順では既存の設定は更新されない点に注意してください。

Solaris の場合：

```
/opt/SUNWuwc/sbin/patch-config -d /var/opt/SUNWuwc /opt/SUNWuwc
/install/patch/<patchID>
```

ここで、-d は、Communications Express が配備されているディレクトリです。

Linux の場合：

```
/opt/sun/uwc/sbin/patch-config -d /var/opt/sun/uwc /opt/sun/uwc
/install/patch/<patchID>
```

2. 次のコマンドを実行することで、patch-config スクリプトによって準備されたパッチファイルを配備場所にコピーします。この手順で既存の設定が更新されます。この手順の実行が成功したら、既存配備が Java Enterprise System 3 にアップグレードされたこととなります。

Solaris の場合：

```
/opt/SUNWuwc/sbin/install-newconfig /opt/SUNWuwc/install/patch /<patchID>
```

ここで、/opt は、Communications Express のパッケージベースディレクトリ (uwc-basedir) です。

Linux の場合：

```
/opt/sun/uwc/sbin/install-newconfig /opt/sun/uwc/install/patch /<patchID>
```

ここで、/opt/sun/uwc は、Communications Express の rpm インストールディレクトリ (uwc-basedir) を表します。

3. アドレス帳のスキーマを更新します。

アドレス帳のスキーマを更新するには、次の手順を実行する必要があります。

- a. Messaging Server JES3 パッチにアップグレードします。

- b. Directory Server セットアップ用 Perl スクリプトをインストールおよび実行します。45 ページの「Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード」を参照してください。
4. Web コンテナ内に格納されている、このアプリケーションに対する JSP クラス キャッシュを削除します。

たとえば、Solaris システム上の Web Server のデフォルトインストールでは、このキャッシュは次の場所に格納されます。

```
/opt/SUNWwbsvr/<virtual-instance>/ClassCache/<virtual-instance>/uwc
```
5. 変更を有効にするために、Communications Express アプリケーションが配備されている Web コンテナインスタンスを再起動します。

Communications Express 6 2005Q1 設定のバックアウト

Sun Java System Communications Express 6 2005Q1 をバックアウトするには、次の手順に従います。

1. `<uwc-basedir>/SUNWuwc/sbin/backout-newconfig` を実行します。

ここで、`<uwc-basedir>` は、Communication Express のパッケージベースディレクトリを表します。たとえば、Communications Express 配備からパッチ 118540-xx 設定をバックアウトするには、次のように入力します。

- o Solaris の場合

```
opt/SUNWuwc/sbin/backout-newconfig /opt/SUNWuwc/install  
/patch/118540-xx
```

- o Linux の場合

```
/opt/sun/uwc/sbin/backout-newconfig /opt/sun/uwc/install/patch  
/118540-xx
```

`backout-newconfig` スクリプトは、Communications Express 配備の状態を、最後のパッチ設定が適用される直前の状態に戻します。

このスクリプトは、最後のパッチ設定後に実行されたすべてのカスタマイズおよび変更のバックアップを、ディレクトリ

`<uwc-basedir>/install/patch/118540-xx/save` 内に、拡張子 `.backup` を付けて保存します。

警告

`backout-newconfig` スクリプトは 1 度だけ実行してください。このスクリプトを再度実行すると、`.backup` ファイルが古いデータで上書きされてしまいます。

2. 次のコマンドを実行してパッチインストールをバックアウトします。

```
patchrm <patch ID>
```

たとえば、`patchrm 118540-xx` などとします。

3. Web コンテナ内に格納されている、このアプリケーションに対する JSP クラス キャッシュを削除します。
4. 変更を有効にするために、Communications Express アプリケーションが配備されている Web コンテナインスタンスを再起動します。

S/MIME のサポートに必要な共有コンポーネントのインストール

Communications Services 6 2005Q1 リリースにおいて、Communications Express メールで S/MIME を使用するためには、特定の共有コンポーネントをインストールする必要があります。

Communications Express メールの S/MIME を設定する前に、ここで説明する手順に従ってください。

1. Messaging Server をインストールします (115 ページの「Messaging Server のアップグレード」を参照)。

2. `pkgadd` コマンドを使ってこれらのパッケージをインストールします。次に例を示します。

```
pkgadd -d /working_directory SUNWjaf
```

```
pkgadd -d /working_directory SUNWjmail
```

`pkgadd` コマンドを実行すると、次のファイルが `/usr/share/lib` ディレクトリにコピーされます。

- o activation.jar
- o mail.jar

3. コアソフトウェアパッチを適用して Messaging Server をアップグレードする前に、`activation.jar` ファイルと `mail.jar` ファイルが `/usr/share/lib` ディレクトリにコピーされたことを確認します。

4. Communications Express メールの S/MIME を設定します。

Communications Express メールの S/MIME の設定方法については、『Messaging Server 6 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1054?l=ja>) を参照してください。

Directory Server のアップグレード

Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server は、同一の Administration Server を共有する製品グループに属しています。これらの製品に対して、同時にパッチを適用する必要があります。

Directory Server をアップグレードおよびバックアウトする方法については、[68 ページの「Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード」](#)を参照してください。

Directory Proxy Server のアップグレード

Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server は、同一の Administration Server を共有する製品グループに属しています。これらの製品に対して、同時にパッチを適用する必要があります。

Directory Proxy Server をアップグレードおよびバックアウトする方法については、[68 ページの「Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード」](#)を参照してください。

Instant Messaging のアップグレード

このリリースの Java Enterprise System は、既存のインストール上に直接インストールできます。ただし、処理を進める前に現在のインストールのバックアップをとっておくことをお勧めします。

Java Enterprise System のアップグレードは、[96 ページの表 3-9](#)に記載されている旧バージョンのソフトウェアから行えます。

表 3-9 Java Enterprise System アップグレードシナリオ

オペレーティングシステム	アップグレード元
Solaris	Java Enterprise System Instant Messaging 6.1
	Java Enterprise System Instant Messaging 6 2004Q2
Linux	Java Enterprise System Instant Messaging 6.1
	Java Enterprise System Instant Messaging 6 2004Q2

表 3-9 に記載されていない旧バージョンの Instant Messaging からアップグレードするには、まず、サポートされているリリースのいずれかにアップグレードする必要があります。

次の作業を行う必要があります。

1. カスタマイズしたすべてのリソースファイルを含め、現在のインストールをバックアップします。
2. Instant Messaging ソフトウェアを入手します。
3. Instant Messaging サーバーのシャットダウン予定時刻を決定します。
4. シャットダウンの予定時刻を前もってユーザーに知らせます。

upgrade ユーティリティは、既存の設定詳細を使用します。ただし、以前の設定を変更する必要がある場合は、アップグレード終了後に configure ユーティリティを実行できます。手順については、『Sun Java System Instant Messaging 管理ガイド』を参照してください。

▶ 旧リリースの Instant Messaging をアップグレードする

1. データベース、およびカスタマイズした既存のすべてのリソースファイルと設定ファイルをバックアップします。これには、DB ディレクトリ、インストールディレクトリ、およびリソースディレクトリ内のファイルが含まれます。インストールディレクトリには設定ファイルも含まれています。これらのファイルのデフォルトのディレクトリは、次のとおりです。

Solaris

DB ディレクトリ : /var/opt/SUNWiim/default/db

インストールディレクトリ : /opt/SUNWiim

リソースディレクトリ : /opt/SUNWiim/html

Linux

DB ディレクトリ : /var/opt/sun/im/db

インストールディレクトリ : /opt/sun/im

リソースディレクトリ : /opt/sun/im/html

2. Sun Java System Instant Messaging and Presence API のパッケージ (SUNWiimdv) または RPM (sun-im-dev) が、すでにシステム上にインストールされているかどうかを確認します。それには、Solaris 上では次のように入力します。

```
# pkginfo SUNWiimdv
```

このパッケージがインストールされていない場合は、次のメッセージが表示されます。

```
ERROR: information for "SUNWiimdv" was not found
```

SUNWiimdv がインストールされていた場合、それを削除します。それには、Solaris 上では次のように入力します。

```
# pkgrm SUNWiimdv
```

パッケージまたは RPM を削除し終わったら、CD の共有コンポーネント領域から新しいバージョンをインストールします。Solaris の例を次に示します。

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_<arch>/Product/shared_components/Packages
# pkgadd -d . SUNWiimdv
```

Linux では次のようにします。

```
rpm -e sun-im-dev
rpm -i
/mnt/cdrom/Linux_x86/Product/shared_components/Packages/sun-im-dev*rp
m
```

3. upgrade ユーティリティを実行します。

Solaris:

```
# cd /cdrom/cdrom0/Solaris_arch/Product/instant_messaging/Tools
# ./upgrade
```

上の例では、製品 CD 上でコマンドが検索されます。ダウンロード場所からコマンドを実行するには、次のように入力します。

```
# cd /unzipped location/Solaris_arch/Product/instant_messaging/Tools
# ./upgrade
```

Linux:

```
# cd /dev/cdrom/Linux_x86/Product/instant_messaging/Tools/
# ./upgrade
```

アップグレード中にユーティリティが行う処理は、次のとおりです。

- 作業ファイルを格納するための一時ディレクトリを作成します。このディレクトリは、Instant Messaging が正常にアップグレードされた時点で削除されます。
- 既存の Instant Messaging 設定に基づいて管理ファイルを作成します。ユーティリティは、アップグレードされたインストールの設定時にこの管理ファイルを使用します。
- 以前の設定と新しいデフォルトとの間で競合が発生した場合、パラメータ値をマージします。ユーティリティは、アップグレードを実行しているあいだ、マージファイルを一時ディレクトリ内に格納しておき、このファイルを使って競合を解決します。
- 旧バージョンの Instant Messaging サーバーをシャットダウンします。
- 新しいパッケージをインストールし、既存のパッケージにパッチを当てます。

- Instant Messaging およびその他の Java Enterprise System サーバーが使用する共有コンポーネントのパッケージが存在しなかった場合、それらのパッケージをすべてインストールします。
 - 以前の IIM_DOCROOT パラメータがデフォルト以外の値に設定されていた場合、新しいリソースファイルの場所から以前の場所へのリンクを作成し、以前と同じ可用性が得られるようにします。
 - すべてのサービスを再起動します。
 - 一時ディレクトリとその中身を削除します。
4. (省略可能) 必要に応じて設定を変更します。詳細については、『Sun Java System Instant Messaging 管理ガイド』を参照してください。

upgrade ユーティリティは、アップグレード処理の進捗を示すログファイルを、次の場所に作成します。

```
/var/sadm/install/logs/Instant_Messaging_Upgrade.<timestamp>
```

ここで、<timestamp> は、yyyymmddhhss の形式になります。

Message Queue のアップグレード

Message Queue を旧バージョンからアップグレードし、必要に応じて移行を行うには、次の手順に従います。

ただし、ここでは、「アップグレード」は、Message Queue 3 2005Q1 (3.6) 製品をインストールすることを意味し、「移行」は、既存データを旧 Message Queue インストールから Message Queue 3 2005Q1 インストールへ移動することを意味するものとします。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [100 ページの「アップグレードと移行の概要」](#)
- [101 ページの「アップグレードパスの選択」](#)
- [104 ページの「Solaris での Message Queue のアップグレード」](#)
- [108 ページの「Linux でのアップグレードおよび移行」](#)

アップグレードと移行の概要

Sun Java Enterprise System 3 2005Q1 に含まれるスクリプトを使用すると、Java Enterprise System に付属していた旧バージョンの Message Queue をアップグレードおよび移行できます。また、スタンドアロン製品としてインストールされたバージョンの Message Queue を、これらのスクリプトでアップグレードおよび移行することも可能です。

表 3-10 に、Java Enterprise System によるアップグレードと移行をサポートする Message Queue 製品のバージョンを示します。これらのバージョンの一部は、Java Enterprise System インストーラを使ってアップグレードできます。それ以外のバージョンでは、Java Enterprise System が提供するスクリプトを使って Message Queue の移行とアップグレードを手動で行う必要があります。

ユーザーが使用しているバージョンの Message Queue は、スタンドアロンバージョンとしてインストールされたか、あるいは Solaris オペレーティングシステムにバンドルされていた可能性があります。表 3-10 には、サポートされているスタンドアロン版および Solaris バンドル版 Message Queue のバージョンも記載されています。

表 3-10 アップグレードと移行をサポートする Message Queue のバージョン

Message Queue のバージョン	可能なインストール方法
Message Queue 3.0.1 SP2 Platform Edition	Java Enterprise System 1 2003Q4
Message Queue 3.0.1 SP2 Enterprise Edition	
Message Queue 3.5 SP1 Platform Edition	Java Enterprise System 2 2004Q2
Message Queue 3.5 SP1 Enterprise Edition	
Message Queue 3.0.x-3.6 Platform Edition	スタンドアロンの Message Queue
Message Queue 3.0.x-3.5 SP2 Enterprise Edition	
Message Queue 3.0.x-3.6 Platform Edition	Solaris OS にバンドル

Message Queue の移行およびアップグレードの処理には、次の手順の 1 つ以上が含まれます。

- Message Queue のバージョンとエディションの情報を確認する
通常、アップグレード前にバージョンとエディションの情報を確認する必要があります。また、アップグレード処理後に Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition の存在を確認する必要があることもあります。

- 既存の Message Queue データを移行する
プラットフォームの種類によっては、スクリプトを実行して既存のブローカインスタンスデータを移行しなければならないことがあります。
- Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードする
Solaris プラットフォーム、Linux プラットフォームのいずれの場合も、プラットフォームの種類によっては、スクリプトを実行して Message Queue をアップグレードしなければならないことがあります。
- Message Queue をアンインストールする
アップグレード後に Message Queue をアンインストールするには、プログラムファイルを手動でアンインストールする必要があります。

アップグレードパスの選択

アップグレードおよび移行のパスは、オペレーティングシステムごとに異なります。

表 3-11 に、オペレーティングシステムと現在インストールされている Message Queue ソフトウェアのエディションごとに、従うべきアップグレードおよび移行のパスを示します。

表 3-11 Message Queue 3 2005Q1 (3.6) のアップグレードおよび移行のパス

オペレーティングシステム	インストール済み Message Queue のエディション	アップグレードと移行のパス
Solaris SPARC Solaris x86	バンドル版の Message Queue Platform Edition	<p>Java Enterprise System インストーラを使用すると、Solaris バンドル版としてインストールされたすべてのバージョンの Message Queue Platform Edition を自動的にアップグレードできます。</p> <p>Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードするには、Java Enterprise System インストーラを使用し、『Java Enterprise System インストールガイド』の手順に従います。</p> <p>関連する移行上の問題は存在しません。すべてのブローカインスタンスデータが維持されます。</p>

表 3-11 Message Queue 3 2005Q1 (3.6) のアップグレードおよび移行のパス (続き)

オペレーティングシステム	インストール済み Message Queue のエディション	アップグレードと移行のパス
Solaris SPARC Solaris x86	バンドル版以外の Message Queue Platform Edition	<p>Solaris とは「別個に」インストールされた Message Queue Platform Edition バージョンの場合、Java Enterprise System インストーラからエラーメッセージが生成される可能性があります。その場合は、104 ページの「Solaris での Message Queue のアップグレード」の手順に従います。この手順では、Java Enterprise System ディストリビューションの解凍先の次の場所にある mqupgrade スクリプトを使用します。</p> <p>Solaris SPARC の場合： Solaris_sparc/Product/message_queue/Tools</p> <p>Solaris x86 の場合： Solaris_x86/Product/message_queue/Tools</p>
Solaris SPARC Solaris x86	Message Queue Enterprise Edition	<p>関連する移行上の問題は存在しません。すべてのブローカインスタンスデータが維持されます。</p> <p>Java Enterprise System インストーラでは、Solaris 上にインストールされた「どの」バージョンの Message Queue Enterprise Edition もアップグレードできません。</p> <p>Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードするには、104 ページの「Solaris での Message Queue のアップグレード」の手順に従います。</p>

表 3-11 Message Queue 3 2005Q1 (3.6) のアップグレードおよび移行のパス (続き)

オペレーティングシステム	インストール済み Message Queue のエディション	アップグレードと移行のパス
Linux (RPM ベース)	Message Queue Platform Edition Message Queue Enterprise Edition	<p>Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Platform Edition から 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition へアップグレードする場合で、既存データを移行する必要がある場合、移行上の問題は存在しないため、mqmigrate スクリプトは実行しないでください。</p> <p>Linux の場合、旧 Message Queue バージョンとは異なる場所に Message Queue 3 2005Q1 (3.6) がインストールされます。既存のブローカインスタンスデータを移行するには、Message Queue をアップグレードする前に、そのデータを新しいインストール場所にコピーするための mqmigrate スクリプトを実行する必要があります。</p> <p>Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition に移行およびアップグレードするには、108 ページの「Linux でのアップグレードおよび移行」の手順に従います。この手順で行う処理は、次のとおりです。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 旧バージョンの Message Queue に対する RPM ベースのインストールを検索します。 2. 見つかった場合、mqmigrate スクリプトを実行して既存のブローカインスタンスデータを移行します。 3. mqupgrade スクリプトを実行して Message Queue をアップグレードします。 <p>スクリプト mqmigrate と mqupgrade は、Java Enterprise System ディストリビューションの解凍先の次の場所にあります。</p> <pre>Linux_x86/Product/message_queue/Tools</pre> <p>注: 既存のブローカ情報を維持する必要がない場合は、mqupgrade スクリプトのみを使用します。</p>

表 3-11 Message Queue 3 2005Q1 (3.6) のアップグレードおよび移行のパス (続き)

オペレーティングシステム	インストール済み Message Queue のエディション	アップグレードと移行のパス
Linux (tar ベース)	Message Queue Platform Edition Message Queue Enterprise Edition	<p>旧バージョンの Message Queue に対する RPM ベースのインストールを検索します。108 ページの「Message Queue の RPM インストールバージョンの確認」を参照してください。</p> <p>RPM ベースのインストールが見つからない場合、旧バージョンの Message Queue に対する tar ベースのインストールを検索します。</p> <p>必要であれば、mqmigrate スクリプトを実行してデータを新しい場所に移行します。</p> <p>mqupgrade は使用しないでください。</p> <p>代わりに、tar ベースの Message Queue インストールをアンインストールします。110 ページの「tar ベースの Message Queue インストールの検索と削除」を参照してください。</p> <p>Java Enterprise System インストーラを使って Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition をインストールします。</p>

Solaris での Message Queue のアップグレード

ここでは、Solaris 上の Message Queue を Java Enterprise System 2005Q1 バージョンにアップグレードする手順を示します。この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 104 ページの「[バージョン情報の確認](#)」
- 105 ページの「[Message Queue のアップグレード](#)」
- 107 ページの「[Message Queue のアンインストール](#)」

バージョン情報の確認

アップグレードの前後で、システム上にインストールされた Message Queue のエディションとバージョンの情報を確認する必要があります。

▶ システム上にインストールされた Message Queue の製品エディションを確認する

1. 次のコマンドを入力します。

```
pkginfo | grep SUNWiq
```

SUNWiq を含むパッケージファイルの一覧が表示された場合、システム上に Message Queue がインストールされています。

さらに、パッケージファイル SUNWiq1en が表示された場合、システム上に Enterprise Edition がインストールされています。

システム上に Message Queue パッケージがインストールされている場合、その Message Queue の製品バージョンも確認できます。

▶ システム上にインストールされた Message Queue の製品バージョンを確認する

1. 次のコマンドを入力します。

```
pkgparam -v SUNWiqr SUNW_PRODVERS
```

SUNW_PRODVERS の値が製品バージョンです。表 3-12 に、各リリースに対して返される SUNW_PRODVERS の値を示します。

表 3-12 Message Queue に対して返される SUNW_PRODVERS の値

Message Queue のリリース	SUNW_PRODVERS の値
3.0.1	3.0.1
3.0.1 SP1	3.0.1 SP1
3.0.1 SP 2	3.0.1 SP2
3.5	3.5
3.5 SP1	3.5 SP1
3.5 SP2	3.5 SP2
3 2005Q1 (3.6)	3.6.0.0

Message Queue のアップグレード

▶ Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードする

1. 稼働中のすべての Message Queue クライアントアプリケーションを停止します。
2. 稼働中のすべてのブローカを停止します。管理ユーザー名とパスワードの入力を求められます。

```
imqcmd shutdown bkr [-b hostName:port]
```

3. 各ブローカーインスタンスに関連付けられた動的データ、Message Queue フラットファイルユーザーリポジトリ、および Message Queue アクセス制御ファイルを削除する必要がある場合、それらのデータを次のコマンドを使って削除します。

```
imqbrokerd -name instanceName -remove instance
```

注 Message Queue 3.0.1 をアップグレードする前に、`accesscontrol.properties` ファイルと `passwd` ファイルのバックアップをとってください。mqupgrade スクリプトの実行後にこれらのファイルを復元します。それにより、ユーザーアカウントデータを維持できます。これらのファイルの場所については、173 ページの表 5-4 を参照してください。

4. root としてログインします。

```
su root
```

5. Java Enterprise System ディストリビューションを解凍した場所から、Tools ディレクトリに移動します。

- Solaris SPARC の場合：

```
cd Solaris_sparc/Product/message_queue/Tools
```

- Solaris x86 の場合：

```
cd Solaris_x86/Product/message_queue/Tools
```

6. mqupgrade スクリプトを実行します。

```
./mqupgrade
```

mqupgrade スクリプトは、インストールされている共有コンポーネントファイルを一覧表示します。

7. 共有コンポーネントを更新する場合は、**y** (yes) と入力します。

共有コンポーネントを更新しない場合は、**n** (no) と入力します。

注 共有コンポーネントがすでに Sun Java Enterprise System インストーラによって更新済みである場合、**n** (no) と入力し、Message Queue コンポーネントのインストールに進んでください。

mqupgrade スクリプトは、インストールされている Message Queue コンポーネントを一覧表示します。

8. Message Queue パッケージを更新する場合は、**y** (yes) と入力します。

Message Queue コンポーネントを更新しない場合は、**n (no)** と入力します。mqupgrade スクリプトは、Message Queue コンポーネントをインストールせずに終了します。

mqupgrade スクリプトは、インストールされているロケールファイルを検出し、それらを一覧表示します。

9. ロケールファイルを更新する場合は、**y (yes)** と入力します。ロケールファイルを更新しない場合は、**n (no)** と入力します。

mqupgrade スクリプトは、次の場所にあるログファイルに出力を送信します。

```
/var/sadm/install/logs/Message_Queue_upgrade_'date' .log
```

Message Queue のアンインストール

mqupgrade スクリプトを使って Message Queue をアップグレードした場合、Java Enterprise System のアンインストールプログラムを使って Message Queue をアンインストールすることはできません。代わりに、次の手順に従って Message Queue コンポーネントを手動でアンインストールする必要があります。

► Solaris 上の Message Queue をアンインストールする

1. 稼働中のすべての Message Queue クライアントアプリケーションを停止します。
2. 稼働中のすべてのブローカを停止します。管理ユーザー名とパスワードの入力を求められます。

```
imqcmd shutdown bkr [-b hostName:port]
```

3. 各ブローカインスタンスに関連付けられた動的データ、Message Queue フラットファイルユーザーリポジトリ、および Message Queue アクセス制御ファイルを削除する必要がある場合、それらのデータを次のコマンドを使って削除します。

```
imqbrokerd -name instanceName -remove instance
```

4. root になります。

```
su root
```

5. インストールされている Message Queue パッケージの一覧を、次のコマンドを使って取得します。

```
pkginfo | grep -i "message queue"
```

6. 次のコマンドを使って Message Queue パッケージを削除します。

```
pkgrm packageName
```

ここで、*packageName* は、任意の Message Queue パッケージです。複数のパッケージを削除するには、各パッケージ名の間を空白で区切ります。

ほかの製品が Message Queue パッケージを使用している可能性があるため、パッケージの削除は慎重に行なってください。パッケージに依存関係が存在する場合、`pkgrm` コマンドはパッケージを削除する前にその旨をユーザーに警告します。

プロンプトが表示された場合、**y** (yes) と入力して削除要求を確認します。

7. **q**] と入力して処理を終了します。
8. `root` シェルを終了します。

Linux でのアップグレードおよび移行

ここでは、Linux 上の任意の旧バージョンの Message Queue を Java Enterprise System 2005Q1 バージョンにアップグレードする手順を示します。この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [108 ページの「Message Queue の RPM インストールバージョンの確認」](#)
- [110 ページの「tar ベースの Message Queue インストールの検索と削除」](#)
- [110 ページの「Message Queue データの移行」](#)
- [113 ページの「Message Queue のアップグレード」](#)
- [114 ページの「sun-mq-compat パッケージのインストール」](#)
- [114 ページの「Message Queue のアンインストール」](#)

Message Queue のバージョンによっては、`tar` ファイルを使ってインストールされている可能性もありますし、Red Hat Package Manager (RPM) を使ってインストールされている可能性もあります。したがって、インストールされているバージョンを確認するには、その両方を確認する必要があります。最初に RPM インストールを確認し、次に `tar` ファイルインストールを確認することをお勧めします。

アップグレードの前後で、システム上にインストールされた Message Queue のエディションとバージョンの情報を確認する必要があります。

Message Queue の RPM インストールバージョンの確認

- ▶ **システム上にインストールされた Message Queue のバージョンとエディションを確認する**

1. 次のコマンドを入力します。

```
rpm -qa | grep mq
```

該当の RPM が見つかった場合、各 RPM のバージョン番号は、その RPM 名の中に埋め込まれています。該当のものが見つからなかった場合は、「[tar ベースの Message Queue インストールの検索と削除](#)」に進んでください。

表 3-13 に、RPM 名に対応する各 Message Queue リリースのバージョン番号を示します。

旧バージョンの Message Queue については、`imq-ent` パッケージライセンスファイルが表示された場合、システム上に Enterprise Edition がインストールされています。

Message Queue 3 2005Q1 (3.6) については、`sun-mq-ent` パッケージライセンスファイルが表示された場合、システム上に Enterprise Edition がインストールされています。

表 3-13 Message Queue RPM バージョン名

Message Queue のリリース	RPM 名
3.0.1	<code>imq-3.0.1-01</code> <code>imq-ent-3.0.1-01</code> <code>imq-<i><lc></i>-3.0.1-01</code>
3.0.1 SP1	<code>imq-3.0.1-02</code> <code>imq-ent-3.0.1-02</code> <code>imq-<i><lc></i>-3.0.1-02</code>
3.0.1 SP2	<code>imq-3.0.1-03</code> <code>imq-ent-3.0.1-03</code> <code>imq-<i><lc></i>-3.0.1-03</code>
3.5	<code>imq-3_5-01</code> <code>imq-ent-3_5-01</code> <code>imq-<i><lc></i>-3_5-01</code>
3.5 SP1	<code>imq-3_5-02</code> <code>imq-ent-3_5-02</code> <code>imq-<i><lc></i>-3_5-02</code>
3.5 SP2	<code>imq-3_5-03</code> <code>imq-ent-3_5-03</code> <code>imq-<i><lc></i>-3_5-03</code>
3 2005Q1 (3.6)	<code>sun-mq-3.6-<i><RelNo></i></code> <code>sun-mq-capi-3.6-<i><RelNo></i></code> <code>... config, compat, ent, jaxm, jmsclient,</code> <code>xmlclient, var, sup ...</code> <code>sun-mq-<i><lc></i>-3.6-<i><RelNo></i></code>

tar ベースの Message Queue インストールの検索と削除

tar ベースの Message Queue インストールが存在している場合、そのアップグレード処理は、RPM ベースのインストールの場合とは若干異なります。Message Queue のリリース 3.0.1 と 3.0.1 SP1 では、tar ベース、RPM ベースの両方のディストリビューションがリリースされました。

▶ tar ベースの旧 Message Queue インストールを検索して削除する

1. デフォルトの Message Queue インストールディレクトリ (/opt/imq/bin) がシステム上に存在するかどうかを確認します。

見つかった場合は、[手順 2](#)に進みます。

見つからなかった場合、Message Queue はデフォルト以外の場所にインストールされている可能性があります。そのインストールディレクトリを覚えていない場合は、Message Queue の imqbrokerd 実行可能ファイルを検索し、そのルートインストールディレクトリを書き留めておきます。[手順 2](#)に進みます。

2. デフォルトの場所 (/opt/imq/bin) に旧 Message Queue インストールが見つかった場合、それを次の手順で削除します。

- a. 既存のブローカインスタンスデータを維持する必要がある場合は、「[Message Queue データの移行](#)」の手順に従って mqmigrate ユーティリティを実行します。

mqmigrate ユーティリティは、既存のブローカインスタンスデータ (ブローカの設定ファイルと持続データ) とセキュリティ関連ファイルを、新しい Message Queue 3 2005Q1 (3.6) の格納場所に移動します。

- b. /opt/imq/ ディレクトリとその中身をすべて削除します。

```
rm -rf /opt/imq
```

3. Java Enterprise System インストーラを使って Linux 用の Message Queue 3 2005Q1 (3.6) をインストールします。

Message Queue データの移行

Linux の場合、旧 Message Queue バージョンとは異なる場所に Message Queue がインストールされます。既存のブローカインスタンスデータを移行するには、Message Queue をアップグレードする前に、そのデータを新しいインストール場所にコピーするための mqmigrate スクリプトを実行する必要があります。

注	<p>旧 Message Queue リリースのブローカインスタンスデータを移行しない場合、mqmigrate スクリプトを使用する必要はありません。</p> <p>Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Platform Edition から Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition へのアップグレード時には、mqmigrate スクリプトを使用しないでください。このインスタンスではすべてのデータがすでに正しい場所に格納されており、移行上の問題は存在しません。</p>
----------	---

mqmigrate スクリプトは次の場所に存在します。

`baseJESdistDir/Linux_x86/Product/message_queue/Tools`

ここで、`baseJESdistDir` は、Java Enterprise System ディストリビューションファイルが解凍された場所です。

mqmigrate スクリプトの `-basedir` オプションを使用すると、デフォルト以外の場所にインストールされたデータを移行できます。ただし、このオプションの対象ユーザーは、Message Queue 3.0.x データをデフォルト以外の場所にインストールしたユーザーだけです。Message Queue 3.5 では、デフォルト以外の場所に Message Queue をインストールできないようになっていました。

mqmigrate スクリプトは `root` として実行する必要があります。また、その構文は次のとおりです。

```
mqmigrate [-basedir baseDir]
```

表 3-14 に、Message Queue インストールのデフォルトのデータの場所を示します。mqmigrate スクリプトは、デフォルトでこれらの場所を使用します。Message Queue 3.0.x では、デフォルトの場所 (括弧の部分) 以外へのインストールが可能でした。Message Queue がデフォルト以外の場所にインストールされている場合、表 3-15 で説明している `-basedir` オプションを使ってその場所をユーティリティに指示する必要があります。

表 3-14 Message Queue のデフォルトのデータの場所

Message Queue 3.0.x のデータの場所	Message Queue 3.5 のデータの場所	Message Queue 3 2005Q1 (3.6) のデータの場所
<code>[/opt]/imq/var</code>	<code>/var/opt/imq</code>	<code>/var/opt/sun/mq</code>
<code>[/opt]/imq/etc</code>	<code>/etc/opt/imq</code>	<code>/etc/opt/sun/mq</code>

表 3-15 では、mqmigrate スクリプトの `-basedir` オプションについて説明しています。このオプションが必要となるのは、デフォルト以外の場所にインストールされた Message Queue 3.0.x データを移行する場合だけです。

表 3-15 mqmigrate スクリプトの basedir オプション

mqmigrate のオプション	説明
-basedir	<p>Message Queue 3.0.x ファイルがインストールされたデフォルト以外のディレクトリを指定します。</p> <p>たとえば、旧データが /my_mq ディレクトリ内に解凍されていた場合、旧データの移行時に次のオプションを指定します。</p> <pre data-bbox="576 479 762 501">-basedir /my_mq</pre> <p>mqmigrate ユーティリティは、Message Queue 3.0.x のベースディレクトリを、/opt と仮定します。</p>

▶ デフォルトの場所にインストールされた Message Queue のブローカインスタンスデータを新しいディレクトリ var と opt に移行する

1. Java Enterprise System ディストリビューションを解凍した場所から、Tools ディレクトリに移動します。

```
cd Linux_x86/Product/message_queue/Tools
```

2. root としてログインします。

```
su root
```

3. 次のコマンドを使ってブローカインスタンスデータを移行します。

```
./mqmigrate
```

▶ デフォルト以外の場所 /my_mq にインストールされた Message Queue 3.0.1 のブローカインスタンスデータを新しいディレクトリ var と opt に移行する

1. Java Enterprise System ディストリビューションを解凍した場所から、Tools ディレクトリに移動します。

```
cd Linux_x86/Product/message_queue/Tools
```

2. root としてログインします。

```
su root
```

3. 次のコマンドを使ってブローカインスタンスデータを移行します。

```
./mqmigrate -basedir /my_mq
```


Message Queue のアップグレード

ブローカインスタンスデータの移行が完了したら、mqupgrade スクリプトを使って Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードできます。

▶ Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition にアップグレードする

- 稼働中のすべての Message Queue クライアントアプリケーションを停止します。
- 稼働中のすべてのブローカを停止します。管理ユーザー名とパスワードの入力を求められます。

```
imqcmd shutdown bkr [-b hostName:port]
```

- root としてログインします。

```
su root
```

- Java Enterprise System ディストリビューションを解凍した場所から、mqupgrade スクリプトが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd Linux_x86/Product/message_queue/Tools
```

- mqupgrade スクリプトを実行します。

```
./mqupgrade
```

mqupgrade スクリプトは、共有コンポーネントを一覧表示します。

- 共有コンポーネントをアップグレードする場合は、**y (yes)** と入力します。共有コンポーネントをアップグレードしない場合は、**n (no)** と入力します。

注 共有コンポーネントがすでに Sun Java Enterprise System インストーラによって更新済みである場合、**n (no)** と入力し、Message Queue コンポーネントのインストールに進んでください。

mqupgrade スクリプトは、インストールされている Message Queue コンポーネントを一覧表示します。

- Message Queue コンポーネントをアップグレードする場合は、**y (yes)** と入力します。

Message Queue コンポーネントをアップグレードしない場合は、**n (no)** と入力します。mqupgrade スクリプトは、Message Queue コンポーネントをインストールせずに終了します。

mqupgrade スクリプトは、次の場所にあるログファイルに出力を送信します。

```
/var/sadm/install/logs/Message_Queue_upgrade_'date' .log
```

sun-mq-compat パッケージのインストール

クライアントアプリケーションに、Message Queue 3.5 ファイルのインストール場所に依存するスクリプトが含まれている場合、sun-mq-compat パッケージをインストールする必要があります。このパッケージには、Message Queue 3.5 のファイル格納場所から Message Queue 3 2005Q1 (3.6) のファイル場所へのシンボリックリンクが含まれています。

sun-mq-compat パッケージは、Java Enterprise System ディストリビューションの解凍先の次の場所にあります。

```
Linux_x86/Product/message_queue/Packages
```

▶ sun-mq-compat パッケージをインストールする

1. root になります。

```
su root
```

2. パッケージ用ディレクトリから次のコマンドを使用します。

```
rpm -ivh --nodeps sun-mq-compat-3.6-<RelNo>.i386.rpm
```

Message Queue のアンインストール

mqupgrade スクリプトを使って Message Queue をアップグレードした場合、Java Enterprise System のアンインストールプログラムを使って Message Queue をアンインストールすることはできません。代わりに、次の手順に従って Message Queue コンポーネントを手動でアンインストールする必要があります。

▶ Linux 上の Message Queue をアンインストールする

1. 稼働中のすべての Message Queue クライアントアプリケーションを停止します。
2. 稼働中のすべてのブローカを停止します。管理ユーザー名とパスワードの入力を求められます。

```
imqcmd shutdown bkr [-b hostName:port]
```

3. 各ブローカインスタンスに関連付けられた動的データ、Message Queue フラットファイルユーザーリポジトリ、および Message Queue アクセス制御ファイルを保持する必要がない限り、それらのデータを次のコマンドを使って削除します。

```
imqbrokerd -name instanceName -remove instance
```

4. root になります。

```
su root
```

5. インストールされている Message Queue パッケージの一覧を、次のコマンドを使って取得します。

```
rpm -qa | grep sun-mq
```

6. 次のコマンドを使って Message Queue パッケージを削除します。

```
rpm -e --nodeps RPMName
```

ここで、*RPMName* は、任意の Message Queue パッケージです。複数のパッケージを削除するには、各パッケージ名の間を空白で区切ります。

Messaging Server のアップグレード

ここでは、旧 Java Enterprise System バージョンから Messaging Server 6 2005Q1 にアップグレードする手順を説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 115 ページの「非クラスタ配備のアップグレード」
- 120 ページの「クラスタ配備のアップグレード」
- 122 ページの「Delegated Administrator へのアップグレード」
- 121 ページの「Messaging Server パッチの削除」

非クラスタ配備のアップグレード

実際の状況に合ったアップグレード手順を実行してください。

- Messaging Server 6 2003Q4 からのアップグレード (115 ページの「[Messaging Server 6 2003Q4 からのアップグレード](#)」を参照)。
- Messaging Server 6 2004Q2 からのアップグレード (117 ページの「[Messaging Server 6 2004Q2 からのアップグレード](#)」を参照)。
- Java Enterprise System Messaging Server 以前のバージョンからのアップグレード (160 ページの「[Messaging Server の移行に関する情報](#)」を参照)。

Messaging Server 6 2003Q4 からのアップグレード

Messaging Server 6 2003Q4 を最新リリースにアップグレードするには、まず Messaging Server 6 2004Q2 にアップグレードする必要があります。

注 同一システム上に存在するすべてのコンポーネント製品を、2004Q2 レベルに同時にアップグレードする必要があります。

詳細については、『Sun Java Enterprise System 2004Q2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/doc/817-7054?l=ja>) の第 8 章を参照してください。

1. /etc/hosts ファイルのエントリを確認します。

Solaris システム上で、/etc/hosts ファイル内に次のエントリが存在することを確認します。

```
<ip-of system> <FQHN> <hostname>
```

例: 129.158.230.64 example.com example

2. Messaging Server 6 2004Q2 (6.1) をインストールするか、あるいは Messaging Server 6 2004Q2 (6.1) にアップグレードします。

Messaging Server 6 2005Q1 (6.2) へのアップグレードを行うには、まず Messaging Server 6 2004Q2 (6.1) をインストールする必要があります。

- Messaging Server 6 2004Q2 (バージョン 6.1) がすでにインストール済みである場合は、117 ページの「Messaging Server 6 2004Q2 からのアップグレード」に進めます。

Delegated Administrator をインストールする場合は、下の「[Delegated Administrator の要件](#)」に記載されたコンポーネントがインストールされていることを確認してください。

- Messaging Server を初めてインストールする場合は、Java Enterprise インストーラを使ってインストールを実行できます。

Messaging Server 6 2004Q2 (6.1) のインストール手順については、『Sun Java Enterprise System 2004Q2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/doc/817-7054?l=ja>) を参照してください。

注 この手順では、Messaging Server を設定する必要はありません。120 ページの「[Messaging Server 6 2005Q1 の設定](#)」で Messaging Server を設定します。

Delegated Administrator の要件

Delegated Administrator をインストールする予定である場合、Java Enterprise System 2004Q2 インストーラを使って次のコンポーネントをインストールする必要があります。

- Access Manager (旧 Identity Server)
- ユーザー管理ユーティリティ (commadmin)。

commadmin ユーティリティは、Access Manager のコンポーネントの 1 つとしてインストールされます。

注	<p>Communications Services 6 2005Q1 リリースで、ユーザー管理ユーティリティ (commadmin) の名称が変更されました。このユーティリティは、Delegated Administrator ユーティリティと呼ばれるようになりました。</p> <p>インストール手順については、『Sun Java Enterprise System 2004Q2 インストールガイド』(http://docs.sun.com/doc/817-7054?l=ja) を参照してください。</p> <p>Delegated Administrator を使用するには、LDAP ディレクトリが Schema 2 である必要があります。</p>
----------	--

3. 「Messaging Server 6 2004Q2 からのアップグレード」に進みます。

Messaging Server 6 2004Q2 からのアップグレード

ここでは、Messaging Server 6 2004Q2 (6.1) を Messaging Server 6 2005Q1 にアップグレードする手順を説明します。

1. 必須共有コンポーネントをアップグレードします。

Messaging Server コアソフトウェアを 6 2005Q1 にアップグレードする前に、表 3-16 に示した共有コンポーネントに対するアップグレードパッチを入手する必要があります。29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照してください。

表 3-16 Messaging Server の共有コンポーネントのアップグレードパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
116103 リビジョン番号 -04 以上	ICU (International Components for Unicode)	Solaris 8 SPARC
114677 リビジョン番号 -08 以上	ICU (International Components for Unicode)	Solaris 9 SPARC
114678 リビジョン番号 -08 以上	ICU (International Components for Unicode)	Solaris 9 x86
117722 リビジョン番号 -09 以上	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0	Solaris 8 SPARC
117724 リビジョン番号 -09 以上	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0	Solaris 9 SPARC
117725 リビジョン番号 -10 以上	NSPR 4.5.0 / NSS 3.9.3 / JSS 4.0	Solaris 9 x86

表 3-16 Messaging Server の共有コンポーネントのアップグレードパッチ (続き)

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
116837 リビジョン番号 -02 以上	LDAP-C-SDK 5.11	Solaris 9 SPARC
116838 リビジョン番号 -02 以上	LDAP-C-SDK 5.11	Solaris 9 x86

上記のパッチは Solaris システム用です。同等の Linux RPM については、[34 ページ](#)の「[Linux 共有コンポーネント RPM の適用](#)」を参照してください。

- a. patchadd コマンドを使って ICU (International Components for Unicode) パッチ (114677) を適用します。
 - b. patchadd コマンドを使ってセキュリティパッチ (117724) を適用します。
 - c. patchadd コマンドを使って LDAP-C-SDK パッチ (116837) を適用します。
2. Messaging Server のアップグレードパッチを適用します。

Messaging Server コアパッチを適用する前に、ICU パッチ (114677)、LDAP-C-SDK パッチ (116837)、および NSPR/NSS/JSS パッチ (117724) をインストールする必要があります。

Messaging Server 6 2005Q1 リリースにアップグレードするには、[表 3-17](#) に示したソフトウェアパッチの中から、該当するものを適用します。

表 3-17 Messaging Server のアップグレードパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
118207 最新リビジョン	Messaging Server コアソフトウェア (S/MIME を含む)	Solaris 8 および 9 SPARC
118208 最新リビジョン	Messaging Server コアソフトウェア (S/MIME を含む)	Solaris 8 および 9 x86
118209 最新リビジョン	Messaging Server コアソフトウェア (S/MIME を含む)	Linux
117784 リビジョン番号 -03 以上	ローカライゼーション	Solaris 8 および 9 SPARC
117785 リビジョン番号 -03 以上	ローカライゼーション	Solaris 8 および 9 x86

表 3-17 Messaging Server のアップグレードパッチ (続き)

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
117786 リビジョン番号 -03 以上	ローカライゼーション	Linux
116574 リビジョン番号 -01 以上	vcsha	Solaris 8 および 9 SPARC
116575 リビジョン番号 -01 以上	vcsha	Solaris 8 および 9 x86

Messaging Server コアパッチを適用するには、次の手順に従います。

- a. スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになります。
- b. そのパッチに関する重要な指示と最新情報が記載された README ファイルを参照します。
- c. 使用するプラットフォームに応じた適切な Messaging Server パッチを、patchadd コマンドを使って適用します。

パッチの適用後、設定ファイルをアップグレードする必要があります。新しい設定ファイルをインストールする準備ができるまで、旧設定ファイルを使って Messaging Server を実行し続けることができます。詳細については、「[Messaging Server 6 2005Q1 の設定](#)」を参照してください。

Directory Server セットアップ用 Perl スクリプト (comm_dssetup.pl) のパッチを適用するには、次の手順に従います。この手順は、Directory Server がインストールされたマシン上で実行する必要があります。

- a. 作業ディレクトリに移動します。
 - b. patchadd コマンドを使って Directory Server セットアップ用 Perl スクリプトパッチ 118242 と 118245 をインストールします。両方のパッチをインストールする必要があります。
3. Directory Server セットアップ用 Perl スクリプトをインストールおよび実行します。45 ページの「[Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード](#)」を参照してください。

Messaging Server 6 2005Q1 の設定

Messaging Server 6 2005Q1 を設定するには、2 つの方法があります。実際の状況に適した方法を選択してください。

- 115 ページの「[Messaging Server 6 2003Q4 からのアップグレード](#)」で Messaging Server 6 2004Q2 (6.1) を初めてインストールした場合、つまり、Messaging Server をまだ一度も設定していない場合、標準の Messaging Server 設定プログラム (configure) を実行できます。

手順については、『Sun Java System Messaging Server 6 2004Q2 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/817-7098?l=ja>) の第 1 章「インストール後の作業とレイアウト」を参照してください。

- このアップグレード処理を開始する前に Messaging Server 6 2004Q2 (6.1) のインストールと設定がすでに完了していた場合は、Messaging Server 6 2005Q1 パッチを設定に適用できます。それには、スクリプト patch-config と install-newconfig を実行します。詳細については、使用しているプラットフォームに応じて、パッチ 118207、118208、または 118209 の README ファイルの「Special Installation Instructions」を参照してください。

ldif ファイルを使って Directory Server に変更を適用します。ldif ファイルは、<msg_svr_base>/lib/patch の下に格納されています。手順については、ldif ファイル内のコメントを参照してください。適用された変更をバックアウトするユーティリティは用意されていないので、注意してください。

注 2004Q2 (6.1) からのアップグレード時には、上記の LDIF ファイル内の属性の一部から拒否が生成されます。これは予想どおりの動作です。

クラスタ配備のアップグレード

クラスタ化された環境で Messaging Server の複数のインスタンスを利用している場合は、クラスタを最大限に利用できるように、ローリングアップグレードによって、サーバーを 1 つずつアップグレードします。まず、1 つのマシンで Messaging Server をアップグレードします。Messaging Server のアップグレードには、そのマシン上の Messaging Server 用に、mboxlist データベースの上位バージョンへのアップグレードが含まれます。

クラスタ環境でのインストール方法は、次のとおりです。

1. スタンバイノード上で Messaging Server 6 2005Q1 をインストールします。
2. 一次ノードの設定データを使用するように設定します。
3. スタンバイノードにフェイルオーバーします。
4. クラスタから一次ノードを削除します。

5. `patchadd` を使用して一次ノードをアップグレードします (115 ページの「非クラスタ配備のアップグレード」を参照)。
6. 一次ノードをクラスタに戻します。
7. 設定とデータをスタンバイノードから一次ノードにフェイルオーバーし直します。
8. `patch-config` を実行し、アップグレードされた設定ファイルの新規候補を生成します。
9. アップグレードされた設定ファイルの新規候補の内容を手動で確認します。
10. 一次ノードの設定とデータのダウン時間をスケジューリングします。
ダウン時間中に次の処理を行います。
 - a. 一次ノードのサービスを停止します。
 - b. 新しい `confide` ファイルをインストールします。 `install-confined` コマンドを使用できます。
 - c. コマンドを実行します。


```
msg_svr_base/sbin/imsimta chbuild

msg_svr_base/sbin/imsimta clbuild -image_file=IMTA_COMMAND_DATA
IMTA_BIN:pmdf.cld

msg_svr_base/sbin/imsimta cnbuild
```
 - d. サービスを再起動します。
11. クラスタ上でアップグレードするすべてのノードについて、手順 2 ～ 手順 10 を繰り返します。

Messaging Server パッチの削除

1. `stop-msg` コマンドを使用して、Messaging Server を停止します。
2. 次のように `configutil` コマンドを実行し、監視デーモンを無効にします。


```
configutil -o local.watcher.enable -v no
```
3. `stored -r` コマンドを使用して、メッセージストアデータベース環境ファイルを削除します。
このコマンドを実行してもファイルを削除できない場合は、`stored -R` コマンドを使用します。この場合、ファイルの削除が強制的に実行されます。
4. 次のように入力し、監視デーモンを有効化します。


```
configutil -o local.watcher.enable -v yes
```
5. `mbxlist` ディレクトリの下にあるログファイルを削除します。次に例を示します。

```
rm -f /var/opt/SUNWmsgsr/store/mboxlist/log.*
```

6. `patchrm patch id` コマンドを実行して、Messaging Server 6 2004Q2 パッチを削除します。
7. 必要に応じて、バックアップしておいた設定ファイルを手動で復元します。アップグレード前の設定ファイルは、次の場所に格納されています。

```
msg_svr_base/install/patch/patchnumber/save
```

`patchnumber` は、Messaging Server コアパッチです。

8. 次のように、`imsimta cnbuild` コマンドを実行します。

```
msg_svr_base/sbin/imsimta cnbuild
```

9. 次のように `start-msg` コマンドを使用して、Messaging Server を起動します。

```
msg_svr_base/sbin/start-msg
```

Delegated Administrator へのアップグレード

Communications Services 6 2005Q1 Delegated Administrator は、LDAP Schema 2 ディレクトリで Messaging Server と Calendar Server のユーザー、グループ、ドメイン、およびリソースをプロビジョニングするためのツールです。Delegated Administrator は、1つのコンソールと1つのユーティリティ (`commadmin`) から構成されています。Java Enterprise System 6 2004Q2 では、Delegated Administrator ユーティリティはユーザー管理ユーティリティと呼ばれていました。

ここでは、旧バージョンの Delegated Administrator からアップグレードする方法について説明します。旧バージョンはユーティリティだけから構成されている点に注意してください。ここで説明するアップグレード処理では、Delegated Administrator ユーティリティのアップグレードと Delegated Administrator コンソールのインストールが行われます。

Delegated Administrator のインストール

Delegated Administrator 2005Q1 のインストール手順は、次のとおりです。

1. Messaging Server を Delegated Administrator 用に設定します。[45 ページの「Sun Java System Directory Server LDAP ディレクトリスキーマのアップグレード」](#)を参照してください。
2. を参照してください。`patchadd(1M)` コマンドを使って Delegated Administrator ユーティリティ (Access Manager マシンにデフォルトでインストールされる) の最新パッチをインストールします。このパッチを[表 3-18](#)に示します。このパッチは SunSolve から入手できます。

注 「ユーザー管理ユーティリティ」を設定するためのスクリプトは、旧リリースの Java Enterprise System では config-iscli と呼ばれていましたが、Java Enterprise System 2005Q1 では config-commda という名前に変更されました。

表 3-18 Delegated Administrator のパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
118210 リビジョン番号 -12 以上	Communications Services 6 2005Q1 Delegated Administrator	Solaris 9 SPARC
118211 リビジョン番号 -12 以上	Communications Services 6 2005Q1 Delegated Administrator	Solaris 9 x86
118212 リビジョン番号 -12 以上	Communications Services 6 2005Q1 Delegated Administrator	Linux

3. Delegated Administrator の設定プログラムを実行します (このプログラムは主に、Web コンテナとの協調動作が行えるように Delegated Administrator を設定する)。

詳細については、『Sun Java System Communications Services 6 2005Q1 Delegated 管理者ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1101?l=ja>) の第 3 章「Delegated Administrator の設定」を参照してください。

Mobile Access のアップグレード

ここでは、Mobile Access 6.2 または Sun Java System Portal Server Mobile Access 6 2004Q2 を Sun Java System Portal Server Mobile Access 6 2005Q1 にアップグレードする手順を説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 「[2003Q4 から 2005Q1 へのアップグレード](#)」
- 「[2004Q2 から 2005Q1 へのアップグレード](#)」

2003Q4 から 2005Q1 へのアップグレード

Mobile Access 6.2 は、Java Enterprise System 2003Q4 インストールの Identity Server と Portal Server を補完するために用意された単機能製品です。Mobile Access の機能は、Java Enterprise System 2004Q2 と 2005Q2 の標準機能になりました。現在では、Identity Server と Portal Server のモバイル対応は標準とされています。

Mobile Access 6.2 からアップグレードする場合はまず、『Java Enterprise Systems 2004Q2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/app/docs/doc/817-7054?l=ja>) の第 8 章の手順に従って、Sun Java System Portal Server Mobile Access 6 2004Q2 にアップグレードする必要があります。

以上で、[124 ページ](#)の「[2004Q2 から 2005Q1 へのアップグレード](#)」に進む準備が整いました。

2004Q2 から 2005Q1 へのアップグレード

Sun Java System Portal Server Mobile Access は、Portal Server とともにアップグレードされます。[126 ページ](#)の「[Portal Server のアップグレード](#)」の手順に従ってください。Mobile Access 固有のパッチの一覧を、[表 3-19](#) に示します。

表 3-19 Mobile Access の Solaris パッチ

パッチ	説明
118217-11	SUNWma パッチまたは Mobile Access 共有コンポーネントパッチ
118218-11	SUNWamma、SUNWammae パッチまたは Identity Server Mobile Access パッチ
118219-12	Access Manager Mobile Access パッチ

上記のパッチは、Solaris SPARC および Solaris x86 のシステム用です。表 3-20 に、Access Manager Linux アップグレード RPM を示します。

注 Access Manager が別のマシン上にインストールされている場合、Access Manager がインストールされているそのマシン上でも、Mobile Access 共有コンポーネントパッチと Identity Server Mobile Access パッチをインストールする必要があります。

表 3-20 Mobile Access Linux RPM

RPM	説明
sun-mobileaccess-1.0-25.i386.rpm	SUNWma パッチまたは Mobile Access 共有コンポーネントパッチ
sun-mobileaccess-config-1.0-25.i386.rpm	
sun-identity-mobileaccess-6.2-25.i386.rpm	SUNWamma、SUNWammae パッチ または Identity Server Mobile Access パッチ
sun-identity-mobileaccess-config-6.2-25.i386.rpm	
sun-portal-mobileaccess-6.3-25.i386.rpm	Access Manager Mobile Access パッ チ
sun-portal-mobileaccess-config-6.3-25.i386.rpm	
sun-portal-mobileaccess-doc-6.3-25.i386.rpm	
sun-portal-mobileaccess-identity-6.3-25.i386.rpm	

Portal Server のアップグレード

ここでは、Sun ONE Portal Server 6.2 または Sun Java System Portal Server 6 2004Q2 から Sun Java System Portal Server 6 2005Q1 にアップグレードする手順を説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 126 ページの「パッチおよび RPM へのアクセス」
- 52 ページの「Web コンテナのすべてのカスタマイズファイルのバックアップ」
- 53 ページの「Web コンテナソフトウェアのアップグレード」
- 128 ページの「Access Manager のアップグレード」
- 131 ページの「Portal Server のアップグレード」
- 134 ページの「Delegated Administrator のアップグレード」

注 Sun ONE Portal Server 6.2 からアップグレードする場合はまず、『Java Enterprise Systems 2004Q2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/app/docs/doc/817-7054?l=ja>) の第 8 章の手順に従って、Portal Server 6 2004Q2 にアップグレードする必要があります。

パッチおよび RPM へのアクセス

Solaris 上での Portal Server のアップグレードは、パッチを使用して行われます。表 3-21 に記載されたパッチを SunSolve からダウンロードします (表に記載されたものと同じかそれより新しいリビジョンのものを選択する)。

表 3-21 Sun Java System Portal Server 2005Q1 の Solaris パッチ

パッチの機能領域	Solaris SPARC のパッチ ID	Solaris x86 のパッチ ID
Portal Server コア	118128-13	118129 (最新リビジョン)
Portal Server 同期パッチ	118195-07	118196-07
Mobile Access 共有コンポーネントパッチ	118217-11	118217-11
Access Manager Mobile Access パッチ	118218-11	118218-11
Portal Server Mobile Access パッチ	118219-12	118219-12
Portal Server 修正	118950-01	118951 (最新リビジョン)

Linux 上での Portal Server のアップグレードは、RPM を使用して行われます。表 3-22 に記載されたパッチには SunSolve から、RPM には製品ディストリビューション CD から、それぞれアクセスしてください。

表 3-22 Sun Java System Portal Server 2005Q1 の Linux 用のパッチと RPM

RPM 名とバージョン	説明
118020 (リビジョン番号 -16 以上)	すべての Portal Server RPM を含むパッチ。このパッチは、SunSolve から入手します。
119515 (リビジョン番号 -01 以上)	Mobile Access RPM のパッチ。このパッチは、SunSolve から入手します。
119516 (リビジョン番号 -01 以上)	Access Manager Mobile Access RPM のパッチ。このパッチは、SunSolve から入手します。
118952 (リビジョン番号 -01 以上)	Portal Server RPM に対する修正を含むパッチ。このパッチは、SunSolve から入手します。

Web コンテナのカスタマイズファイルのバックアップ

アップグレードを行う前に、Portal Server 6.2 に関連する Web コンテナのカスタマイズファイルをバックアップします。これには、次のファイルが含まれます。

- カスタマイズしたコンソール JSP ページ
- カスタマイズした認証 JSP ページ
- カスタマイズしたモジュールの JAR ファイル
- カスタマイズしたサンプル Portal Server デスクトップ

警告 Portal Server 6.2 ファイルに施したカスタマイズが多である場合には、Sun のテクニカルサポートまたはプロフェッショナルサービスにご連絡いただき、支援を求めることをお勧めします。

警告 配備されている Portal Server 6.2 ファイルの複雑さの度合いによっては、SUN ONE Portal Server 6.2 から Sun Java System Portal Server 6 2005Q1 へのアップグレードにかなりの時間がかかる可能性があります。すでに本稼働配備済みの Portal Server 6.2 システムをアップグレードするのは、その本稼働システムのテスト配備のアップグレードが成功してからにしてください。

アップグレード後にカスタマイズ設定を再実行し、それが正常に機能することを確認できるように、カスタマイズした設定のリストを作成しておくことをお勧めします。バックアップが必要なディレクトリは次のとおりです。

- /opt/SUNWps (デフォルトのインストールディレクトリを前提とする)
- /etc/opt/SUNWps
- /var/opt/SUNWps

Sun Web コンテナソフトウェアのアップグレード

Java Enterprise System 2005Q1 リリースでは、同一システムにインストールされた Sun の Web Server または Application Server (Web Server 6.1 SP2 または Application Server 7.0 Update 3 など) で Identity Server インスタンスが実行されている必要があります。古いバージョンを使用している場合は、Java Enterprise System 2005Q1 リリースへのアップグレード前に Web コンテナソフトウェアをアップグレードする必要があります。

Sun の Web Server または Application Server ソフトウェアのアップグレードについては、各 Web コンテナのドキュメントを参照してください。

- Web Server 6.1 SP2 については、次のドキュメントを参照してください。
http://docs.sun.com/coll/S1_websvr61_en
- Application Server 7.0 Update 3 の場合は、次のドキュメントを参照してください。
http://docs.sun.com/coll/s1_asseu3_en

また、52 ページの「Web コンテナのすべてのカスタマイズファイルのバックアップ」でカスタマイズファイルを保存した場合は、Web コンテナのアップグレード後にカスタマイズを再実行する必要があります。

Access Manager のアップグレード

Portal Server のアップグレードは、Access Manager に依存します。Portal Server をアップグレードする前に、Access Manager が稼働するすべてのシステムを Java Enterprise System 2005Q1 バージョンにアップグレードしてください。

Access Manager のアップグレードの詳細については、50 ページの「Access Manager のアップグレード」を参照してください。

Web Server 6 2004Q2 を Web コンテナとして使用する場合

Sun Java System Web Server を Web コンテナとして使用する場合、Identity Server 管理コンソールパッチをインストールする必要があります。

1. Access Manager 2005Q1 をインストールします。

Access Manager のアップグレードの詳細については、50 ページの「[Access Manager のアップグレード](#)」を参照してください。

2. 必要であれば、次のコマンドを実行して Access Manager 管理コンソールパッチをインストールします。

```
> patchadd 117769-01
```

管理コンソールのヘルプファイルのバックアップ

Identity Server 6.1 ソフトウェアをアップグレードする前に Access Manager 管理コンソールで使用される Portal Server ヘルプファイルをバックアップしておき、それを Access Manager 2005Q1 ソフトウェアのインストール後に復元する必要があります。

1. オンラインヘルプディレクトリの中身を、次のようにして一時ディレクトリにコピーします。

```
cp -r /installation-directory/SUNWam/public_html/online_help/docs_en_US/ps /tmp
```

2. Access Manager のアップグレード前スクリプトを実行します。

Access Manager のアップグレードの詳細については、50 ページの「[Access Manager のアップグレード](#)」を参照してください。

3. Access Manager 2005Q1 をインストールします。

Access Manager のアップグレードの詳細については、50 ページの「[Access Manager のアップグレード](#)」を参照してください。

4. 一時ディレクトリの中身を、次のようにしてオンラインヘルプディレクトリにコピーします。

```
cp -r /tmp/ps
/installation-directory/SUNWam/public_html/online_help/docs_en_US/ps
```

クライアントディテクションの有効化

クライアントディテクションを有効にするには、次の手順を実行して Access Manager のクライアントディテクショングローバル属性を変更します。

1. 次の URL を使って Access Manager 2005Q1 コンソールにアクセスします。

```
http://host-name.domain-name:port/amconsole
```

この *host-name.domain-name:port* は、使用する Web コンテナの完全修飾ホスト名とポートです。

2. Access Manager のログインページが表示されたら、`amadmin` としてログインします。
3. コンソールで、「サービス設定」タブをクリックします。
コンソールのナビゲーションフレームにサービス設定オプションが表示されます。
4. 「サービス設定」の下のナビゲーションフレームで、「クライアントディテクション」をクリックします。
5. 「クライアントディテクション」について、データフレームで次の項目を設定します。
 - a. 「クライアントディテクションクラス」グローバル属性を `com.sun.mobile.cdm.FEDIClientDetector` に設定します。
 - b. 「クライアントディテクションを有効」ボックスにチェックマークを付けます。
6. 「保存」をクリックします。

アップグレードの確認

Identity Server 6.1 インストールをカスタマイズしていた場合、新しい Access Manager 2005Q1 インストールに対して、そのカスタマイズを手動で再実行する必要があります。

アップグレードが正常に行われたことを、いくつかの方法で確認できます。

- 次の URL を使って Access Manager 2005Q1 コンソールにアクセスします。

`http://host-name.domain-name:port/amconsole`

この `host-name.domain-name:port` は、使用する Web コンテナの完全修飾ホスト名とポートです。

Access Manager のログインページが表示されたら、`amadmin` としてログインします。「サービス設定」タブをクリックします。「ディスカバリサービス」や「Liberty 個人プロフィールサービス」など、新しい Access Manager 2005Q1 サービスを利用できる場合は、その Web コンテナでの Access Manager のアップグレードは正常に完了しています。

- `/var/sadm/install/logs` ディレクトリ内の次のログファイルを調べ、アップグレードの状態を確認します。
 - アップグレード前スクリプト (`pre61to62upgrade`):
`Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_log.timestamp`
 - Sun Java Enterprise System インストーラ:

```

Java_Shared_Component_Install.timestamp
Java_Enterprise_System_install.Atimestamp
Java_Enterprise_System_install.Btimestamp
Java_Enterprise_System_Summary_Report_install.timestamp

```

- アップグレード後スクリプト (Upgrade61DitTo62):


```
Sun_Java_System_Identity_Server_upgrade_dit_log.timestamp
```

Portal Server のアップグレード

次の手順では、Sun Java System Portal Server 6 2004Q2 を Sun Java System Portal Server 6 2005Q1 にアップグレードします。Sun ONE Portal Server 6.2 からアップグレードする場合はまず、『Java Enterprise Systems 2004Q2 インストールガイド』(<http://docs.sun.com/app/docs/doc/817-7054?l=ja>) の第 8 章の手順に従って、Portal Server 6 2004Q2 にアップグレードする必要があります。

1. root としてログインします。
2. 126 ページの表 3-21 で説明した Portal Server パッチを、SunSolve サイトからダウンロードします。
3. J2EE Web コンテナが起動され、稼働中であることを確認します。
4. Directory Server が起動され、稼働中であることを確認します。
5. Portal Server によって使用される Access Manager が Java Enterprise System 2005Q1 にアップグレードされていることを確認します。Access Manager がリモートでインストールされている場合は、Portal Server ノードすべての Access Manager SDK が Java Enterprise System 2005Q1 にアップグレードされていることも確認します。
6. JWSDP 共有コンポーネント JAXP、JAX-RPC、JAXR、SAAJ、および JAXB が Portal Server ノードとゲートウェイノードの両方で更新済みであることを確認します。29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照してください。
7. JSS、NSS、および NSPR 共有コンポーネントが Portal Server ノードとゲートウェイノードの両方で更新済みであることを確認します。29 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」を参照してください。
8. Solaris 上でアップグレードするには、次の手順を実行します。
 - a. Portal Server またはゲートウェイがインストールされているノード上で、次のコマンドを実行してパッチをインストールします。

```

> patchadd 118195-07
> patchadd 118128-13
> patchadd 118219-12
> patchadd 118950-01

```

- b. Access Manager がインストールされているノード上で、次のコマンドを実行してパッチをインストールします。

```
> patchadd 118217-11
> patchadd 118218-11
```

上記のパッチは、Solaris SPARC システム用です (Solaris x86 システム用のパッチについては [126 ページの表 3-21](#) を参照)。

9. Linux 上でアップグレードするには、次の手順を実行します。
 - a. [表 3-22](#) に記載されているその他の RPM に対し、「rpm -Fvh」コマンド (オプション -F は既存 RPM の更新、-vh は冗長モード) を適用します。次に例を示します。


```
# cd <rpm location>
# rpm -Fvh sun-identity-mobileaccess-6.2-25.i386.rpm"
```

 RPM の一覧については、[127 ページの表 3-22](#) を参照してください。
 - b. 118020 パッチファイルを解凍します。
 - c. README ファイルを読みます。
 - d. 解凍先ディレクトリ内にある upgradeportalrpms スクリプトを実行します。RPM が追加されます。
 - e. 119515 パッチファイルを解凍し、README ファイルの手順に従ってパッチをインストールします。
 - f. 119516 パッチファイルを解凍し、README ファイルの手順に従ってパッチをインストールします。
 - g. 118952 パッチファイルを解凍し、README ファイルの手順に従ってパッチをインストールします。
10. 次のコマンドを実行して、Portal Server をアップグレードします (/opt/SUNWps をデフォルトのインストールディレクトリとする)。

警告 必ず Korn シェル内で作業を行なってください。それには、コマンドプロンプトから ksh と入力します。

```
> cd /opt/SUNWps/lib
> ./upgradePS04Q205Q1
> ./upgradeSRA-04Q4-05Q1
```

Secure Remote Access がインストールされている場合は、upgradeSRA スクリプトが必要です。これらのスクリプトは、パスワードの入力を求めます。

警告 スクリプト upgradePS または upgradeSRA の実行後に適用済みの Portal Server パッチをバックアウトすることはできません。

11. Portal Server を再配備します。

```
> cd /opt/SUNWps/bin  
> ./deploy redeploy
```

12. Web コンテナを再起動します。

13. プロキシレットサービスと Netlet サービスを設定するために、AMCONSOLE にユーザー **amadmin** としてログオンします。

14. プロキシレットサービスと Netlet サービスを削除します。

「アイデンティティ管理」タブで「サービス」オプションを選択します。すると、左側のパネル上に、登録されているすべてのサービスが一覧表示されます。「SRA 設定」で「プロキシレット」と「Netlet」の両チェックボックスを選択します。スクロールして左側のパネルの最上部に移動し、「削除」ボタンをクリックします。すると、プロキシレットサービスと Netlet サービスが、組織レベルから削除されます。

この手順の成功を手動で確認するには、LDAP ディレクトリ (の所属する組織の下) で、それらのサービス (srapProxylet と srapNetlet) が実際に削除されていることを確認します。

15. サービスを再度追加します。

「アイデンティティ管理」タブで「サービス」オプションを選択します。「サービス」の下にある「追加」ボタンをクリックします。すると、右側のパネル上に、利用可能なすべてのサービスが表示されます。プロキシレットサービスと Netlet サービスのチェックボックスを選択し、「了解」をクリックします。左側のパネルの「SRA 設定」の下に、新しく追加したサービスが表示されます。

16. 新しく追加したサービスをクリックし、テンプレートファイルを作成します。「保存」ボタンをクリックします。

ゲートウェイサービスの下の非認証 URL リストに、

/portal/netlet/jnlpclient.jar と /portal/netlet/netletjsse.jar を追加します。*

- 「サービス設定」タブをクリックします。
- 「SRA 設定」の下にある「ゲートウェイ」リンクをクリックします。すると、利用可能なすべてのゲートウェイプロファイルが一覧表示されます。
- リンクをクリックして適切なプロファイルを選択します。
- 「セキュリティ」タブをクリックします。

- e. 非認証 URL の下にある編集フィールドに `/portal/netlet/jnlpclient.jar` を追加し、「追加」ボタンをクリックします。
 - f. 非認証 URL の下にある編集フィールドに `/portal/netlet/netletjsse.jar` を追加し、「追加」ボタンをクリックします。
 - g. ページの最下部にある「保存」ボタンをクリックします。
17. ゲートウェイサーバーを再起動します。

Delegated Administrator のアップグレード

Calendar Server では、Delegated Administrator (旧 `commadmin`) を使用して、ユーザー、グループ、ドメイン、およびリソースをプロビジョニングする必要があります。

Delegated Administrator がまだインストールまたはアップグレードされていない場合は、[122 ページの「Delegated Administrator へのアップグレード」](#)を参照してください。

Sun Cluster のアップグレード

ここでは、Java Enterprise System 2004Q2 に含まれるバージョンから Sun Cluster 3.1 9/04 へのアップグレードについて、その概要を説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [135 ページの「アップグレードの要件と制限」](#)
- [136 ページの「共有コンポーネントのアップグレード」](#)
- [139 ページの「Sun Cluster のアップグレード方法の選択」](#)

注 完全なアップグレード手順については、『Sun Cluster ソフトウェアのインストール (Solaris OS 版)』(<http://docs.sun.com/doc/819-0171?l=ja>) の第 5 章「Sun Cluster ソフトウェアのアップグレード」を参照してください。

Sun Web Console を手動でインストールするには、Sun Cluster 3.1 9/04 の CD-ROM ではなく、Sun Java Enterprise System 2005Q1 の 2 of 2 CD-ROM を使用します。

Sun Web Console の `setup` コマンドを実行するには、ディレクトリ `/cdrom/cdrom0/Solaris_arch/Product/sunwebconsole/` に移動します。ここで、`arch` は `sparc`、`x86` のいずれかです。そこに `setup` コマンドが格納されています。

アップグレードの要件と制限

Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアへのアップグレードを行うときは、次の要件と制限に注意してください。

- クラスタは、最新の必須パッチが適用された Solaris 8 2/02 ソフトウェア以降で実行されている必要があります。
- クラスタのハードウェアは、Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアがサポートする構成になっている必要があります。

すべてのソフトウェアを、Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアがサポートするバージョンにアップグレードする必要があります。たとえば、データサービスが Sun Cluster 3.0 ソフトウェアではサポートされるが、Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアではサポートされない場合、そのデータサービスを、Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアがサポートするバージョンにアップグレードする必要があります。そのデータサービスの関連アプリケーションを Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアがサポートしない場合は、そのアプリケーションも、サポートされるリリースにアップグレードする必要があります。

scinstall アップグレードユーティリティは、Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアとともに提供されるデータサービスだけをアップグレードします。カスタムデータサービスやサン以外のデータサービスについては、手動アップグレードが必要です。

Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアは、次のアップグレードをサポートしています。

- Solaris 8 ソフトウェアから Solaris 9 ソフトウェアへの非ローリングアップグレードのみ。
- Sun Cluster 3.x ソフトウェアのみからの直接アップグレード。

Sun Cluster 3.1 9/04 ソフトウェアは、次のアップグレードまたはダウングレードをサポートしていません。

- Sun Cluster ソフトウェアのあらゆるダウングレード。
- 複数のアーキテクチャにまたがるアップグレード。
- Sun Cluster 構成内の Solaris ソフトウェアの Live Upgrade によるアップグレード。

共有コンポーネントのアップグレード

大部分の Sun Cluster 構成ですでにインストールされている共有コンポーネントのパッケージをアップグレードする必要があります。クラスタの各ノード上の共有コンポーネントを次の順序でアップグレードします。

1. Apache Tomcat 用の共有コンポーネントをアップグレードします。
 2. Explorer 用の共有コンポーネントをアップグレードします。
 3. JDMK 用の共有コンポーネントをアップグレードします。
 4. Sun Java Web Console 用の共有コンポーネントをアップグレードします。
 5. 共通エージェントコンテナ用の共有コンポーネントをアップグレードします。
- これらのアップグレードの個々の詳しい手順を次に示します。

▶ Apache Tomcat 用の共有コンポーネントをアップグレードする

1. Apache Tomcat パッケージがインストールされているか確認します。


```
# pkginfo SUNWtcatu
```
2. このノードに Apache Tomcat パッケージがインストールされている場合、そのプラットフォームに適用可能な必須パッチも同時にインストールされているか確認します。


```
# showrev -p | grep SUNWtcatu
```

プラットフォームごとの必須パッチとその最小レベルは、次のとおりです。

 - SPARC: 114016-01
 - x86: 114017-01
3. SUNWtcatu パッケージがインストールされているが、その必須パッチがインストールされていない場合、そのパッケージを削除します。


```
# pkgrm SUNWtcatu
```

▶ Explorer 用の共有コンポーネントをアップグレードする

1. 既存の Explorer パッケージを削除します。


```
# pkgrm SUNWexpl0
```
2. Java Enterprise System の 1 of 2 CD を挿入します。
3. Solaris_arch/Product/shared_components/Packages ディレクトリに移動します。
4. 現行版の Explorer パッケージをインストールします。


```
# pkgadd -d . SUNWexpl0 SUNWexplu SUNWexplj
```


▶ JDMK 用の共有コンポーネントをアップグレードする

1. JDMK パッケージがすでにインストールされているか確認します。

```
# pkginfo SUNWjdmk-runtime SUNWjdmk-runtime-jmx
application SUNWjdmk-runtime      Java DMK 5.1 Runtime Library
application SUNWjdmk-runtime-jmx  Java DMK 5.1 JMX libraries
```

2. JDMK パッケージがクラスタノード上にすでに存在する場合は、それらを削除します。

```
# pkgrm SUNWjdmk-runtime SUNWjdmk-runtime-jmx
```

3. Sun Java System の 1 of 2 CD-ROM を挿入します。
4. Solaris_arch/Product/shared_components/Packages/ ディレクトリに移動します。ここで、arch は sparc、x86 のいずれかです。
5. JDMK パッケージをインストールします。

```
# pkgadd -d . SUNWjdmk*
```

▶ Sun Java Web Console 用の共有コンポーネントをアップグレードする

1. Sun Java System の 2 of 2 CD-ROM を挿入します。
2. Solaris_arch/Product/sunwebconsole/ ディレクトリに移動します。ここで、arch は sparc、x86 のいずれかです。
3. Sun Java Web Console パッケージをインストールします。

```
# ./setup
```

setup コマンドによって Sun Java Web Console をサポートするすべてのパッケージがインストールまたはアップグレードされます。

▶ 共通エージェントコンテナ用の共有コンポーネントをアップグレードする

アップグレードを開始する前に、共通エージェントコンテナのパッケージをアップグレードします。この作業は、クラスタがまだ本稼働している間に実行できます。

注 Sun Cluster ソフトウェアアップグレード処理の終了時にセキュリティファイルが復元されるまでセキュリティファイルエージェントを停止しておく必要があるため、SunPlex Manager によるクラスタ監視は SunPlex Manager の接続先ノードの状態のみに制限されます。

1. 共通エージェントコンテナのパッケージがすでにインストールされているか確認します。

```
# pkginfo SUNWcacao SUNWcacaocfg
application SUNWcacao      Cacao Component
application SUNWcacaocfg  Cacao configuration files
```

2. 共通エージェントコンテナのパッケージがすでに存在していた場合、各クラスターノード上の共通エージェントコンテナに対するセキュリティファイルエージェントを停止します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm stop
```

3. 既存の共通エージェントコンテナのパッケージを各クラスターノードから削除します。

```
# pkgrm SUNWcacao SUNWcacaocfg
```

4. Sun Java System の 1 of 2 CD-ROM を挿入します。
5. Solaris_arch/Product/shared_components/Packages/ ディレクトリに移動します。ここで、arch は sparc、x86 のいずれかです。
6. 共通エージェントコンテナのパッケージをインストールします。

```
# pkgadd -d . SUNWcacaocfg SUNWcacao
```

Sun Cluster ソフトウェアのアップグレードへと進みます。すべてのクラスターノードのアップグレードおよびクラスター内におけるリブートが完了したら、共通エージェントコンテナのアップグレード済みセキュリティファイルをすべてのノードに配布します。この作業により、すべてのクラスターノード上で共通エージェントコンテナのセキュリティファイルが同一であり、コピーされたファイルが正しいファイル許可を保持していることが保証されます。

1. 各ノード上で Sun Java Web Console エージェントを停止します。

```
# /usr/sbin/smcwebserver stop
```

2. 各ノード上でセキュリティファイルエージェントを停止します。

```
# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm stop
```

3. 特定のノード上で、/etc/opt/SUNWcacao/ ディレクトリに移動します。

```
phys-schost-0.45kg cd /etc/opt/SUNWcacao/
```

4. /etc/opt/SUNWcacao/security/ ディレクトリの tar ファイルを作成します。

```
phys-schost-1# tar cf /tmp/SECURITY.tar security
```

5. /tmp/SECURITY.tar ファイルをほかの各クラスターノードにコピーします。

6. /tmp/SECURITY.tar ファイルをコピーした各ノード上で、セキュリティファイルを解凍します。

/etc/opt/SUNWcacao/ ディレクトリ内にすでに存在していたセキュリティファイルは、すべて上書きされます。

```
phys-schost-2# cd /etc/opt/SUNWcacao/
```

```
phys-schost-2# tar xf /tmp/SECURITY.tar
```

7. クラスター内の各ノードから /tmp/SECURITY.tar ファイルを削除します。

セキュリティ上のリスクを回避する意味で、tar ファイルのすべてのコピーを削除する必要があります。

```
phys-schost-0.45kg rm /tmp/SECURITY.tar
```

```
phys-schost-2# rm /tmp/SECURITY.tar
```

8. 各ノード上でセキュリティファイルエージェントを起動します。

```
phys-schost-0.45kg /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm start
```

```
phys-schost-2# /opt/SUNWcacao/bin/cacaoadm start
```

9. 各ノード上で Sun Java Web Console エージェントを起動します。

```
phys-schost-0.45kg /usr/sbin/smcwebserver start
```

```
phys-schost-2# /usr/sbin/smcwebserver start
```

Sun Cluster のアップグレード方法の選択

クラスタソフトウェアをアップグレードするときは、次のいずれかの方法を選択します。

非ローリングアップグレード

非ローリングアップグレードでは、クラスタノードをアップグレードする前にクラスタを停止します。すべてのノードのアップグレードが完全に終了してから、クラスタを運用状態に戻します。次のいずれか、または複数の状況に該当する場合は、非ローリングアップグレードを選択する必要があります。

- Solaris 8 ソフトウェアから Solaris 9 ソフトウェアにアップグレードする。
- アプリケーションやデータベースなど、アップグレードするいずれかのソフトウェア製品が、そのソフトウェアの同一バージョンがすべてのクラスタノードで同時に実行されていることを必要とする。
- VxVM もアップグレードする。

ローリングアップグレード

ローリングアップグレードでは、クラスタのノードを1つずつアップグレードします。クラスタは運用状態で維持され、サービスは他のノードで実行されます。ローリングアップグレードは、次のすべての状況に該当する場合にだけ選択します。

- Solaris ソフトウェアを Solaris Update リリースのみにアップグレードする (アップグレードを行う場合)。
- アプリケーションやデータベースなど、アップグレードするいずれかのソフトウェア製品の現行バージョンとアップグレードバージョンが、実行中クラスタ内で並存できる。

クラスタの設定がローリングアップグレードの要件を満たす場合でも、非ローリングアップグレードを選択できます。

Sun Cluster 構成計画の概要については、『Sun Cluster ソフトウェアのインストール (Solaris OS 版)』(<http://docs.sun.com/doc/819-0171?l=ja>) の第 1 章「Sun Cluster 構成の計画」を参照してください。

Web Server のアップグレード

ここでは、旧 Java Enterprise System 2003Q4 バージョンから Web Server SP4 にアップグレードする手順を説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 「Web Server をアップグレードする」
- 142 ページの「Web Server のパッチを削除する」

Web Server の詳細については、次のドキュメントを参照してください。

http://docs.sun.com/coll/WebServer_05q1_ja (日本語版)

http://docs.sun.com/coll/WebServer_05q1 (英語版)

► Web Server をアップグレードする

1. スーパーユーザー (root) としてログインします。
2. 次のように入力し、実行している Web Server と Administration Server のすべてのインスタンスを停止します。

```
web_svr_base/https-instancename/stop
```

```
web_svr_base/https-admserv/stop
```

web_svr_base のデフォルトの場所は、次のとおりです。

Solaris /opt/SUNWwbsvr

Linux /opt/sun/webserver

3. 表 3-23 に記載された共有コンポーネントのアップグレードをまだ実行していない場合は、実行します。

Solaris の場合は、29 ページの「Solaris 共有コンポーネントパッチクラスタの適用」を参照してください。

Linux の場合は、34 ページの「Linux 共有コンポーネント RPM の適用」を参照してください。

表 3-23 Web Server の必須共有コンポーネント

Solaris 8 SPARC	Solaris 9 SPARC	Solaris x86	説明
117024-03	117024-03	117024-03	Sun Search Engine
116103-06	114677-08	117725-10	International Components for Unicode User Files
なし	なし	なし	J2SDK 1.5 開発ツール
14045-02	114049-12	114050-12	Network Security Services
117722-10	117724-10		Network Security Services Utilities
114045-02	114049-12	114050-12	Netscape Portable Runtime
116837-02	116837-02	116838-02	LDAP C SDK
115328-01	115342-01		SASL
117722-10	117724-10	117725-10	Netscape Portable Runtime Development

4. J2SE のアップグレードをまだ実行していない場合は、実行します (37 ページの「J2SE パッケージのアップグレード」を参照)。
5. patchadd(1M) を使用して、次のパッチを適用します。

表 3-24 Web Server のパッチ

パッチ ID	コンポーネント	プラットフォーム
116648-12	Web Server コア (SUNWwbsvr)	Solaris 8 および 9 SPARC
116649-12	Web Server コア (SUNWwbsvr)	Solaris 9 x86
117514-05	Web Server ロケール	Solaris 8 および 9 SPARC
117515-05	Web Server ロケール	Solaris 9 x86
118202-04	Web Server コア (SUNWwbsvr)	Linux
118203-02	Web Server ロケール	Linux

6. Web Server を再起動します。

► **Web Server のパッチを削除する**

Web Server のパッチを削除する場合、次の手順を実行します。

1. Web Server の実行中のすべてのインスタンスを停止します。
2. root になります。

```
su root
```

パスワードが要求されたら、root のパスワードを入力します。

3. patchrm(1M) を使用して、[140 ページの「Web Server をアップグレードする」](#)で追加した Web Server パッチを削除します。
4. Web Server のインスタンスを再起動します。

Java Enterprise System より前のバージョンからのコンポーネントのアップグレード

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアの最初のリリースより前のバージョンから Java Enterprise System 2005Q1 に含まれるバージョンにコンポーネント製品を移行する手順について説明します。この章では、ほとんどのコンポーネント製品について、移行手順の概要を簡単に説明します。また、移行手順の詳細を説明しているコンポーネント製品のマニュアルを紹介します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 144 ページの「Access Manager の移行に関する情報」
- 144 ページの「Administration Server の移行に関する情報」
- 145 ページの「Application Server の移行に関する情報」
- 145 ページの「Calendar Server の移行に関する情報」
- 156 ページの「Directory Server の移行に関する情報」
- 157 ページの「Directory Proxy Server の移行に関する情報」
- 159 ページの「Instant Messaging の移行に関する情報」
- 159 ページの「Message Queue の移行に関する情報」
- 160 ページの「Messaging Server の移行に関する情報」
- 160 ページの「Portal Server および Portal Server, Secure Remote Access の移行に関する情報」
- 160 ページの「Sun Cluster の移行に関する情報」
- 161 ページの「Sun Remote Services Net Connect の移行に関する情報」
- 161 ページの「Web Server の移行に関する情報」
- 162 ページの「共有コンポーネントのアップグレード情報」

Access Manager の移行に関する情報

Identity Server 6.0 または 6.0 SP1、あるいは DSAME 5.1 から Access Manager 6 2005Q1 にアップグレードすることができます。

まず、『Sun ONE Identity Server 6.1 Migration Guide』の手順に従って、Identity Server 2003Q4 (6.1) にアップグレードします。

<http://docs.sun.com/doc/816-6771-10>

Identity Server 2003Q4 (6.1) にアップグレードしたあと、このマニュアルの [50 ページ](#) の「[Access Manager のアップグレード](#)」の手順に従います。

Administration Server の移行に関する情報

Administration Server 5 2005Q1 にアップグレードできるのは、次のバージョンです。

- Administration Server 5.2 のパッケージベースのインストール
- Administration Server 5.2 のパッケージベース以外のインストール
- Administration Server 4.x、5.0、5.1

いずれの場合も、Administration Server のアップグレード時には同時に Directory Server もアップグレードする必要があります。

Administration Server 5.2 のパッケージベースのインストールをアップグレードする方法については、[68 ページ](#)の「[Administration Server、Directory Server、および Directory Proxy Server のアップグレード](#)」を参照してください。

Administration Server 5.2 のパッケージベース以外のインストールをアップグレードする方法については、『Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 Installation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-7608>) を参照してください。

Administration Server 4.x、5.0、5.1 をアップグレードする方法については、『Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 Installation and Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-7608>) を参照してください。

Application Server の移行に関する情報

Application Server 6.x または Application Server 7 からアップグレードする方法については、[81 ページの「Application Server のアップグレード」](#)を参照してください。

Calendar Server の移行に関する情報

現在、Calendar Server の Java Enterprise System 以前のバージョンを使用している場合は、Calendar Server 6 2005Q1 にアップグレードする前に、コンポーネントのデータベースと LDAP データベースを移行する必要があります。

下位レベルのデータベースを現在のバージョンにアップグレードする複数の移行ユーティリティを技術サポートから入手できます。この章で説明する「[移行ユーティリティの概要](#)」は、適切なユーティリティを選択し、実行するのに役立ちます。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [146 ページの「Calendar Server の移行ユーティリティの概要」](#)
- [147 ページの「移行ユーティリティの概要」](#)
- [148 ページの「移行に関する Web サイト」](#)
- [149 ページの「ics2migrate」](#)

警告

サイトが、制限された仮想ドメインモードに設定されているか、同じマシン上で Calendar Server の複数のインスタンスを使用するよう設定されている場合は、移行要件とそれをサポートする移行ユーティリティについて、ご購入先にお問い合わせください。

Calendar Server の移行ユーティリティの概要

ここでは、次の2つの異なる条件で使用する必要のある移行ユーティリティについて説明します。

- [146 ページの「Calendar Server Version 5.1.1 より前のバージョンの場合」](#)
- [146 ページの「Calendar Server Version 5.1.1 の場合」](#)

Calendar Server Version 5.1.1 より前のバージョンの場合

Calendar Server 5.1.1 より前のバージョンの Calendar Server を使用している場合は、Calendar Server 6 2005Q1 をインストールしたり設定したりする前に、LDAP ディレクトリのエン트리およびカレンダーデータベースを Calendar Server 5.1.1 レベルにアップグレードする必要があります。これは、[147 ページの「移行ユーティリティの概要」](#)で説明するとおり、Calendar Server 5.1.1 のインストール前およびインストール後に特定の手順を実行する必要があることを意味します。

現在、Calendar Server 2.x または Netscape Calendar Server 4.x がインストールされている場合は、Calendar Server 5.1.1 をインストールする前に、必要に応じて次の移行ユーティリティを使用する必要があります。

- [ics2migrate](#) - iPlanet Calendar Server 2.x から 5.x にデータを移行します。このユーティリティは Calendar Server 5.1.1 にバンドルされています。5.1.1 をインストール後、このユーティリティを実行します。
- [ncs4migrate](#) - Netscape Calendar Server 4.x から 5.x にデータを移行します。このユーティリティは、移行に関する Web サイトから入手できます。「[移行に関する Web サイト](#)」を参照してください。5.1.1 をインストール後、このユーティリティを実行します。

Calendar Server Version 5.1.1 の場合

5.1.1 より前のバージョンのシステムから 5.1.1 に移行した場合、またはすでに 5.1.1 を使用している場合は、5.1.1 をアンインストールしてから Calendar Server 6 2005Q1 をインストールする必要があります。次に、[cs5migrate](#) または [cs5migrate_recurring](#) のどちらかを実行します。この2つのユーティリティのうちどちらを使用するかを選択するには、次の点を考慮してください。

- [cs5migrate](#) - Connector for Microsoft Outlook を使用していない場合、または既存のカレンダーデータベースに繰り返しコンポーネントがない場合、このユーティリティを使用します。
- [cs5migrate_recurring](#) - データベースに繰り返しコンポーネントがあり、Connector for Microsoft Outlook の使用を計画している場合、このユーティリティを使用します。

どちらのユーティリティも Calendar Server 5.x から 6.x にデータを移行します。これらのユーティリティは、移行に関する Web サイトから入手できます。「[移行に関する Web サイト](#)」を参照してください。

ヒント 繰り返しコンポーネントとは、毎週行われる会議など、複数のインスタンスを持つ 1 つの予定または仕事です。カレンダーデータベースに繰り返しコンポーネントがあるかどうか不明な場合は、技術サポートにお問い合わせください。

移行ユーティリティの概要

各種の移行ユーティリティを使用する前および使用した後に、いくつかの手順を実行する必要があります。表 4-1 は、データベースを Calendar Server 6 2005Q1 バージョンに移行するために必要なすべての手順を示します。

注 ics2migrate は、Sun ONE Calendar Server 5.1.1 ダウンロードにバンドルされています。また、csmig と csvdmig は、Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 にバンドルされています。

Netscape Calendar Server 3.5 を使用している場合は、ncs4migrate を使用する前に、Netscape Calendar Server 4.x に移行する必要があります。この移行ユーティリティは、Sun の技術サポートから入手できます。

表 4-1 Calendar Server の移行ユーティリティの実行

以前のバージョン	手順
iPlanet Calendar Server 2.x	<ol style="list-style-type: none"> 1. db_recover を実行します。 2. Calendar Server 5.1.1 をダウンロードし、インストールします。 3. db_upgrade を実行します。 4. ics2migrate を実行します。 5. Calendar Server 5.x をアンインストールします。 6. Calendar Server 6.x をダウンロードし、インストールします。 7. cs5migrate または cs5migrate_recurring を実行します。

表 4-1 Calendar Server の移行ユーティリティの実行 (続き)

以前のバージョン	手順
Netscape Calendar Server 4.x	<ol style="list-style-type: none"> 1. Calendar Server 5.1.1 をダウンロードし、インストールします。 2. ncs4migrate を実行します。 3. Calendar Server 5.x をアンインストールします。 4. Calendar Server 6.x をダウンロードし、インストールします。 5. cs5migrate または cs5migrate_recurring を実行します。
Sun ONE または iPlanet Calendar Server 5.x	<ol style="list-style-type: none"> 1. Calendar Server 5.x をアンインストールします。 2. Calendar Server 6.x をダウンロードし、インストールします。 3. cs5migrate または cs5migrate_recurring を実行します。

移行に関する Web サイト

使用中のサイトに適した方法の選択にあたっては、技術サポートのリンク先 Web サイトから、追加情報とユーティリティをダウンロードできます。

Sun Microsystems の技術サポートまたはプロフェッショナルサービスを参照する場合があります。

ncs4migrate、cs5migrate、および cs5migrate_recurring のドキュメントは、技術サポートが提供する移行パッケージから入手できます。

注 cs5migrate が Calendar Server にバンドルされていると考えられる場合でも、このユーティリティを実行しようとする、次のメッセージが表示されます。

```
!!!!!!!!!!!!PLEASE NOTE!!!!!!!!!!!!
To migrate to Calendar Server 6.0, please contact your Sun
Microsystems Technical Support or Sales Account Representative to
get the latest version of the utility.
```

ics2migrate

ics2migrate ユーティリティは、iPlanet Calendar Server 2.x のカレンダーデータと LDAP ユーザー設定を Sun ONE Calendar Server 5.1.1 に移行します。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [149 ページの「移行の要件」](#)
- [149 ページの「移行されるデータ」](#)
- [150 ページの「移行手順」](#)
- [154 ページの「移行例」](#)

移行の要件

Calendar Server 2.x から 6.x へ移行するには、次のハードウェアとソフトウェアが必要です。

- ソースマシンには、移行しようとする Calendar Server 2.x データが必要です。
- ターゲットマシンに移行するデータが作成されます。このマシンには Calendar Server 6 2005Q1 がインストールされている必要があります。
- ics2migrate ユーティリティ - 移行前に、まず技術サポートまたはご購入先に、ユーティリティが最新バージョンであるかどうかを確認してください。

ソースマシンと移行先マシンが、異なるサーバーでも同じサーバーでも差し支えありません。サポートされているプラットフォームについては、『Sun Java System Calendar Server リリースノート』を参照してください。

移行されるデータ

次の表は、Calendar Server 2.x データのリスト、および ics2migrate が Calendar Server 6 2005Q1 へデータを移行する方法を示します。

表 4-2 Calendar Server 2.x データの移行

Calendar Server 2.x データ	Calendar Server 6.0 への移行結果
カレンダーのプロパティ (calprops)	Calendar Server の calprops データベースを更新します。
予定	Calendar Server の events データベースを更新します。
予定リスト	Calendar Server の todos データベースを更新します。
アラーム	events および todos の書き込み時に alarms データベースを更新します。

次の表は、Calendar Server 2.x LDAP 属性のリスト、および ics2migrate が Calendar Server 6 2005Q1 へ属性を移行する方法を示します。

表 4-3 LDAP 属性の移行

Calendar Server 2.x LDAP 属性	Calendar Server 6 LDAP 属性
nswcalUser *	icsCalendarUser *
nswcalCalID	icsCalendar
nswcalExtendedUserPrefs	icsExtendedUserPrefs
ceCalList **	icsSubscribed
ceAgendaList **	icsSet
ceDefaultAgenda **	icsDefaultSet
ceDefaultTZID **	icsTimeZone
ceFirstDayWeek **	icsFirstDay

* オブジェクトクラス

** もともとは nswcalExtendedUserPrefs の一部

移行手順

1. csbackup などのユーティリティ、Sun StorEdge Enterprise Backup™ ソフトウェア、または Legato Networker® を使用して、カレンダーデータベースをバックアップします。

カレンダーデータベースのバックアップは常に非常に重要ですが、この手順では db_upgrade (手順 4 で実行) がデータベースを上書きアップグレードするため、特に重要です。アップグレード中に問題が発生した場合、データベースが回復不能の状態に陥る可能性があります。

2. 2.x Berkeley Database 上で db_recover を実行します。

Berkeley DB db_recover ユーティリティを実行して、データベースを変換する前に、ログファイルのトランザクションをデータベースにマージします。このユーティリティを使用しないと、マージされていないトランザクションが失われます。

3. Calendar Server 5.1.1 をダウンロードし、インストールします。

次のサイトにある『iPlanet Calendar Server 5.1 Installation Guide』を参照してください。

<http://docs.sun.com/db/doc/816-5516-10>

4. db_upgrade を実行して、2.x カレンダーデータベースをアップグレードします。

Calendar Server 5.1.1 には、Sleepycat Software の Berkeley DB バージョン 3.2.9 が必要です。ics2migrate を実行する前に、Berkeley DB の db_upgrade ユーティリティを使用して、バージョン 3.2.9 にアップグレードする必要があります。このユーティリティを実行する手順については、151 ページの「db_upgrade ユーティリティを実行する」を参照してください。

Berkeley DB ユーティリティの詳細については、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.sleepycat.com/docs/utility/index.html>

5. ics2migrate を実行して、データを移行します。

ics2migrate を実行する手順については、152 ページの「ics2migrate を実行する」を参照してください。

6. 移行結果を確認します。

- a. ics2migrate.log ファイルで、次のようなメッセージ (移行のオプションによって異なる) が表示されていることを確認します。

```
Database migration successfully completed
LDAP user preference migration successfully completed
```

- b. データベースが壊れた可能性がある場合は、csdb ユーティリティの check コマンドを実行します。

check コマンドは、カレンダーデータベースの破壊の有無をスキャンします。check コマンドで解決できない不一致が検出された場合、その状況のレポートが出力されます。必要な場合は、csdb ユーティリティの rebuild コマンドを実行して、カレンダーデータベース (caldb) を再構築することができます。

csdb ユーティリティの check および rebuild コマンドのドキュメントについては、次のサイトにある『Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』の「付録 D」を参照してください。 <http://docs.sun.com/source/819-1476?l=ja>

➤ db_upgrade ユーティリティを実行する

1. Solaris およびその他の UNIX システムで、icsgroup および icsuser など、Calendar Server を実行するユーザーおよびグループとしてログインします。
2. 必要に応じて、2.x Calendar Server を停止します。
3. 2.x のカレンダーデータベースをバックアップしていない場合は、バックアップします。
4. 次のディレクトリから、古い共有ファイル (__db_name.share) またはログファイル (log.*) を削除します。

```
cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/lib/http
```

```
cal_svr_base/var/opt/SUNWics5/csdb
```

5. ユーティリティが格納されている、下記の Calendar Server 5.x ディレクトリに移動します。
`cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/tools/unsupported/bin`
6. `db_upgrade` ユーティリティを実行して、2.x カレンダーデータベースをバージョン 3.2.9 にアップグレードします。2.x カレンダーデータベースが別のディレクトリに格納されている場合は、`-h` オプションを使用してデータベースファイルをポイントします。

すべての 2.x データベースファイル (`alarms.db`、`calprops.db`、`events.db`、および `todos.db`) について、`db_upgrade` を実行する必要があります。また、サーバーがカレンダーデータベースに直接接続されていない場合でも、Calendar Server 構成のすべてのフロントエンドサーバーおよびバックエンドサーバーについて、`db_upgrade` を実行する必要があります。
7. データベースファイルが格納された `csdb` ディレクトリの Calendar Server 2.x `caldb.conf` ファイルを調べ、このファイルの最初の行を次のとおり変更します。

古い値: `caldb.version "1.0.0 [BerkeleyDB]"`
新しい値: `caldb.version= "1.0.0 [BerkeleyDB]"`

このファイルが `csdb` ディレクトリにない場合、テキストエディタを使用して作成し、最初の行に新しい値を設定します。

▶ **ics2migrate** を実行する

`ics2migrate` を実行するには、次の手順に従います。

1. `ics2migrate` が格納されたディレクトリに移動します。
2. **ics2migrate** 構文の構文を使用して、`ics2migrate` を実行します。
3. 移行後、`ics.conf` ファイルの `caldb.berkeleydb.homedir.path` パラメータが、移行したデータベースをポイントしていることを確認します。
4. `csdb check` コマンドを実行し、必要な場合は `csdb rebuild` コマンドを実行して、カレンダーデータベースを再構築します。

ics2migrate 構文

カレンダーデータベースと LDAP ユーザー設定とのいずれかのみを移行するか、または両方同時に移行するかを、選択できます。それぞれの場合の構文を次に示します。

- Calendar Server 2.x データベースおよび LDAP ユーザー設定の両方を移行するには、次の構文を使用します。

```
ics2migrate [-q] [-s def|none] [-f def|none] [-l min|max] source target
```

- Calendar Server 2.x データベースのみ移行するには、次の構文を使用します。


```
ics2migrate [-q] [-m db] [-s def|none] [-f def|none] [-l
min|max] source target
```

- LDAP ユーザー設定のみ移行するには、次の構文を使用します。

```
ics2migrate [-q] [-m ldap] source target
```

注 構文を表示するには、オプションなしで `ics2migrate` を入力します。

表 4-4 は、ユーティリティが認識するオプション、それぞれの説明、およびデフォルト値を示します。

表 4-4 ics2migrate オプション

ics2migrate オプション	説明とデフォルト値
<code>[-q]</code>	非出力モードで実行します。移行が正常に行われた場合、 <code>ics2migrate</code> はコンソールに何も情報を表示しません。移行に失敗した場合、 <code>ics2migrate</code> はエラーのみ表示します。 デフォルトは冗長モードです。
<code>[-m db ldap]</code>	<code>db</code> - カレンダーデータベースのみ移行します。 <code>ldap</code> - LDAP ユーザー設定のみ移行します。 デフォルトは、カレンダーデータベースおよび LDAP ユーザー設定の両方を移行します。
<code>[-s def none]</code>	<code>def</code> - ユーザーのデフォルトカレンダーにのみスケジュール設定を許可します。 <code>none</code> - すべてのユーザーのカレンダーへのスケジュール設定を拒否します。 デフォルトは、すべてのカレンダーへのスケジュール設定を許可します。

表 4-4 ics2migrate オプション (続き)

ics2migrate オプション	説明とデフォルト値
[-f def none]	<p>def - ユーザーのデフォルトカレンダーにのみ空き / 予定ありの設定を許可します。</p> <p>none - すべてのユーザーのカレンダーへの空き / 予定ありの設定を拒否します。</p> <p>デフォルトは、すべてのカレンダーへの空き / 予定ありの設定を許可します。</p>
[-l min max]	<p>min - データ移行に関する最小限の統計 (各カレンダーのカレンダー ID、主な所有者、および event と todo の数) のログをとります。</p> <p>max - データ移行に関する最大限の統計 (最小限の統計に加えて、各 event と todo の出席者およびアラーム数) のログをとります。</p> <p>ics2migrate は、<i>cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin</i> ディレクトリの <i>ics2migrate.log</i> に統計のログをとります。</p> <p>デフォルトでは、ics2migrate は最大移行統計をコンソールに表示し、ログファイルは生成しません。</p>
source	<p>Calendar Server 2.x のデータベースファイルを格納するディレクトリ。</p> <p>source は、カレンダーデータベースを移行するための必須オプションです (-m db オプションで指定)。</p>
target	<p>Calendar Server 6.0 のデータベースファイルを格納するディレクトリ。</p> <p>target は、カレンダーデータベースを移行するための必須オプションです (-m db オプションで指定)。</p>

移行例

ここでは、ics2migrate コマンド行を使用する移行例を次のとおり説明します。

- カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方を移行する
- 非出力モードで移行する
- カレンダーデータベースのみ移行する
- LDAP ユーザー情報のみ移行する

カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方を移行する

この例では、LDAP ユーザー情報と Calendar Server 2.x データベースの両方を移行します。また、`-s` と `-f` オプションが使用されていないためデフォルトで実行されます。つまり、すべてのカレンダーへのスケジュール設定および空き / 予定ありの設定が許可されます。`-l min` オプションが使用されているため、最小限の移行統計のログがとられます。

Calendar Server 2.x データベースは `/var/opt/SUNWicsrv/2x_db` ディレクトリに格納され、6.0 データベースは `/var/opt/SUNWics5/50_db directory` ディレクトリに格納されます。

カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方を移行する構文は、次のとおりです。

```
ics2migrate /var/opt/SUNWicsrv/2x_db /var/opt/SUNWics5/50_db -l min
```

非出力モードで移行する

この例では、LDAP ユーザー情報と Calendar Server 2.x データベースの両方を移行します。また、`-s` と `-f` オプションが使用されていないためデフォルトで実行されます。つまり、すべてのカレンダーへのスケジュール設定および空き / 予定ありの設定が許可されます。`-q` オプションが使用されているため、エラーがない限りコンソールには何も表示されません。エラーがある場合はエラーメッセージが表示されます。`-l` オプションが指定されていないため、最大限の移行統計のログがとられます。

Calendar Server 2.x データベースは `/var/opt/SUNWicsrv/2x_db` ディレクトリに格納され、6.0 データベースは `/var/opt/SUNWics5/50_db directory` ディレクトリに格納されます。

カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方を非出力モードで移行する構文は、次のとおりです。

```
ics2migrate -q /var/opt/SUNWicsrv/2x_db /var/opt/SUNWics5/50_db
```

カレンダーデータベースのみ移行する

この例では、2.x カレンダーデータベースのみ移行します。2.x カレンダーデータベースは `2x_db` ディレクトリ (現在のディレクトリの相対ディレクトリ) に格納され、ユーティリティが `/var/opt/SUNWics5/50_db` ディレクトリに 6.0 データベースを作成します。

カレンダーデータベースのみ移行する構文は、次のとおりです。

```
ics2migrate -m db 2x_db /var/opt/SUNWics5/50_db
```

LDAP ユーザー情報のみ移行する

この例では、Calendar Server 2.x LDAP ユーザー情報のみバージョン 6.0 形式で移行します。このユーティリティは非出力モードではないため、ユーティリティの状態情報がコンソールに送信されます。

LDAP ユーザー情報のみ移行する構文は、次のとおりです。

```
ics2migrate -m ldap
```

次に進む節

コンポーネントのデータベースおよび LDAP データベースの移行が完了したら、[87 ページの「Calendar Server のアップグレード」](#)に進みます。

Directory Server の移行に関する情報

Directory Server 5 2005Q1 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. 旧バージョンがインストールされているマシンに Directory Server 5 2005Q1 および Administrator Server 5 2005Q1 をインストールします。この場合、必ずサーバールート、管理ドメイン、リスナーポートに別々の値を指定します。
2. 旧バージョンの Directory Server を停止します。
3. 旧バージョンから Directory Server 5 2005Q1 に、設定およびユーザーデータを移行します。
4. 旧バージョンからのクライアントが新バージョンを使用するように設定を変更します。

この手順の実行方法の詳細については、『Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 Installation and Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-7608>) の第 2 章「Upgrading From Previous Versions」を参照してください。次の手順に従う場合、Directory Server をインストールするように指示されたときは、Directory Server インストーラではなく、Java Enterprise System インストーラを使用します。

Directory Proxy Server の移行に関する情報

Directory Proxy Server 5.2、Directory Access Router 5.0 または 5.0 SP1 から Directory Proxy Server 5 2005Q1 にアップグレードすることができます。

Directory Proxy Server 5.2 から Directory Proxy Server 5 2005Q1 に移行する方法については、[96 ページの「Directory Proxy Server のアップグレード」](#)を参照してください。

Directory Access Router 5.0 または 5.0 SP1 からのアップグレード

ここでは、Directory Access Router 5.0 または 5.0 SP1 から Directory Proxy Server 5 2005Q1 に移行する方法について説明します。

移行の準備

Directory Access Router バージョン 5.0 または 5.0 SP1 から Directory Proxy Server 5 2005Q1 に移行する前に、次の事項を確認してください。

- 設定ディレクトリサーバーが稼働していることを確認します。
- Directory Proxy Server の新しいインスタンスのポート番号が、古いインスタンスのポート番号と競合しないことを確認します。
- 移行中は、設定用ディレクトリサーバーに記録されている設定を変更しないでください。
- 古い SSL 設定を移行する場合は、新しい SSL 設定が作成され、クライアント側の SSL パラメータはクリアされます。既存の SSL 設定は、手動で再設定する必要があります。移行の前に、現在の SSL 設定を記録しておく必要があります。

移行の実行

1. 別のサーバールートに Administration Server 5 2005Q1 をインストールします。
新しいインスタンスのポート番号が、古いインスタンスのポート番号と競合しないことを確認してください。
2. Java Enterprise System 2005Q1 インスタンス用の `taylor.txt` ファイルで、暗号化されたパスワードを暗号化されていないパスワードに書き換えます。
3. 移行スクリプトを実行します。

```
# serverroot/bin/dps_utilities/migratefromidar50  
-b backup-filename -o old-tailor-path -n new-tailor-path
```

次の表は、移行スクリプトで使用される引数を説明しています。

引数	機能
-b	バックアップファイルを識別します。新しい起動用設定ファイル (-n フラグで指定) に指定されるすべての設定ディレクトリについて、「ou=dar-config,o=NetscapeRoot」分岐のバックアップが作成されます。バックアップがどのディレクトリのものであるかを示すために、指定のファイル名に数値サフィックス (0 ~ n) が追加されます。起動用設定ファイル内の最初のエントリのサフィックスは「0」になります。
-o	Directory Access Router 5.0 または 5.0 SP1 インスタンスの <code>tailor.txt</code> ファイルへのパスを識別します。
-n	Java Enterprise System 2005Q1 インスタンスの <code>tailor.txt</code> ファイルへのパスを識別します。

4. 必要に応じて SSL を手動で再設定します。
5. 次の状況になっていることを確認してください。これらの状況は、移行が正常に完了したことを示します。
 - 移行出力の最終行が「all done」である。
 - コンソールが設定を読み取れる。
 - 移行後にサーバーが起動する。

移行が失敗した場合は、[158 ページの「失敗した移行からの回復」](#)の指示に従ってください。

失敗した移行からの回復

次のような状況が生じた場合は、移行は失敗しています。

- 移行出力の最終行が「all done」でない。
- コンソールが設定を読み取れない。
- 移行が完了し、すべての SSL 関連設定の手動移行が完了しても、サーバーが起動されない。

失敗した移行から回復するには、次の手順を実行します。

1. `ldapadd` コマンド (LDIF 形式)、または Directory Server コンソールを使用して、バックアップを復元します。
2. 以前の Directory Access Router インスタンスに SSL が設定されていなかった場合は、Directory Proxy Server の新しいインスタンスを再起動します。

Instant Messaging の移行に関する情報

Instant Messaging 6 2005Q1 にアップグレードするには、まず以前の Java Enterprise System バージョンにアップグレードする必要があります。『Java Enterprise System 2004Q2 インストールガイド』の「Java Enterprise System 以前のバージョンからのコンポーネントのアップグレード」を参照してください。

(<http://docs.sun.com/app/docs/doc/817-7054?l=ja>)

Message Queue の移行に関する情報

Java Enterprise System の以前のバージョンには、Message Queue の Platform Edition と Enterprise Edition の両方が含まれていました。Java Enterprise System 3 2005Q1 には、Message Queue 3 2005Q1 (3.6) Enterprise Edition のみバンドルされています。

Message Queue 3.0.1 から Message Queue 3 2005Q1 (3.6) へのアップグレード

Message Queue 3.0.1 から 3.6 へアップグレードする方法については、[99 ページの「Message Queue のアップグレード」](#)を参照してください。

注 Message Queue をアップグレードする前に、[170 ページの「Message Queue」](#)で説明する互換性に関する情報を参照してください。

Messaging Server の移行に関する情報

Messaging Server 6 2005Q1 へのアップグレードについては、『Sun Java System Messaging Server 6 2005Q1 管理ガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-1054?l=ja>) の第 2 章「Sun Java System Messaging Server へのアップグレード」を参照してください。

Portal Server および Portal Server, Secure Remote Access の移行に関する情報

Portal Server 6 2005Q1 または Portal Server, Secure Remote Access 6 2005Q1 にアップグレードするために必要な手順には、多くの要素が影響します。このような要因や、アップグレードするために必要な手順については、『Sun Java System Portal Server 6 2005Q1 Migration Guide』(<http://docs.sun.com/doc/817-5320>) を参照してください。

Sun Cluster の移行に関する情報

Sun Cluster 3.1 9/04 へのアップグレードについては、『Sun Cluster ソフトウェアのインストール (Solaris OS 版)』(<http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-0171?l=ja>) の第 5 章「Sun Cluster ソフトウェアのアップグレード」を参照してください。この章で説明されている手順に従う場合は、Java Enterprise System の配布の次のディレクトリにある `scinstall` ユーティリティを使用します。

`Product/sun_cluster/os-version/Tools`

この `os-version` は `Solaris_8` または `Solaris_9` です。

Sun Remote Services Net Connect の移行に関する情報

Sun Remote Services Net Connect 3.5 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. Sun Remote Services Net Connect の既存のバージョンをアンインストールします。手順については、『Sun Remote Services Net Connect Installation and Activation Guide』(<http://docs.sun.com/doc/916-1586>) の第 3 章に記載されている「Uninstalling Net Connect」を参照してください。
2. Java Enterprise System インストーラを使用して、Sun Remote Services Net Connect 3.5 をインストールします。

Web Server の移行に関する情報

Web Server 6.0 または 6.0 SP1、または Web Server 4.1 から Web Server 6 2004Q1 Update 1 Service Pack 2 にアップグレードすることができます。

Web Server 6.0 からのアップグレード

Web Server 6.0 または 6.0 SP1 からのアップグレードについては、『Sun ONE Web Server 6.1 インストールおよび移行ガイド』

(<http://docs.sun.com/app/docs/doc/816-6752-10?l=ja>) の第 5 章「バージョン 6.0 から 6.1 への移行」を参照してください。

Web Server 4.1 からのアップグレード

Web Server 4.1 からのアップグレードについては、『Sun ONE Web Server 6.1 インストールおよび移行ガイド』(<http://docs.sun.com/app/docs/doc/816-6752-10?l=ja>) の第 6 章「バージョン 4.1 から 6.1 への移行」を参照してください。

共有コンポーネントのアップグレード情報

Java Enterprise System インストーラは、Java Enterprise System の互換性を維持するためにアップグレードが必要な共有コンポーネントを自動的に調べ、ユーザーに提示します。J2SE プラットフォームコンポーネントは例外ですが、インストーラは旧バージョンを置き換えて共有コンポーネントをアップグレードします。

警告 このため、共有コンポーネントのアップグレードは、既存のアプリケーションが共有コンポーネントの新しいバージョンと互換性を持つことを確認してから行う必要があります。

共有コンポーネントをアップグレードした後は、すべてのアプリケーションが新しいバージョンを確実に認識するようにシステムを再起動します。

J2SE プラットフォームのアップグレード情報

Java Enterprise System インストーラは互換性のないパッケージベースの J2SE プラットフォームのインストールを検出した場合、既存のバージョンをアップグレードするか、Java Enterprise System コンポーネントが使用するための 2 つ目のインストールとして新しいバージョンを追加するかを選択できます。

- **既存バージョンのアップグレードを選択した場合**

この場合は、インストーラは既存のパッケージベースの J2SE プラットフォームのインストールを、Java Enterprise System と互換性のあるバージョンに置き換えます。

置換インストールの実行中は、J2SE プラットフォームに依存するその他の実行中アプリケーションを停止する必要があります。すべてのアプリケーションが J2SE プラットフォームの新しいバージョンを確実に認識するように、インストール後にシステムを再起動します。

- **2 つ目のインストールとして新しいバージョンの追加を選択した場合**

この場合は、インストーラは J2SE プラットフォームパッケージのセットを追加します。インストールが完了したら、`pkginfo` コマンドを実行してこれらの追加パッケージを確認できます。次に例を示します。

```
# pkginfo | grep SUNWj3
system      SUNWj3dev      JDK 1.3 development tools
system      SUNWj3dev.2    J2SDK 1.4 development tools
system      SUNWj3dmo      JDK 1.3 demo programs
system      SUNWj3dmo.2    J2SDK 1.4 demo programs
system      SUNWj3dvx      J2SDK 1.4 development tools
(64-bit)
system      SUNWj3jmp      J2SDK 1.4 Japanese man pages
system      SUNWj3man      JDK 1.3 man pages
system      SUNWj3man.2    J2SDK 1.4 man pages
system      SUNWj3rt       JDK 1.3 run time environment
system      SUNWj3rt.2     J2SDK 1.4 runtime environment
system      SUNWj3rtx      J2SDK 1.4 runtime environment
(64-bit)
```

この例では、Java Enterprise System 用にインストールされたパッケージの追加セットは .2 というサフィックスで識別されます。各パッケージについて詳細な情報を確認するには、-l オプションを指定して pkginfo コマンドを実行します。次に例を示します。

```
# pkginfo -l SUNWj3rt.2
PKGINST:  SUNWj3rt.2
NAME:     J2SDK 1.4 runtime environment
CATEGORY: system
ARCH:     sparc
VERSION:  1.4.1,REV=2003.07.09.05.20
BASEDIR:  /usr/jdk/.j2se1.4.1_05
VENDOR:   Sun Microsystems, Inc.
DESC:     Java virtual machine and core class libraries
PSTAMP:   hop-sparc20030709052032
INSTDATE: Oct 30 2003 16:11
HOTLINE:  Please contact your local service provider
STATUS:   completely installed
FILES:    647 installed pathnames
          7 shared pathnames
          64 directories
          58 executables
          104533 blocks used (approx)
```

どちらの方法を選択した場合も、インストールが完了すると、`/usr/jdk/entsys-j2se` リンクは **Java Enterprise System** との互換性を持つ **J2SE** プラットフォームのバージョンを参照するようになります。

Java Enterprise System 2005Q1 互換性情報

Sun Java™ Enterprise System ソフトウェアの新しいリリースでは、従来のリリースとの互換性確保に努めています。ただし、リリース間の互換性のレベルにはいくつかの違いが常に存在します。この節では、Java Enterprise System 2003Q4 から Java Enterprise System 2005Q1 にアップグレードするときに、配備に影響を与える問題について説明します。

注 この情報では、オペレーティングシステムまたはランタイムの互換性は扱っていません。Sun Solaris オペレーティングシステムでは互換性が保証されていても、コンポーネント製品でサポートされている他の J2EE ランタイムのようなさまざまなサードパーティのコンポーネント間で同じレベルの互換性を他のベンダーが保証しているとは限りません。

ここで扱う互換性の問題は、Java Enterprise System とユーザーが接するインタフェースのみに限定されています。

この節で説明する内容は、次のとおりです。

- [166 ページの「Access Manager」](#)
- [167 ページの「Application Server」](#)
- [168 ページの「Instant Messaging」](#)
- [170 ページの「Message Queue」](#)
- [176 ページの「Messaging Server」](#)
- [176 ページの「Communications Express」](#)
- [177 ページの「Web Server」](#)

プラットフォームとサードパーティの要件の詳細については、『Sun Java Enterprise System リリースノート』(<http://docs.sun.com/doc/819-0815?l=ja>) および『Java Enterprise System インストールガイド』(<http://docs.sun.com/doc/819-0808?l=ja>) を参照してください。

Access Manager

表 5-1 は、Access Manager 2005Q1 と旧バージョンとの既知の非互換性について説明します。

表 5-1 Access Manager の互換性

非互換性	影響	コメント
ユーザーが <code>http://<server_name>:<port>/amconsole</code> 経由でログインしたときに Access Manager に表示されるユーザーデータが異なります。	表示される情報が以前のリリースとは異なります。次の情報が表示されなくなりました。 社員番号： ユーザーエイリアスリスト 成功 URL 失敗 URL	
「merge」から「default」に属性を移動する方法が Access Manager GUI インタフェースで変更されました。	表示される情報が以前のリリースとは異なります。次の情報が表示されなくなりました。 これは、Calendar Server とメールの SSO チャンネルの設定で表示されます。 チャンネルの設定は従来と同じです。	更新情報については、『Sun Java System Access Manager 管理ガイド』(http://docs.sun.com/doc/819-1938?l=ja) を参照してください。
Instant Messaging チャンネルを設定する場合の Access Manager の非互換性。	旧バージョンの Identity Server に存在した 2 つの属性「server」と「port」がなくなりました。 <code>server - node3</code> <code>port - 49999</code> これらの属性は手動で追加できます	

Application Server

表 5-2 は、Application Server 8.1 2005Q1 と旧バージョンとの既知の非互換性について説明します。

表 5-2 Application Server 8.1 の互換性の問題

非互換性	影響	コメント
Application Server 8.1 は、Portal Server および Access Manager の 2004Q2 バージョンと互換性がありません。	Application Server をアップグレードする際に、Portal Server と Access Manager をアップグレードします。	
Sun Java System Application Server 7 が J2SE 5.0 では動作しません。	必要に応じて J2SE (1.4.2) をインストールし、J2SE (1.4.2) を使用するように Sun Java System Application Server 7 を設定します。	
インストールディレクトリが変更されました。	現在は /opt/SUNWappserver です。	
ログ / インスタンスディレクトリが変更されました。	現在は /var/opt/SUNWappserver です。	自動ログ解析の更新が必要な場合があります。
ドメインディレクトリが変更されました。	現在は /var/opt/SUNWappserver /domains/domain1 です。	
asadmin コマンドの変更 (stop/start オプション、deploy、list-components など)	stop/start オプション、deploy、list-components など。	『Application Server 管理ガイド』を参照してください。
「アクセス」ログファイルの変更	現在、アクセスログファイルは /var/opt/SUNWappserver /domains/domain1/logs/access ディレクトリに、server_access_log_asadmin_access_log という名前で格納されます。	

表 5-2 Application Server 8.1 の互換性の問題 (続き)

非互換性	影響	コメント
Application Server のデフォルトのポート番号が変更されました。	インストール時に、これらの新しい値がデフォルト値として使用されます。 4848 が 4849 に変更されました。 80 が 8080 に変更されました。 81 が 8181 に変更されました。	

Instant Messaging

表 5-3 は、Instant Messaging 7 2005Q1 と旧バージョンとの既知の非互換性について説明します。

表 5-3 Instant Messaging 7 2005Q1 の互換性の問題

非互換性	影響	コメント
Instant Messaging 7 は、Portal Server および Messaging Server の 2004Q2 バージョンと互換性がありません。	Instant Messaging 7 をアップグレードする際に、Portal Server と Messaging Server をアップグレードします。	
プロトコルが変更されたため、Instant Messaging サーバーの Java ES 3 バージョンは古いバージョンのサーバーと通信できません。	Instant Messaging の連携配備サイトは、すべてのサーバーをアップグレードする必要があります。サーバーのアップグレードをしない既存の配備は、レガシープロトコルの実装を使用するように、コラボレーションセッションのファクトリオブジェクトのプロパティを明示的に設定する必要があります。	

表 5-3 Instant Messaging 7 2005Q1 の互換性の問題 (続き)

非互換性	影響	コメント
現在は、Legacy IM/Presence プロトコルの IM SDK 実装もバンドルされています。	IM SDK API のデフォルトの動作は、XMPP プロトコルベースの実装を使用するようになっています。アプリケーションは、レガシープロトコルの実装を使用するように、コラボレーションセッションのファクトリオブジェクトのプロパティを明示的に設定する必要があります。	
デフォルトのマルチプレクサポートが変更されました。	現在は 5222 です。	
SDK コンポーネントに追加 jar ファイルが含まれるようになりました。IM SDK が JSO (JABBER Stream Objects) ライブラリを使用します。	IM SDK を使用する古いアプリケーションで XMPP を使用する場合は、アプリケーションのクラスパスを変更する必要があります。	
連携配備	プロトコルが変更されたため、新しいバージョンのサーバーは古いバージョンのサーバーと通信できません。	連携配備サイトは、すべてのサーバーをアップグレードする必要があります。サーバー間の通信不能時間が最小限で済むよう、調整してアップグレードする必要があります。
クライアント - サーバー間の通信	プロトコルが変更されたため、古いバージョンのクライアントは新しいバージョンのサーバーと通信できません。その逆も同様です。	このサイトは、クライアントとサーバーの両方を同時にアップグレードする必要があります。
デフォルトのサーバーポートが変更されました。	現在は 45222 です。	
Instant Messaging のデフォルトコードベースの場所が <code>http://<server_name>:<port>/im</code> から変更されました。	現在の場所は、 <code>http://<server_name>:<port>/im</code> です。	

Message Queue

ここでは、Message Queue 3.5 および 3.0.x バージョンから Message Queue 3 2005Q1 に移行する場合に注意する必要がある問題について取り上げます。これらの問題は、次の 2 つの一般的なカテゴリに分けられます。

- [170 ページの「プラットフォームの問題」](#)
- [171 ページの「互換性の問題」](#)

注 バージョン 3.0.1 より前の Message Queue バージョンの移行はサポートされていません。

プラットフォームの問題

ここでは、Solaris および Linux プラットフォームに固有の問題について説明します。

Solaris

Solaris プラットフォームでは、Message Queue 3.0.x および 3.5 バージョンの上に Message Queue 3 2005Q1 をインストールできます。以前のインスタンスデータ (構成プロパティ、フラットファイル持続的ストア、ログファイル、フラットファイルユーザーリポジトリ、およびアクセス制御プロパティファイル) は Message Queue 3 2005Q1 によって使用されます ([171 ページの「互換性の問題」](#)を参照)。

3.0.x の場所にある jar ファイルに依存していた場合、それらのファイルは /usr/share/lib ディレクトリに移動されます。移動されるのは、次の .jar ファイルです。jms.jar、imq.jar、imqxm.jar、activation.jar、saaj-api.jar、saaj-impl.jar、mail.jar、commons-logging.jar、jaxm-api.jar、fscontext.jar。

- Message Queue 3.0 では、これらのファイルは /usr/share/lib/imq ディレクトリにありました。
- Message Queue 3.0.1 では、これらのファイルは /usr/share/lib ディレクトリにあり、シンボリックリンクが /usr/share/lib/imq ディレクトリにありました。

Message Queue 3 2005Q1 には、シンボリックリンクファイルはありません。

Linux

Linux プラットフォームでは、Message Queue 3 2005Q1 にアップグレードする前に既存の Message Queue データを移行する必要があります。また、既存のバージョンの上に Message Queue 3 2005Q1 をインストールしないでください。これは、インストールされるディレクトリ構造が Message Queue 3 2005Q1 で変更されたためです。この

ため、Message Queue 3.0.x および 3.5 から Message Queue 3 2005Q1 へのインスタンスデータ (構成プロパティ、フラットファイル持続的ストア、ログファイル、フラットファイルユーザーリポジトリ、およびアクセス制御プロパティファイル) の移行は、簡単にはできません。これらのデータを簡単に移行できるように、mqmigrate ユーティリティが用意されています。

スクリプトの互換性

スクリプトに以前の Linux インストールへのパスがハードコードされている場合は、そのパスを Message Queue の新しい場所に変更する必要があります。古い場所に代わって新しい場所を指すシンボリックリンクが必要な場合は、sun-mq-compat RPM パッケージをインストールする必要があります。このパッケージは、将来のリリースではサポートされない可能性があります。

互換性の問題

プロトコルの互換性

imqhttp.war アプリケーションを介して、SUN ONE Web Server を Message Queue と連携させて使用する場合、Web Server コンポーネントだけをアップグレードすることはできません。プロトコルが変更されたため、この環境で旧バージョンの Web Server をアップグレードする場合は、Message Queue もアップグレードする必要があります。

ブローカの互換性

Message Queue 3 2005Q1 ブローカは Message Queue 3.0.x または 3.5 のブローカと相互運用できますが、ブローカのプロパティと持続的ストアのスキーマとが変更されました。表 5-4 に示すとおり、Message Queue 3.0.x データの一部は Message Queue 3 2005Q1 と互換性があり、Message Queue 3 2005Q1 への移行後も使用できます。

一般に、Message Queue 3.5 データは Message Queue 3 2005Q1 と互換性があり、Message Queue 3 2005Q1 への移行後も使用できます。

Message Queue 3.0.x または 3.5 から Message Queue 3 2005Q1 に移行する場合、次の点を考慮する必要があります。

- Message Queue 3 2005Q1 ブローカを設定する際には、Message Queue 3.0.x または 3.5 の config.properties ファイルを使用するか、あるいはこれらのファイルを別の場所にコピーしてからプロパティ設定を参照することができます。

- すべての持続的な Message Queue 3.0.x または 3.5 のデータ (メッセージ、送信先、永続サブスクリプション) は、Message Queue 3 2005Q1 ブローカの最初の起動時に、Message Queue 3 2005Q1 データに自動的に変換されます。たとえば、既存の Message Queue 3.0.x または 3.5 の送信先は、既存の属性を保持し、新しい属性のデフォルト値を使用して、Message Queue 3 2005Q1 の送信先に変換されません。

注 次の情報は、Message Queue 3.0.x の移行の場合にのみ適用されます。Message Queue 3.5 の場合、変換はマイナーで、透過的であり、互換性があります。

持続的データの自動移行後、Message Queue 3.0.x のデータは変更されずに残ります。Message Queue 3 2005Q1 ブローカの最初の起動時に、次のオプションを使用して、このデータを削除することができます。

```
imqbrokerd -upgrade-store-nobackup
```

このオプションを使用しない場合、古い持続的ストアを手動で削除する必要があります。

- 組み込み (フラットファイル) データストアの場合、次の場所にある古い持続的ストアを削除します。

```
.../instances/instanceName/filestore/
```

- プラグイン (JDBC 準拠) データストアの場合、次のコマンドを使用して古いテーブルを削除します。

```
imqdbmgr delete oldtbl
```

注 持続的データを Message Queue 3.0.x から Message Queue 3 2005Q1 に移行した場合、移行されたデータは Message Queue 3.0.x ブローカでは使用できません。心配であれば、古い持続的データを上記の手順で削除せずに、安全な場所に保存します。

- **注:** Message Queue 3.0.x だけに適用されます。Message Queue 3 2005Q1 をインストール後、引き続き Message Queue 3.0.x ユーザーリポジトリおよびアクセス制御プロパティファイルを使用することができますが、これらのファイルはインスタンス固有のものとなり、.../instances/instanceName/etc に格納されます。Message Queue 3 2005Q1 インストーラは、Message Queue 3.0.x ファイルを上書きしません。Message Queue 3 2005Q1 ブローカの最初の起動時に、Message Queue 3.0.x ファイルは対応する Message Queue 3 2005Q1 の場所に配置されます。

(『Message Queue 管理ガイド』の付録 A を参照)。Message Queue 3.0.x ユーザーリポジトリおよびアクセス制御プロパティファイルが古い場所に見つからない場合、新しいファイルが `.../instances/instanceName/etc` ディレクトリに作成されます。

- Message Queue 3.0.x または 3.5 ブローカと Message Queue 3 2005Q1 ブローカをクラスタで混在させる場合、マスターブローカを Message Queue 3.0.x または 3.5 ブローカ (どちらか古い方) にする必要があり、クラスタは Message Queue 3.0.x または 3.5 クラスタとして実行します。

表 5-4 Message Queue 3 2005Q1 と Message Queue 3.0.x データの互換性

Message Queue 3.0.x データのカテゴリ	Message Queue 3.0.x データの場所	Message Queue 3 2005Q1 との互換性
ブローカのプロパティ	<code>IMQ_VARHOME/instances/instanceName/properties/config.properties</code>	新しいプロパティが追加され、一部のプロパティ名が変更されました。古いプロパティ名も引き続き認識されます。
持続的ストア: メッセージ、送信先、永続サブスクリプション	<code>IMQ_VARHOME/instances/instanceName/filestore/</code> または JDBC アクセス可能データストア	Message Queue 3 2005Q1 ブローカの最初の起動時に、Message Queue 3 2005Q1 形式に変換されます。 持続的ストアは、 <code>IMQ_VARHOME/instanceName/fs350</code> に格納されます。
セキュリティ: フラットファイルユーザーリポジトリ	<code>/etc/imq/passwd (Solaris)</code> <code>IMQ_HOME/etc/passwd (その他のプラットフォーム)</code>	互換性があります。 ファイルは、最初のブローカの起動時に次の場所にコピーされます。 <code>.../instances/instanceName/etc/passwd</code>
セキュリティ: アクセス制御ファイル	<code>/etc/imq/accesscontrol.properties (Solaris)</code> <code>IMQ_HOME/etc/accesscontrol.properties (その他のプラットフォーム)</code>	互換性があります。ファイルは、最初のブローカの起動時に次の場所にコピーされます。 <code>.../instances/instanceName/etc/accesscontrol.properties</code>

管理されたオブジェクトの互換性

Message Queue 3 2005Q1 では、管理されたオブジェクトが拡張されて新しい属性が追加され、Message Queue 3.0.x および 3.5 の属性の名前が一部変更されました。このため、Message Queue 3.0.x または 3.5 から Message Queue 3 2005Q1 に移行する場合、次の点を考慮する必要があります。

- Message Queue 3.0.x または 3.5 で作成したオブジェクトストアと管理されたオブジェクトはそのまま使用できますが、Message Queue 3 2005Q1 のインストール後、管理されたオブジェクトをアップグレードすることをお勧めします。更新操作の実行時に、管理コンソール (imqadmin) とオブジェクトマネージャコマンド行ユーティリティ (imqobjmgr) が、Message Queue 3.0.x および 3.5 の管理されたオブジェクトを Message Queue 3 2005Q1 の管理されたオブジェクトに変換します。
- Message Queue 3 2005Q1 クライアントランタイムは Message Queue 3.0.x および 3.5 の管理されたオブジェクトを検索し、インスタンス化して、Message Queue 3 2005Q1 クライアントで使用できるように変換します。ただし、検索実行元のオブジェクトストア内にある Message Queue 3.0.x および 3.5 の管理されたオブジェクトは、変換対象になりません。
- 既存の Message Queue 3.0 および 3.5 クライアント (アプリケーションとコンポーネントの両方、またはそのいずれか) - つまり、管理されたオブジェクトを直接インスタンス化するクライアント - は Message Queue 3 2005Q1 と互換性があります。ただし、管理されたオブジェクトの新しい属性を使用する場合は、そのクライアントを書き換える必要があります。管理されたオブジェクトの属性の詳細については、『Message Queue Developer's Guide for Java Clients』 (<http://docs.sun.com/doc/819-0068>) の第 2 章、および『Message Queue 管理ガイド』 (<http://docs.sun.com/doc/819-2217?l=ja>) の第 16 章を参照してください。
(Message Queue 3.0.x および 3.5 クライアントを Message Queue 3 2005Q1 で再コンパイルすると、Message Queue 3 2005Q1 で名前が変更された Message Queue 3.0.x および 3.5 属性が表示される。古い名前も使用できる)
- 管理されたオブジェクトの属性値をコマンド行オプションで設定する、Java クライアント開始スクリプトには、Message Queue 3 2005Q1 との互換性があります。ただし、管理されたオブジェクトの新しい属性を使用する場合は、そのクライアントを書き換える必要があります。管理されたオブジェクトの属性の詳細については、『Message Queue Developer's Guide for Java Clients』 (<http://docs.sun.com/doc/819-0068>) の第 2 章、および『Message Queue 管理ガイド』 (<http://docs.sun.com/doc/819-2217?l=ja>) の第 16 章を参照してください。

管理ツールの互換性

新しいコマンドおよび管理機能が追加されたため、Message Queue 3 2005Q1 の管理ツール (管理コンソールとコマンド行ユーティリティ) は Message Queue 3 2005Q1 プローカでのみ動作します。ただし、すべての Message Queue 3.0.x および 3.5 のコマンドおよびコマンドオプションが引き続きサポートされます。

クライアントの互換性

Message Queue 3.0.x または 3.5 から Message Queue 3 2005Q1 にアップグレードする場合、Java クライアントに関して、次の点を考慮する必要があります。

- Message Queue 3 2005Q1 ブローカでは Message Queue 3.0.x または 3.5 クライアントがサポートされる (ただし、Message Queue 3 2005Q1 での追加機能は使用できない)。
- Message Queue 3 2005Q1 Java クライアントは Message Queue 3.0.x または 3.5 ブローカに接続できる (ただし、Message Queue 3 2005Q1 での追加機能は使用できない)。
- JDK 1.3 または 1.4 で構築された Java クライアントは、JRE 1.4 を実行するブローカと相互運用できます。ただし、セキュリティ保護された (SSL ベースの) ブローカへの接続を使用するクライアントが JDK 1.4 (追加の JSSE および JNDI ライブラリを含む) で構築されていない場合、これらのライブラリを追加する必要があります。このライブラリは、各プラットフォームで次のとおり提供されます。
 - Solaris の場合、SUNWiqsup パッケージ (ただし、デフォルトではインストールされない)。
 - Linux の場合、sun-mq-sup RPM パッケージ (ただし、デフォルトではインストールされない)。
 - Windows の場合、カスタムインストールの一部としてインストールされる。
- C クライアントコンポーネントは、Message Queue 3.0.x ブローカに接続できません。これらは、トライアルライセンスまたはエンタープライズライセンスで実行される Message Queue 3.5、3.5 SPx、または 3 2005Q1 ブローカでのみサポートされます。

Messaging Server

表 5-5 は、Messaging Server 6 2005Q1 と旧バージョンとの既知の非互換性について説明します。

表 5-5 Messaging Server 6 の互換性

非互換性	影響	コメント
/opt/SUNWmsgsr/lib にある comm_dssetup.pl が動作せず、/opt/SUNWcomds を参照します。	comm_dssetup.pl ツールは、独自のパッケージに移動しました。	comm_dssetup パッケージをインストールし、その場所からツールを実行します。 Solaris では、デフォルトの場所は /opt/SUNWcomds です。Linux では、デフォルトの場所は /opt/sun/comms/dssetup です。
commcli の設定プログラム (現在は、Delegated Administrator) が変更されました。	次の現在のプログラムの場所を参照します。 /opt/SUNWcomm/sbin/config-commda	

Communications Express

表 5-6 は、Communications Express 2005Q1 と旧バージョンとの既知の非互換性について説明します。

表 5-6 Unified Web Client の互換性

非互換性	影響	コメント
Communications Express の今回のリリースは、Calendar Server および Messaging Server の 2004Q2 バージョンとは互換性がありません。	Communications Express のアップグレード時に、Calendar Server および Messaging Server をアップグレードします。	

Web Server

表 5-7 は、Web Server 6 2005Q1 と旧バージョンとの既知の非互換性について説明します。

表 5-7 Web Server 6 の互換性

非互換性	影響	コメント
Web Server 6 は、Message Queue の 2004Q2 バージョンとは互換性がありません。	Web Server 6 のアップグレード時に、Message Queue をアップグレードします。	

Web Server

以前の Java Enterprise System リリース

この付録では、Java Enterprise System リリースの内容について説明します。この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [179 ページの「Java ES 2003Q4」](#)
- [181 ページの「Java ES 2004Q2」](#)
- [184 ページの「Java ES 2005Q1」](#)

Java ES 2003Q4

この節では、Java Enterprise System 2003Q4 の内容について説明します。

コンポーネント製品

Sun Open Network Environment (Sun ONE) および Sun Cluster コンポーネント製品は、分散型のエンタープライズアプリケーションをサポートするために必要なインフラストラクチャサービスを提供します。これらのコンポーネント製品は、次のとおりです。

- Sun Cluster 3.1 と Sun ONE 用 Sun Cluster エージェント
- Sun ONE Administration Server 5.2
- Sun ONE Application Server 7, Update 1
- Sun ONE Calendar Server 6.0
- Sun ONE Directory Server 5.2
- Sun ONE Directory Proxy Server 5.2
- Sun ONE Identity Server 6.1

- Sun ONE Instant Messaging 6.1
- Sun ONE Message Queue 3.0.1 Service Pack 2
- Sun ONE Messaging Server 6.0
- Sun ONE Portal Server 6.2
- Sun ONE Portal Server, Secure Remote Access 6.2
- Sun ONE Web Server 6.1

共有コンポーネント

共有コンポーネントは、コンポーネント製品が依存するローカルサービスとテクノロジーサポートを提供します。コンポーネント製品をインストールすると、そのコンポーネントに必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、Java Enterprise System インストーラは自動的にこれらのコンポーネントをインストールします。

Java Enterprise System には次の共有コンポーネントが含まれます。

- Ant (Jakarta ANT Java/XML ベースの構築ツール)
- Apache Common Logging
- ICU (International Components for Unicode)
- J2SE™ platform 1.4.1_06 (Java 2 Platform, Standard Edition)
- JAF (JavaBeans™ Activation Framework)
- JATO (Sun ONE Application Framework)
- JavaHelp™ Runtime
- JAXM (Java API for XML Messaging) Client Runtime
- JAXP (Java API for XML Processing)
- JAXR (Java API for XML Registries)
- JAX-RPC (Java APIs for XML-based Remote Procedure Call)
- JSS (Java Security Services)
- KT 検索エンジン
- LDAP C Language SDK
- NSPR (Netscape Portable Runtime)
- NSS (Network Security Services)

- SAAJ (SOAP with Attachments API for Java)
- SASL (Simple Authentication and Security Layer)
- XML C Library (libxml)

注 また、Perl も Application Server と Directory Server のシステムに必要ですが、Java Enterprise System 共有コンポーネントとして自動的にインストールされません。

Java ES 2004Q2

この節では、Java Enterprise System 2004Q2 の内容について説明します。

コンポーネント製品

コンポーネント製品は、分散型のエンタープライズアプリケーションをサポートするために必要なインフラストラクチャサービスを提供します。Java Enterprise System を特定のホストにインストールするときは、配備の全体的なアーキテクチャに基づいて、そのホストにインストールするコンポーネント製品を選択します。

Java Enterprise System 2005Q1 には、次のコンポーネント製品が含まれます。

通信サービスと共同作業サービス

- Sun Java System Messaging Server 6 2004Q2
- Sun Java System Calendar Server 6 2004Q2
- Sun Java System Instant Messaging 6 2004Q2
- Sun Java System Portal Server 2004Q2
- Sun Java System Portal Server Mobile Access 2004Q2
- Sun Java System Portal Server Secure Remote Access 2004Q2
- Sun Java System Communications Express 6 2004Q2

Web サービスとアプリケーションサービス

- Sun Java System Application Server 7.0 Update 3 (Standard および Platform Edition)
- Sun Java System Web Server 6 2004Q1 Update 1 Service Pack 2
- Sun Java System Message Queue 3.5 SP1 (Platform および Enterprise Edition)

ディレクトリサービスとアイデンティティサービス

- Sun Java System Identity Server 2004Q2
(Sun Java System Communications Services 6 2004Q2 ユーザー管理ユーティリティを含む)
- Sun Java System Directory Server 5 2004Q2
- Sun Java System Directory Proxy Server 5 2004Q2

可用性サービス

- Sun Cluster 3.1 4/04 および Sun Java System 用 Sun Cluster エージェント

管理サービス

- Sun Java System Administration Server 5 2004Q2
- Sun Remote Services Net Connect 3.5

Sun Cluster、Sun Cluster Agents、および Sun Remote Services Net Connect は Linux オペレーティングシステムでは使用できません。

共有コンポーネント

共有コンポーネントは、コンポーネント製品が依存するローカルサービスとテクノロジーサポートを提供します。コンポーネント製品をインストールすると、そのコンポーネントに必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、Java Enterprise System インストーラは自動的にこれらのコンポーネントをインストールします。

Java Enterprise System 2005Q1 には次の共有コンポーネントが含まれます。

- Ant (Jakarta ANT Java/XML ベースの構築ツール)
- Apache Common Logging
- Apache SOAP (Simple Object Access Protocol)
- ICU (International Components for Unicode)
- J2SE™ platform 1.4.2_04 (Java 2 Platform, Standard Edition)
- JAF (JavaBeans™ Activation Framework)
- JATO (Java Application Framework)
- JavaHelp™ Runtime
- JAXB (Java Architecture for XML Binding)
- JAXM (Java API for XML Messaging) Client Runtime

- JAXP (Java API for XML Processing)
- JAXR (Java API for XML Registries)
- JAX-RPC (Java APIs for XML-based Remote Procedure Call)
- JCAP (Java Calendar API)
- JSS (Java Security Services)
- KT 検索エンジン
- LDAP C Language SDK
- LDAP Java SDK
- NSPR (Netscape Portable Runtime)
- NSS (Network Security Services)
- Perl LDAP (NSPERL を含む)
- SAAJ (SOAP with Attachments API for Java)
- SAML (Security Assertions Markup Language)
- SASL (Simple Authentication and Security Layer)
- SNMP (Simple Network Management Protocol) Peer
- Sun Explorer Data Collector
- XML C Library (libxml)

Java ES 2005Q1

この節では、Java Enterprise System 2005Q1 の内容について説明します。

選択可能なコンポーネント

Java ES インストーラのコンポーネント選択ページでは、選択可能なコンポーネントが提供するサービスごとにグループ化されています。また、次のリストは各コンポーネントと共にインストールされるサブコンポーネントを示します。

通信サービスと共同作業サービス

- Sun Java System Messaging Server 6 2005Q1
- Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1
- Sun Java System Instant Messaging 7 2005Q1
 - Instant Messaging サーバーコア (サーバーおよびマルチプレクサソフトウェアを含む)
 - Instant Messaging リソース
 - Access Manager Instant Messaging サービス
- Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1
- Sun Java System Portal Server Secure Remote Access 6 2005Q1
 - Secure Remote Access コア
 - ゲートウェイ
 - Netlet プロキシ
 - Rewriter プロキシ
- Sun Java System Communications Express 2005Q1
- Sun Java System Directory 準備スクリプト

Web サービスとアプリケーションサービス

- Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q1
 - ドメイン Administration Server
 - Application Server ノードエージェント
 - コマンド行管理ツール

- 負荷分散プラグイン
設定時の選択により、Web Server または Apache Web Server のいずれかで使用できます。デフォルトは Web Server です。
- PointBase
- サンプルアプリケーション
- Sun Java System Web Server 6 2005Q1 Update 1 Service Pack 4
- Sun Java System Message Queue 3 2005Q1

ディレクトリサービスとアイデンティティサービス

- Sun Java System Access Manager 2005Q1
Calendar Server および Messaging Server 用の Delegated Administrator プロビジョニングツールは、Access Manager と共に自動的にインストールされます。
 - アイデンティティ管理およびポリシーサービスコア (Delegated Administrator ユーティリティを含む)
 - Access Manager 管理コンソール
 - 連携管理の共有ドメインサービス
 - Access Manager SDK
- Sun Java System Directory Server 5 2005Q1
- Sun Java System Directory Proxy Server 5 2005Q1

可用性サービス

- Sun Cluster 3.1 9/04
 - Sun Cluster コア
- Sun Java System 用 Sun Cluster エージェント
 - HA/Scalable Sun Java System Web Server
 - HA Sun Java System Message Queue
 - HA Sun Java System Calendar Server
 - HA Sun Java System Administration Server
 - HA Sun Java System Directory Server
 - HA Sun Java System Messaging Server
- HADB (高可用性セッションストレージで使用)

管理サービス

- Sun Java System Administration Server 5 2005Q1

- SunSM Remote Services Net Connect 3.1.1

注 Sun Cluster, Sun Cluster エージェント、および Sun Remote Services Net Connect は Solaris 10 または Linux オペレーティングシステムでは利用できません。

Sun Remote Services Net Connect は Solaris x86 プラットフォームでは利用できません。

共有コンポーネント

共有コンポーネントは、選択可能なコンポーネントに対してローカルサービスとテクノロジサポートを提供します。Java ES コンポーネントをインストールすると、そのコンポーネントに必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、インストーラは自動的にこれらのコンポーネントをインストールします。

今回の Java ES のリリースには、次の共有コンポーネントが含まれています。

- Ant (Jakarta ANT Java/XML ベースの構築ツール)
- Apache SOAP (Simple Object Access Protocol) Runtime
- Berkeley Database
- 共通エージェントコンテナ
- ICU (International Components for Unicode)
- J2SETM (Java 2 Platform, Standard Edition) platform 5.0
- JAF (JavaBeansTM Activation Framework)
- JATO (Java Studio Enterprise Web Application Framework)
- JavaHelpTM Runtime
- JavaMailTM Runtime
- JAXB (Java Architecture for XML Binding) Runtime
- JAXP (Java API for XML Processing)
- JAXR (Java API for XML Registries) Runtime
- JAX-RPC (Java API for XML-based Remote Procedure Call) Runtime
- JCAPI (Java Calendar API)
- JDMK (Java Dynamic ManagementTM Kit) Runtime
- JSS (Java Security Services)

- KTSE (KT Search Engine)
- LDAP C SDK
- LDAP Java SDK
- NSPR (Netscape Portable Runtime)
- NSS (Network Security Services)
- Perl LDAP (NSPERL を含む)
- SAAJ (SOAP with Attachments API for Java)
- SAML (Security Assertions Markup Language)
- SASL (Simple Authentication and Security Layer)
- SNMP (Simple Network Management Protocol) Peer
- Sun Explorer Data Collector (Solaris のみ)
- Sun Java Monitoring Framework
- Sun Java Web Console
- Tomcat Servlet JSP Container
- XML C Library (libxml)
- WSCL (Web services Common Library)

用語集

このマニュアルセットで使用される用語の完全なリストについては、『Java Enterprise System 用語集』(<http://docs.sun.com/doc/819-1933?l=ja>)を参照してください。

索引

A

Access Manager

- commadmin ユーティリティ, 116
- Identity Manager との共存, 67
- Linux アップグレード RPM, 125
- SSL ポート, 53
- Web コンテナ, 24
- アップグレード, 50 ~ 54
- アップグレードの確認, 130
- 移行, 144
- 依存, 22, 24
- クライアントディテクションの有効化, 129
- サブコンポーネント, 185
- パッチ, 51, 55

Access Manager SDK

- アップグレード, 63 ~ 65
- 設定, 64

Administration Server

- アップグレード, 68, 70
- 移行, 144
- 依存, 22, 24
- インスタンスの停止, 140
- インストール, 157
- パッチ, 70

alarms データベース, 149

am2bak スクリプト, 59

AMConfig.properties 設定ファイル, 63

amconfig スクリプト, 53, 56, 57, 60, 64, 67

amupgrade スクリプト, 53, 57, 58, 61, 66

Ant, 180, 182, 186

Ant (Jakarta ANT Java/XML ベースの構築ツール)、
「ANT」を参照

Apache Common Logging, 180, 182

Apache SOAP Runtime, 186

Application Server

- Communications Express で使用, 24
- Perl の要件, 181
- アップグレード, 145
- 移行, 145
- 依存, 22, 24
- サブコンポーネント, 184

B

backout-newconfig スクリプト, 94

BEA WebLogic Server, 22, 24

Berkeley Database, 150, 186

C

Calendar Server

- アップグレード, 70
- 移行, 145
- 依存, 22, 24

calprops データベース, 149

commadmin ユーティリティ, 116

comm_dssetup.pl スクリプト, 119

Communications Express

Web コンテナ, 24

依存, 23, 24

バックアウト, 94

cs5migrate_recurring ユーティリティ, 146

cs5migrate ユーティリティ, 146

csbackup ユーティリティ, 150

D

db2bak ユーティリティ, 52

db_recover ユーティリティ, 150

db_upgrade ユーティリティ, 151

Delegated Administrator, 185

Directory Access Router、アップグレード, 157

Directory Proxy Server

アップグレード, 70

移行, 157

依存, 23, 24

パッチ, 70

Directory Server, 70

Perl の要件, 181

アップグレード, 70, 156

移行, 156

依存, 23, 24

セットアップ用 Perl スクリプト, 119

データのバックアップ, 52

パッチ, 70

DIT、アップグレード, 57

E

events データベース, 149

H

HADB, 185

I

IBM WebSphere Application Server, 24

ics2migrate, 152

ics2migrate ユーティリティ, 149

ICU, 117, 118, 180, 182, 186

Identity Manager、Access Manager との共存, 67

Identity Server

SP1 のバックアウト, 50, 54

アップグレード, 54 ~ 62

コンソール, 130

バックアップ, 59

複数インスタンスのアップグレード, 65, 66

install-newconfig スクリプト, 92, 120

installpatch スクリプト, 56, 64

Instant Messaging

アップグレード, 159

依存, 23

サブコンポーネント, 184

International Components for Unicode、「ICU」を参照

iPlanet Calendar Server 2.x, 移行, 146

iPlanet Calendar Server、移行, 149

J

J2EE, 131

J2SE, 180, 182, 186

J2SE プラットフォーム、移行, 162

JABBER Stream Objects、「JSO」を参照

JAF, 180, 182, 186

JATO, 180, 182, 186

Java 2 Platform, Standard Edition、「J2SE」を参照

Java API for XML Messaging、「JAXM」を参照

Java API for XML Processing、「JAXP」を参照

Java API for XML Registries、「JAXR」を参照
Java APIs for XML-based Remote Procedure Call、「JAX-RPC」を参照
JavaBeans Activation Framework、「JAF」を参照
Java ES 2003Q4
共有コンポーネント, 180
コンポーネント製品, 179
Java ES 2004Q2
共有コンポーネント, 182
コンポーネント製品, 181
Java ES 2005Q1
共有コンポーネント, 186
選択可能なコンポーネント, 184
JavaHelp Runtime, 180, 186
JavaMail Runtime, 186
Java Security Services、「JSS」を参照
Java Web Services Developer Pack、「JWS DP」を参照
JAXB, 131, 182, 186
JAXM, 180, 182
JAXP, 131, 180, 183, 186
JAXR, 131, 180, 183, 186
JAX-RPC, 131, 180, 183, 186
JCAPI, 183, 186
JDMK, 186
JSO, 169
JSP、カスタマイズ, 56
JSS, 118, 131, 180, 183, 186
JSSE, 86
JWS DP, 131

K

KTSE, 180, 183, 187
KT Search Engine、「KTSE」を参照

L

LDAP C Language SDK, 180, 183, 187

LDAP Java SDK, 183, 187
LDAP、データベース, 145
Legato Networker®, 150
Liberty 個人プロファイルサービス, 130
libxml, 181, 183, 187
Linux
RPM のアップグレード, 34, 125
パッチ, 56
利用可能なサービス, 186

M

mbxlist データベース, 120
Message Queue
移行, 159
依存, 23, 24
Messaging Server
アップグレード, 70, 160
依存, 23, 24
Monitoring Framework, 187
mqmigrate スクリプト, 103, 104, 110, 111
mqupgrade スクリプト, 102, 103, 106, 107, 113, 114

N

Netscape Calendar Server 4.x, 移行, 146
Netscape Portable Runtime、「NSPR」を参照
Netscape Security Services、「NSS」を参照
NSPERL, 183
NSPR, 118, 180, 183, 187
NSS, 53, 86, 118, 180, 183, 187

P

patch-config スクリプト, 92, 93, 120
Perl, 181, 183, 187
Perl の要件, 181

Portal Server

Secure Remote Access, [23, 24, 160](#)

Secure Remote Access サブコンポーネント, [184](#)

Web コンテナ, [24](#)

アップグレード, [160](#)

移行, [160](#)

依存, [23, 24](#)

pre61to62upgrade スクリプト, [53, 59, 66, 130](#)

R

Red Hat Package Manager, 「RPM」を参照

RPM

Linux 共有コンポーネント, [34](#)

定義, [108](#)

S

SAAJ, [131, 181, 183, 187](#)

SAML, [58, 62, 65, 183, 187](#)

SASL, [181, 183, 187](#)

Security Assertion Markup Language, 「SAML」を参照

serverconfig.xml 設定ファイル, [63](#)

Simple Authentication and Security Layer, 「SASL」を参照

Simple Network Management Protocol, 「SNMP」を参照

SNMP, [183, 187](#)

SOAP, [182, 186, 187](#)

SOAP with Attachments API for Java, 「SAAJ」を参照

Solaris

サポート, [18](#)

パッチ, [18, 31, 32](#)

srapNetlet サービス, [133](#)

srapProxylet サービス, [133](#)

SSL ポート, [53](#)

StorEdge Enterprise Backup ソフトウェア, [150](#)

Sun Cluster

アップグレード, [160](#)

移行, [160](#)

依存, [24](#)

Sun Cluster エージェント、サブコンポーネント, [185](#)

Sun Explorer Data Collector, [183, 187](#)

Sun Java Monitoring Framework, [187](#)

Sun Java Web Console, [187](#)

Sun ONE

コンポーネント製品, [179](#)

Sun ONE Application Framework, 「JATO」を参照

Sun Open Network Environment, 「Sun ONE」を参照

Sun Remote Services Net Connect

移行, [161](#)

依存, [23](#)

SUNWjss, [53](#)

SUNWpr, [53](#)

SUNWtls, [53](#)

SUNWwbsvr, [141](#)

T

todos データベース, [149](#)

Tomcat Servlet JSP Container, [187](#)

U

UNIX、頻繁にカスタマイズされるファイル, [97](#)

Upgrade61DifTo62 スクリプト, [53, 61, 66, 131](#)

upgradePS スクリプト, [133](#)

upgradeSRA スクリプト, [132](#)

V

VxVM, [139](#)

W

Web Server

- Communications Express で使用, 24
- アップグレード, 161
- 移行, 161
- 依存, 23, 24
- インスタンスの停止, 140

Web services Common Library、「WSCL」を参照

Web コンテナ

- アップグレード, 53
- コンポーネントの依存関係, 24
- バックアップ, 52, 127
- マニュアル, 128

Windows、頻繁にカスタマイズされるファイル, 97

WSCL, 187

X

XML C Library、「libxml」を参照

あ

アップグレード

- Directory Access Router, 157
- HTTP リスナー, 84
- HTTP リスナーと IIOP リスナー, 85
- Linux 上, 75, 76
- Solaris 上, 69, 70
- Web コンテナ, 53
- 依存, 22, 26
- 共有コンポーネント, 52
- サーバー, 25
- ニーズの決定, 21
- 複数の Identity Server インスタンス, 65 ~ 66
- 方法の選択, 21
- ポートの競合, 86

アップグレード後スクリプト, 61, 66, 131

アップグレード前スクリプト, 59, 130

アップグレード前のタスク, 21

い

移行

- Access Manager, 144
- Administration Server, 144
- Application Server, 145
- Calendar Server, 145
- Directory Access Router, 157
- Directory Proxy Server, 157
- Directory Server, 156
- J2SE プラットフォーム, 162
- Message Queue, 159
- Portal Server、Secure Remote Access, 160
- Sun Cluster, 160
- Sun Remote Services Net Connect, 161
- Web Server, 161
- 共有コンポーネント, 162
- 要件, 149
- 例, 154

依存、コンポーネント, 22, 24, 26

インストール

- Administration Server, 157

インストールされているソフトウェアの検出, 25

か

概要

- 共有コンポーネント, 180, 182, 186
- コンポーネント, 184
- コンポーネント製品, 179, 181

確認

- アップグレード, 66
- 既存のソフトウェア, 25

カスタマイズ JSP, 56

カレンダーデータの移行、Calendar Server 2.x, 149

カレンダーデータベース, 146, 150, 151

- バックアップ, 89

環境ファイル, 121

管理コンソールのヘルプファイル, 129

き

記号の表記規則, 14

規則

記号, 14

シェルプロンプト, 15

表記, 14

共存するアプリケーション, 67

共通エージェントコンテナ, 186

共有コンポーネント, 180, 182

Java ES 2003Q4, 180

Java ES 2004Q2, 182

Java ES 2005Q1, 186

アップグレード, 52

移行, 162

依存, 24

概要, 180, 182

クラスタ, 29

リスト, 186

目的, 179, 181

コンポーネントのアップグレード, 143, 161

Application Server, 145

Directory Server, 156

Identity Server, 54

Instant Messaging, 159

Messaging Server, 160

Portal Server, 160

Portal Server、Secure Remote Access, 160

Sun Cluster, 160

Web Server, 161

さ

サーバー、アップグレード, 25

サービス

srapNetlet, 133

srapProxylet, 133

サポート、Solaris, 18

く

クライアントディテクション、有効化, 129

クラスタのアップグレード, 82

こ

構文、ics2migrate, 152

互換性情報, 165

コンソール、Identity Server, 130

コンポーネントクラスタ、共有, 29

コンポーネント製品

Java ES 2003Q4, 179

Java ES 2004Q2, 181

Sun ONE, 179

アップグレード, 143, 161

アップグレードの順序, 26

依存, 24, 26

概要, 179, 181

データベース, 145

し

シェルプロンプトの表記規則, 15

す

スクリプト

am2bak, 59

amconfig, 53, 56, 57, 60, 64, 67

amupgrade, 53, 57, 58, 61, 66

backout-newconfig, 94

comm_dssetup.pl, 119

install-newconfig, 92, 120

installpatch, 56, 64

mqmigrate, 103, 104, 106, 110, 111

mqupgrade, 102, 103, 107, 113, 114

patch-config, 92, 93, 120

pre61to62upgrade, 53, 59, 66, 130

Upgrade61DitTo62, 53, 61, 66, 131

upgradePS, 133

upgradeSRA, 132
アップグレード後, 61, 66, 131
アップグレード前, 59, 130

せ

設定

Access Manager SDK, 64

設定ファイル

復元, 122

選択可能なコンポーネント、Java ES 2005Q1, 184

て

停止

Administration Server のインスタンス, 140

Web Server のインスタンス, 140

ディスクバリサービス, 130

データの移行、Calendar Server 2.x, 149

データベース

alarms, 149

Berkeley, 150

calprops, 149

events, 149

LDAP, 145

mboxlist, 120

todos, 149

アップグレード, 139

カレンダー, 146, 151

コンポーネント, 145

デフォルトのディレクトリ, 89

破壊, 151

パスワード, 86

バックアップ, 97

メッセージストア, 121

パスワード要件, 52, 58, 86

バックアウト

Administration Server, 73, 75

Communications Express, 94

Directory Proxy Server, 73, 75

Directory Server, 73, 75

Identity Server SP1, 50, 54

Linux 上, 75

Solaris 上, 69, 73

パッチ, 73, 91, 133

バックアップ

AMConfig.properties 設定ファイル, 63

Directory Server データ, 52

Identity Server, 59

serverconfig.xml 設定ファイル, 63

Web コンテナのカスタマイズファイル, 52, 127

カレンダーデータベース, 89, 150

管理コンソールのヘルプファイル, 129

現在のインストール, 96, 97

データ, 25

データベース, 97

パッチ, 70

Access Manager, 51, 55

Administration Server, 70

Directory Proxy Server, 70

Linux, 56

Solaris, 31, 32

共有コンポーネント, 29

バックアウト, 73, 91, 133

ひ

非出力モード, 155

表記上の規則, 14

頻繁にカスタマイズされるファイル, 97

ふ

復元、設定ファイル, 122

は

破壊されたデータベース, 151

ま

マニュアル, 16

Application Server 7.0 Update 3, 128

Web Server 6.1 SP2, 128

概要, 16

ろ

ログファイルの確認, 130

め

メッセージストアデータベース, 121

も

目的, 180, 182

ゆ

ユーティリティ

cs5migrate, 146

cs5migrate_recurring, 146

csbackup, 150

db_recover, 150

db_upgrade, 151

よ

要件

Perl, 181

移行, 149

れ

例、移行, 154